

## 目次 Contents

1.	目次／Contents	1
2.	表記について	2
3.	学生会議とは	3
4.	日本ケニア学生会議の魅力	4
5.	Japan Kenya Student Conference	6
6.	日本ケニア学生会議とは	1 1
7.	About Japan Kenya Student Conference	1 4
8.	第二回日本ケニア学生会議参加者名簿／The 2 <sup>nd</sup> JKSC Name List	1 6
9.	創設者、JKSC ケニア側事務局代表、学生アドバイザー経歴	1 8
1 0.	開会にあたって／On the Occation of the Opening	1 9
1 1.	日程／Schedule in Kenya	2 8
1 2.	分科会／Section Meeting	3 0
1 3.	プロジェクト／Project	8 7
1 4.	日録	1 2 3
1 5.	個人エッセイ／Personal Essay	1 4 1
1 6.	第三回に向けて	1 8 1
1 7.	協議書／Agreement	1 8 2
1 8.	謝辞	1 8 3
1 9.	規約／Constitution	1 8 5
2 0.	編集後記	1 9 5

## 表記について

J K S C (Japan Kenya Student Conference) 日本ケニア学生会議

C a n D o : アフリカ地域開発市民の会

K E M R I : ケニア中央医学研究所

U N E P (United Nations Environment Programme) 国連環境計画

J I C A (Japan International Cooperation Agency) 国際協力事業団

J O C V (Japan Overseas Cooperation Volunteers) 青年海外協力隊

J B I C (Japan Bank For International Cooperation) 国際協力銀行

U S I U - A (United States International University-Africa)

S A C (Student Affairs Council) U S I U - A の生徒会

B r a m w e l l (ブラムウェル又はブラマイル) = B r a m (ブラム)

\*ケニア側メンバーの名前

マタトゥー=マタツー・・・ミニバスを改造したもので、10人～20人くらい乗り込む。庶民の足として活躍。

<ケニヤ・ケニア>

本書ではスワヒリ語読みの“ケニヤ”、英語読みの“ケニア”がともに使われている。

<プラネットサファリ>

我々メンバーが活動の拠点としていた旅行会社。創設者の後藤とプラネットサファリの社長が友人であったため場所を使わせてもらっていた。

<ケニアの学校制度>

プライマリースクール(小学校)8年制、セカンダリースクール(中学校)4年制、日本でいう高校はなし。そして、4年制の大学。小学校までが義務教育。公立の大学への進学は、セカンダリースクール卒業後2年間待たなければならないことが多い。

---

## 学生会議とは ～学生にしかできないこと～

日本ケニア学生会議創設者 後藤 千枝

---

現在、日本には、日米学生会議をはじめ、2ヶ国間、他国間を問わず、十指に余る学生会議、学生団体がある。それぞれ独自の理念と哲学をもって、相互に全く独立して活動を行っている。学生会議と、他の学生協会、フォーラム等などの違いは、デパートと専門店の良さに例えてみることができる。例えば、デパートの窓口は広い。一方、専門店では、文字通り、専門のものを扱っている。医学生の集まりだったら、すぐに難民キャンプに行き、医療協力をすることも可能、法学部生の団体なら、司法制度の対話なども他国との学生と可能だ。これからの時代、NGOとODAが協力しあっていかねばならない。従って、横とのつながりが可能な、学生会議連絡協議会のような存在は有り難い限りである。外国のことを学び、また自分も貢献し、外国の人々と交わる方法は色々ある。留学、オリンピックに代表されるスポーツとしての交流、合唱団、枚挙にいとまない。既存、官製の交流団体に所属することも可能である。

なぜ、その中で、学生会議なのか・・・なぜ、学生、とりわけ大学生なのだろうか。高校生の会議、銀行員の会議、外交官の会議では得られない意義とは何なのだろうか。

まず、知的成熟度の観点からは、「親善は中学生、高校生、いや小学生以下でもできるが、対話は大学生以上でないとできない」といえるであろう。政治、経済、文化においてある程度の知識の蓄積が必要である。

次に「利害関係」の観点からは、国益、会社などの組織の利益を背負わず、その議論が「利害関係の調整」にならない社会階層は、大学生以外に見当たらない。かつ、大学生は、将来の社会の中核を担い、かつ世界共通の資格である。さらに、大学生は、公共の財産である。このように「学生」と「会議」が結合すれば、その歴史的、社会的意義というものは、我々自身が想像するよりはるかに大きいのではないだろうか。それだけに、我々は学生会議の公的性格を確認し、その使命を正しく果たさねばならない。単なるサークルとはわけが違うのだ。

財団から助成金をいただいている団体が大半を占めている。どこからも一切、お金の援助を現段階では受けていない団体も、お金ではないが、人々からの支援を受け、社会の恩恵を被っている。すなわち、それだけ、我々は、社会から期待され応援されているのだ。当然、よりよい社会、よりよい世界、よりよい未来の為に我々は還元すべしだ。

人間の真価が問われるのも、この学生会議や団体ではならぬことであろう。会社ならクビだが、遅刻をしたり、定例会に無断で欠席しようが、学生は誰にも咎められない。また、何の規制力も無いのだ。ペナルティが全く無い。社会から支援され応援されているのにも関わらずだ。正に、人間の性質が見事にくつきりであるのであ

る。だからこそ私は学生諸君に申し上げたい。さらに自覚と責任をもって行動し発言するように・・・と。

よりよい社会・世界・未来のために、

**Let's Take Action Together !!!**

---

## 日本ケニア学生会議の魅力

日本ケニア学生会議創立者

後藤 千枝

---

前ページで、学生会議について、説明させて頂いた。その中で、JKSC（日本ケニア学生会議）の魅力とは一体何か・・・

●JKSCは、よりよい社会・世界・未来のために、**TAKE ACTION**する。

我々のモットーは、LET'S TAKE ACTION TOGETHER。一緒に活動しよう。スワヒリ語でTUCHUKUE HATUA PAMOJA!!!

●JKSCは、学生の、学生による、学生のための会議ではなく、社会、世界、未来、人々のための会議、活動である。

●JKSCは、「インターカレッジの、東京・ナイロビだけではなく日本・ケニア全国の学生を代表する」国際交流・国際協力団体である。

すなわち、日本・ケニアを代表している。日本・ケニアの、すべての大学生（国籍問わず）に参加の道が開かれている。よって、広報活動は、大学の規模、所在地の何処を問わず全ての大学のキャンパスに行わねばならない。従って、単なる大学間のみの学生会議、一大学のクラブや、単なる研修旅行と大いに異なった公的性格が付されている。この公的性格があるから、社会は援助を与えてまで成功させようとするのであり、日本・ケニアを代表と見なすからこそ相手国の学生は貴重な時間を割いてまで議論に応じ、日本・ケニアに行こうとするのである。（JKSCでは、今年、会議がケニアで開催されたら、翌年は日本で開催される。ただし、創設期の3年間は、ケニア開催）

●非営利・非政治の国際交流団体のみにとどまらず、国際協力をも視野にいれている。

単に学術討論を行うだけではなく、同じ地球上に生きる、地球市民として、世界、社会、日本・ケニア全体、相手国を真の受益者としてJKSC参加者は貢献する。単に現地での奉仕活動・国際協力のみならず、戦争防止、社会全体の相互理解の邁進に目に見える実績を上げることをも目的としている。先般の国会で成立したNPO法に従い、より公益性の強い社会的に認知されうる団体を目指す。さらに期間中は、井戸掘り、施設訪問などの国際協力の活動を行い、会議の期間以外にも日本・

ケニア国内で、ケニアの医療や教育の向上に貢献するべく、プロジェクトを組んだり、バザーを開いたりして民生向上のための資金集めをしたりもする。

●**将来的に全国的な展開、アフリカ全土への展開を目指している。**

活動拠点も、首都圏に偏することなく、全国にあること。すべての学生に参加の道が開かれたとしても、東京・ナイロビに一ヶ所しか活動拠点がなかったら、その地域以外の学生は、一年の大半を占める通常活動に参加する道は閉ざされてしまうであろう。さらに、JKSCは、東アフリカ、アフリカ全土へ活動範囲を広げる予定である。

●**学生による手作りの組織である。**

内部では、明示のルールによって、民主的な意志決定が行われ、各参加者の権利義務は同等であり、外部からいかなる支配介入を受け入れていない。また、本会議開催まで、最低週1回、勉強会が学生によって開かれる。

●**特定の大学の名誉、また、政治・宗教団体、特定の思想・信条から中立・独立である。**

●**会議後、一般も参加可能な、報告会が行われ、また、報告書が作成される。**

報告書は、関係者に配布される。

●**JKSCは、決して相手国に対する専門家、スペシャリストを養成するものではない。学生会議での経験は、他の国との関係、同国人との関係でも生きなければならない。**

例えば、JKSCに参加して、ケニア・日本を好きになりケニア・日本を心から理解しようと思った人間が、障害者を差別したり、他の国籍の人を差別したり、意見が異なるからといって同国人をも受け入れることが出来なければ、国際交流・国際協力などは有害無益である。従って、JKSCでは、日本、もしくはケニアにいらながらも、学生会議参加者が様々な国の人、自国の人と交流・勉強できる機会を設け、若者の育成に努めている。

●**JKSCでは、行動力のみならず、社会的儀礼と責任感をも伴うリーダーシップの育成にも努めている。**

学校、家庭では学ぶことのできないことが、JKSCでの経験、人間関係を通して習得することが可能。JKSCでは、年齢に関係なく、上下関係一切なく、互いに啓発しあい、成長しあい、さらに社会的儀礼を身につけ、責任感をも伴うリーダーシップの育成にも努めている。

●**JKSCは、学生によって運営されているが、一般の人々の参加も可能である。**

社会に開かれた組織のため、メンバーでなくとも、定例会・本会議の傍聴、勉強会・イベント等への参加が可能。また、JKSCの活動の一つとして、日本・ケニア一般の人々・子供たちが互いに交流・協力できる機会、よりよい社会・世界・未来のために活動できる場を提供している。従ってJKSCは、学生のみならず、市民活動でもある。

●**JKSCは、少なくとも100年の継続を目指している。**

JKSCは、さらに、「日本・インド学生会議」「日本・アメリカ学生会議」をはじめ、全ての学生会議参加者、OBらとネットワークで結ぶ。その目的は、日頃、独自の理念、哲学を持ち、独立して活動を行っている他団体との交流、情報交換を通じて、自らの活動、努力の成果を一人でも多くの人々の共有財産とすること。また、相互に批評、意見交換することにより、自らの活動を客観的にとらえて欠点を訂正し、向上するきっかけとする。また新たに築かれた人間関係を通じて、既存の活動が見逃していた領域に気づき、新たな活動を創始する端緒をつくる。生きる上で何が大切か。単なる一度のイベントなど誰にでもできる。どんなに小さいことでも、続けることがいかに困難だけれど、大切なことか。継続性があるからこそ、有益な結果を社会に還元できるのである。従って、JKSCは、最低100年間の継続をする必要、いや義務がある。

---

## Japan Kenya Student Conference

Founder of JKSC Chie Goto

---

### What is a student conference?

A student conference is a forum of discussion composed of students from various countries. As university students not affiliated to special interest groups and institutions, they engage in discussions and seek solutions to issues facing mankind at both national and global levels.

The structure of the conference consists of group discussions, symposia, interactions with the local communities, lectures by scholars, panel discussions, and other activities. Students engaging in volunteer activities in communities and villages and interacting with the locals are important aspects of the conference. It is hoped that this forum will last for years to come, and that it will be a force of change fuelled by ideas of people in Japan and overseas.

Students cannot participate in student conferences forever.

Furthermore, to spend one's life establishing a trustworthy non-government/not-for-profit organization (NGO/NPO) is a difficult task. Given this, we seek to take advantage of student's independent nature as an important foundation for an NPO. With a student conference, we seek to fill the existing communication gap between Japan and Eastern Africa (especially Kenya). We hereby call for the establishment of

## **"Japan-Kenya Student Conference Executive Committee".**

Nowadays, there are a number of bilateral student conferences involving Japan. Each has its own mission and philosophy, and engages in activities independent of other conferences. Each conference was founded by individuals with different motivations and needs, during times of different states of affairs. The Japan-Kenya Student Conference is an organization which stands uniquely apart from already existing bilateral conferences involving Japan. What makes it different, and what are its attractive points.

### **Attractive Points of a Student Conference**

The joy of collaborating with individuals of the same generation from a different country.

With a common tenet to accept and understand each other and to solve problems jointly, students in the conference participate in a solution-oriented manner to achieve a goal.

During the conference, groups of students from two countries with different languages, cultures, and education come together to forge a common front.

With the completion of each succeeding conference, visions held by the delegates through the years progress to realization.

However, the ultimate beneficiaries of the conference are our own communities, and it behooves us to apply in our lives what we learn in the conference. Otherwise, the conference will turn out to be only a fun experience.

### **Why a conference with university students?**

What can be achieved in such a conference that is not possible in other forums, such as those comprising high school students or bankers, for example? First, from the perspective of intellectual maturity, it can be said that friendships can begin at any young age, but dialogues can take place amongst university students and those who are older. This is because it is necessary to have a certain level of knowledge in politics, economics, and culture. Second, from the perspective of special interests, it is hard to find a group of people other than university students who do not carry the special interest burden of governments and companies. Students can engage in discussions without being influenced by such entities. As the nucleus of a society's future, being a student means the same all over the world.

Therefore, the social and historical implications of a student conference in the future is great and probably beyond our imagination. By understanding the universal potential of a student conference, students must work diligently toward its mission.

### **So, how does the Japan-Kenya Student Conference**

#### **differ from other student conferences?**

For Japanese students, it is a medium of international exchange and cooperation represented by students from all over Japan. The Japanese delegation is not to be limited to students from only Tokyo. Publicity of the conference should therefore spread to all campuses across Japan, regardless of size and location of campus. Its inclusive nature makes it different from study trips and other activities sponsored by universities. It can therefore attract support from the general public as well as motivate students in the partner country to reciprocate efforts to make such a dialogue successful. (Because Japan-Kenya Student Conference will be held in Kenya this and next year, Japan will host the following year in 3rd conference).

### **Non-profit and Non-government organization**

This organization holds a vision of international cooperation. Beyond the academic discussions and volunteer work, participants of Japan-Kenya Student Conference are global citizens who seek to make contributions to Japan, Kenya, and the world. They strive to prevent conflicts and promote cooperation and mutual understanding in their own communities. In accordance with the recently passed NPO law in Japan, the conference seeks to be a highly visible and active NPO for the public. During the conference, participants engage in activities such as well-digging and facilities management; outside the conference, fundraisers such as bazaars can be held to fund the building of new schools and hospitals to improve the people's welfare.

It is hoped that such activities will spread throughout the nation in the future without concentrating in the capital city and whole Africa.

This gives opportunities of participation to all students from different parts of the country.

**The conference is primarily composed of students but is not only aimed at students but for a better society, better world and better future.**

### **LET'S TAKE ACTION TOGETHER.**

With clear rules and democratic decision making, each participant has equal voice, and the conference has no undue interference from outside groups. In the weeks leading up to the conference, study sessions take place at least once a week.

**The conference is independent of any political, religious groups.**

**After the conference, an official report will be jointly drafted as well as presented to the public at the annual meeting of the conference.**

Meetings which follow up of main conference are normally held in different cities in Japan. Official report will be distributed to individuals involved with the conference, as well as to university and public libraries.

**Japan-Kenya Student Conference is not a place to simply learn from experts and scholars in the fields of Japan and Kenya. One could derive experience from learning to live with different people.**

For example, if a Japanese participant who learns to like the Kenyan people and culture from the conference continues to be prejudiced against resident Koreans and Iranians and people with different opinions, then he/she did not gain anything from the conference. Japan-Kenya Student Conference nurtures the growth of young people in Japan and Africa by enabling them to network with students in the world from other student conferences.

**The Japan-Kenya Student Conference seeks to encourage good morals and responsibility amongst participants.**

Though much of the organization activity voluntary, a lot of support come from society therefore in reciprocating this good gesture participants are encouraged to display exemplary commitment towards activities for which their participation is required.

**Japan Kenya Student Conference though run by students, is open to the public. This is an organization where the society, non-members unclusive can participate and observe weekly meetings, main conference, study sessions and events.**

As one of Japan Kenya Student Conference's activities, we provides opportunities for people, including children in Japan and Kenya to interact and co-operate. The Japan Kenya Student Conference provide opportunity for taking action for a better society, better world and better future. Therefore Japan Kenya Student Conference is not only a student activity, but public movement.

**Japan Kenya Student Conference seeks to last for at least 100 years.**

Japan-Kenya Student Conference is part of a common network of participants and

alumni from peer conferences such as Japan-India, Japan-America, and Japan-Russia Student Conferences. This is a common asset that allows for various exchanges and information sharing between the different groups. Objective mutual exchange of opinions and critiques between the conferences will give rise to new ideas and initiatives to foster improvements at each of the conferences.

---

## 日本ケニア学生会議とは

---

### 1、日本ケニア学生会議 概要

事業名称	日本語名	日本ケニア学生会議
	英語名	Japan-Kenya Student Conference

設立年月日 1999年4月

同年 7月 駐日ケニア共和国大使館 後援

2000年12月 国際交流基金 助成

第二回会議開催期間 2001年3月4日 至3月25日 22日間

創立者： 後藤千枝

### 機関事務局

日本側：日本ケニア学生会議日本側創設事務局代表

後藤千枝 フリーランスジャーナリスト

〒451-0021 名古屋市西区天塚町4-1-2

E-mail [Japankenya@AOL.COM](mailto:Japankenya@AOL.COM) 携帯電話 090-8136-3988

ケニア側：日本ケニア学生会議ケニア側創設事務局代表

神戸俊平 獣医・ケニアに既存する日本NGOネットワーク顧問

アフリカと神戸俊平友の会 (NGO) 創設者

連絡先：神戸俊平宛 c/o Embassy of Japan P.O BOX 60202 Nairobi Kenya

TEL 254-2-891634 (神戸俊平) E-mail [kambe@africaonline.co.ke](mailto:kambe@africaonline.co.ke)

ホームページ：<http://www.gol.com/kambe/index.html>

日本ケニア学生会議ホームページ <http://members.aol.com/JapanKenya/JKSC.htm>

### 実行委員長

Kilonzo. Kovulo (University of Nairobi Linguistics/Sociology)

P・O Box 218 Matuo Nairobi Kenya E-mail [kiloshiko@yahoo.com](mailto:kiloshiko@yahoo.com)

### 日本側 学生代表

大平智江 (東京水産大学水産学部資源育成学科2年)

〒156-0044 東京都世田谷区赤堤5-3-6

TEL 03-3325-5059 E-mail [tomo\\_ohira@hotmail.com](mailto:tomo_ohira@hotmail.com)

参加者 日本ケニア学生会議

日本側メンバー 11名

ケニア側メンバー 5名

### 本会議の特色

ANYTHING IS POSSIBLE IF YOU TRY 挑戦するのであればすべてのことが可能だという理念に基づき、討論を中心とする分科会からさらに発展させ、日本ケニア学生会議が持つベクトル、国際交流・国際協力を軸に、よりよい社会・世界・未来のために TAKE ACTION 実行していく。

### 会議理念

日本とケニア両国の学生が討論などを通じた交流、共同作業の中から相互理解・

国際理解への糸口を見つけ、異なる文化・歴史・価値観をもつ相手国への認識をはかるとともに、報告会シンポジウム・事後活動等を通じてその成果を随時、政府機関・国際機関・企業・一般市民に発表、提案すると同時に社会還元し、積極的に世界平和へ貢献していくものとする。さらに特定の利害関係、社会的集団に属さない学生という自由な立場を最大限に活かし、討論のみならず、文化・社会施設の視察、ボランティア活動、現地に実際必要とされているプロジェクトの立ち上げ・運営を会議中に取り入れ、自分達の直接体験として互いの国、さらに世界全般への社会構造や諸問題に触れていく。また現地の人々の意見をじかに聞いたり、誰でも参加可能な文化交流会の場を設けたり積極的に一般社会と関わりを持ち、学生内だけの交流にとどまらず、広くホストファミリーの公募・様々な現地視察会・一般会員の募集を行うことで一般にも開かれた国際理解の場を提供していく。

## 設立趣旨

将来的には、アフリカ各国へ波及させることを目標とする。現時点においては、南側世界アフリカの中でも比較的豊かな国ケニアの大学生たちとの討論、ボランティア活動をはじめとする共同作業、交流、および、現地の人々との活発なコミュニケーションを通じて、両国のさらなる友好関係を進展させるとともに、その成果を常時、社会に還元・アピールすることで、世界平和へ積極的に寄与していくことを主眼に置く。その際、将来その国の中心となり将来を担っていく、また社会的利害を持たない大学生どうしの白熱した討論をメインにして、南北問題の構造的な改革をはじめ世界諸問題の解決に向けて、提言、活動を行っていく。そのために、討論成果、現地視察内容の公開、報告書作成、報告会開催、新聞発行はもちろんのこと、他の国際交流団体との情報・意見交換、バザー、ボランティア活動などを通じて、常に社会に開かれた学生会議であることを目標とする。日本ケニア学生会議は、年間を通し、また、生涯活動が継続されるものであるが、当プロジェクトの中心に当たる本会議は、日本側、ケニア側学生が隔年ごとに訪問し合い、約1ヶ月間の滞在をもって行われる。(創設期の第1回・2回目はケニア開催)

## 活動内容

本会議の最大の特徴は、日本、ケニア側大学生が自ら運営するところにあり、両者は互いに両国関係のさらなる親善、最終的には世界平和への積極的貢献を目標にして、日常活動を行う。

- 1、ボランティア活動
- 2、広報活動 企業やNGO、政府、国際諸機関、一般市民へのアピール
- 3、バザー開催
- 4、積極的なメンバーの海外派遣
- 5、分科会学習 分科会別学術論文の作成、交換
- 6、他の国際交流団体との情報交換

- 7、毎月新聞の発行
- 8、スワヒリ語学習・ケニア／アフリカについての学習・講義
- 9、大会に向けての諸準備 ケニア側との綿密な打ち合わせ
- 10、ケニア側への日本文化紹介
- 11、現地で必要とされているプロジェクトの立ち上げ・運営

### 将来的展望

関東に限らず、最終的には、全国大学に広く公募し、日本国内における日本ケニア学生会議ネットワークを築き上げるとともに、ケニア側においても、全大学にまたがるネットワークを構築して、本格的な日本・ケニア双方の学生代表という立場で活動を展開していく。同時に、アフリカ各国の大学へも波及を呼びかけ、将来的には日本アフリカ学生会議を本体として、各国代表による会議、また、各国別の会議を基盤として、全アフリカ、全日本学生交流・協力団体を建設していくことを目標とする。その際、この趣旨は、南北問題、環境問題など世界的諸問題に対して積極的な関わりをもち、活発な世界平和への貢献を行っていくことにある。尚、日本ケニア学生会議は最低100年間の継続を目指している。

---

## About Japan Kenya Student Conference

---

FOUNDED April 1999

Jul. 1999 Supported by Kenyan Embassy in Japan

Dec. 2000 Funded by The Japan Foundation

FOUNDER Chie Goto

## **JKSC-JAPAN     Japan Head Office Address**

4-12 Amatsuka-cho Nishi-ku Nagoya-city 451-0021 Japan

TEL 090-8136-3988    e-mail Japankenya@AOL.COM

## **JKSC-KENYA     Kenya Head Office Address**

Shunpei Kambe    C/O Embassy of Japan P.O BOX 60202 Nairobi Kenya

TEL 254-2-891634

e-mail   Kambe@africaonline.co.ke (Shumpei Kambe)

Kiloshiko@yahoo.com    (Kilonzo Kovulo)

## **THE FOUNDATION COMMITTEE**

- 1.The Founder-Chie Goto
- 2.Representative Kenyan Side-Dr. Shumpei Kambe
- 3.Student adviser-Mr. Oloo
- 4.Members from Japan-11 Student Representative- Tomoe Ohira
- 5.Members from Kenya-5 Chairperson- Kilonzo Kovulo

The Japan-Kenya Student Conference is a non-profit educational, cultural and international co-operation program. Student representatives from both Japan and Kenya have been holding meetings together since 23rd February 2000, in Kenya. They have been deliberating on various topical issues including: cultural exchanges, AIDS epidemic and economic development. They have also visited slum areas such as Deep-Sea and Kibera. Our outreach activities are meant to sensitise the entire community on the need to work together in a bid to improve the deplorable living standards of the least privileged members of our society. In addition, we have held meetings to discuss our contribution to the society and how we can make the world a better place for both current and future generations.

## **THE JAPAN SIDE**

The Japan side has been preparing for the conference since last year April. After the conference we implemented the resolutions jointly with our Japanese counterparts, The Japan side just like their Kenyan counterparts intend to make the conference a universal one. Other affiliates include Japan-India student conference, Japan-America student conference etc. Through the conference we endeavour to enhance cultural, social and educational interacting among different nations, hence facilitating gradual development of a global citizenship.

Our motto is **LET'S TAKE ACTION TOGETHER!**

**TUCHUKUE HATUA PAMOJA!**

## **HISTORY OF THE CONFERENCE**

In April 1999, JKSC was founded by Chie Goto, a freelance journalist. In July, it got approval and support from the Kenyan Embassy in Japan: having been officially recognized by the same, In August, Japanese students went abroad for an awareness tour. In December the Japanese executive committee was overhauled and reorganised. Before coming to Kenya, the founder sent the Japanese members to India and USA to learn the philosophy of Mahatma Gandhi and Martin Luther King respectively. At the same time, the chairperson of JKSC Japan Chapter visited the U.S to learn more about management from a former president of Japan -America student conference. Every month, Japan side publishes a newsletter and hold public relation activities, which are normally, open to the public. There are also weekly meetings, held on Saturdays. They discuss various issues including; economic development, AIDS epidemic and how to realise the goals, objectives and dreams of the conference. They were supported by the following company to carry out their activities in Kenya. DAI NIPPON JOCHUGIKU KABUSHIKI-KAISHA The above company produces the best quality mosquito coils in the world.

## **JAPAN SPONCERS**

In order to introduce Japan culture, Tokushima prefecture and Nagoya International center offered to support the Japanese members. Due to this, the Japanese side reported in public all the activities carried out in Kenya. This took the place at the National Youth Olympic Center in Tokyo and Nagoya International Center in Nagoya. Focus was on the AIDS conference and the mosquito projects among other issues.

## **THE KENYAN SIDE**

Every Saturday, we have been holding meetings to deliberate on various issues including Health (especially AIDS crisis) activities and economic issues, outreach activities and lastly, the objectives of the conference. We have visited slum areas such as Deep-Sea, Kibera. Our focus is especially on the AIDS crisis, which has been declared a National disaster by the president of Kenya. Currently, there is research going on, on the effect of use of mosquito coils on human health.

---

**第2回 日本ケニア学生会議 参加者名簿 日本側**  
**The 2<sup>nd</sup> Japan-Kenya Student Conference Executive committee**  
**Japan side name list**

---

創設委員 The Founder

後藤千枝 Goto Chie フリーランスジャーナリスト Freelance Journalist

実行委員長,国際渉外 The Chairperson and Foreign Affair

大平智江 Ohira Tomoe

東京水産大学 水産学部 資源育成学科 2年

Tokyo University of Fisheries sophomore

総務局 The General Affairs division

青木さよ子 Aoki Sayoko

東京農業大学 応用生物科学部 栄養科学科 2年

Tokyo agricultural University sophomore

吉田恭子 Yoshida Kyoko

慶応大学 法学部 政治学科 2年 Keio University sophomore

財務局 The financial division

鳥飼恵美子 Torikai Emiko

東京水産大学 水産学部資源育成学科 2年

Tokyo University of Fisheries sophomore

川田慎也 Kawada Shinya

慶應義塾大学 総合政策学部 国際政策コース 4年 Keio University senior

学術局 The Academic affairs

中村香織 Nakamura Kaori

日本女子大学 人間社会学部 現代社会学科 2年

Japan Women's University sophomore

大原京子 Ohara Kyoko

中央大学 総合政策学部 国際政策文化学科 1年 Chuo University freshman

広報局 The PR division

梅川瑞穂 Umekawa Mizuho

東京水産大学 水産学部 海洋環境学科 2年

Tokyo University of Fisheries sophomore

企画局 The planning division

矢向瞳 Yako Hitomi

立教大学 コミュニティ福祉学部 3年 St.Pauls University junior

在日連絡先 The emergency correspondent in Japan

曾根田 明子 Soneda Akiko

杏林大学 医学部 3年 Kyorin University junior  
菰田文江 Komoda Fumie  
東京水産大学 水産学部 資源管理学科 2年  
Tokyo University of Fisheries sophomore

---

第2回 日本ケニア学生会議 ケニア側メンバー紹介  
The 2<sup>nd</sup> Japan-Kenya Student Conference Executive committee  
Kenya side name list

---

**Chief Executive 実行委員長**

Kilonzo Kovulo キロンゾ・コヴウロ  
University of Nairobi Linguistics/Sociology senior  
ナイロビ大学 言語・社会学専攻 4年

**Secretary 書記**

Bramwell Comrada Opwaka Etwa ブラムウエル・コムラダ・オプワカ・エトワ  
University of Egerton Faculty of Agricultural and Human economics junior  
エガトン大学

Lameck Bijumo ラメック・ビジュモ  
University of EGERTON エガトン大学  
Major. Economics and Sociology junior

Jacqueline Anyanzwa ジャクリーヌ・アニアンゾワ  
USIU-A Major. International Relations senior 国際関係学専攻

Ben Masese ベン・マセッセ  
University of NAIROBI ナイロビ大学  
Course: Economics and Linguistics sophomore 経済学/言語学専攻

## 創設者・JKSC ケニア側事務局代表者経歴

### 創設者 後藤 千枝

1969年6月生まれ、愛知県出身。1984年中学三年で論文「世界平和現実のために」が金賞に選ばれ、世界最年少者、日本代表としてバチカンで開催された「世界平和シンポジウム」に参加。高校時代、ほかの論文入賞にて中国や米国に派遣、愛知県

立千種高校国際教養科卒業後、欧州・アフリカ・米国で大学に通い、学士取得、専攻・国際関係学。

中日新聞「世界へ羽ばたこう」、毎日新聞社発行・毎日中学生新聞「後藤千枝の世界飛びある記」、月刊公論「海外スペシャルレポート」連載はじめ、アメリカにある新聞社「SANDIEGO INTERNATIONAL TIMES」「U.S JAPAN BUSINESS NEWS」など、数多くの新聞・雑誌に自分の体験やレポート、インタビュー記事掲載。フリーランスで執筆を続ける傍ら多岐に渡り活動。ラジオ番組担当、講演、NPO・NGO 団体「REVE」（本部フランス）日本代表。1996年「日本インド学生会議」設立後、1999年4月「日本ケニア学生会議」設立。

### **JKSC ケニア側事務局代表 神戸 俊平**

1971年 ケニアに渡る。

1981年 ナイロビ大学獣医学修士を卒業し、当地で開業する。

1996年 アフリカ・ケニアでの獣医療の技術協力に尽力し、アフリカ諸国との友好親善に寄与したとのことで、外務省大臣賞を受賞。日本の外務大臣より表彰状が贈られた。1997年6月9日、アフリカ・ジンバブエでのワシントン条約会議に NGO 活動家として参加した。1999年のケニア・ナイロビでのワシントン会議にも同様に参加。

現在はケニアのマサイマランドのキャンプ地で、ツェツェバエの研究を行っている。現在、家畜診療の活動中。

著書には、「サバンナに生きる」「ドリトル先生は一年生」「ぼくとキキのアフリカ・サファリ」「熱血！！動物のお医者さん」などがある。

### **JKSC 学生アドバイザー ジョージ オロー George Oloo**

1965年、ウガンダ共和国トロロ生まれ。1985年、アリアンス高校卒業。1987年（ナイロビ）大学入学、1990年同大学卒業。言語学、人類学の学位を取得。1994年言語学の修士過程を終了後、講師としてナイロビ大学に勤務する。

日本文化をこよなく愛し、独学で日本語を学ぶ。

開会にあたって

第2回、及び今後の日本ケニア学生会議によせて

日本ケニア学生会議創設者 後藤 千枝

Speech for the Opening Ceremony Founder of JKSC Chie Goto・・・20

第2回日本ケニア学生会

JKSC ケニア側事務局代表 神戸俊平・・・23

Opening ceremony

JKSC Student Advisor George Oloo

開会式

JKSC ケニア側学生顧問 ジョージ・オロー・・・24

日本側学生代表挨拶 東京水産大学 水産学部 資源育成学科 3年 大平智江・・・25

**JKSC CHIEF EXECUTIVE'S OPENING CEREMONY SPEECH**

Chief Executive University of Nairobi Kilonzo Kovulo

JKSC 開会式での司会者のスピーチ

第2回ケニア側実行委員長 ナイロビ大学 キロンゾ・コヴウロ・・・26

---

---

「第2回、及び今後の日本ケニア学生会議によせて」

日本ケニア学生会議創設者 後藤 千枝

---

---

いよいよ21世紀を迎えた。戦火の音が止まなかった20世紀とは異なり、異を受け入れ地球単位、否、宇宙単位で様々なことを考え人々と共存していかねばなら

ない時代に突入した。

さて、物事には順序がある。第1回が最初の助走で日本とケニアに細い糸を結びつけたのなら、ホップである第2回日本ケニア学生会議では細い糸を太い綱にし、ステップである第3回では相互から橋を築きはじめ、ジャンプである第4回では橋の開通式を行う。すなわち相互に学生が行き来できる日本ケニア学生会議にする。私個人は橋を支える橋脚の役に徹したい。第5回では橋を虹にし、以後、常に虹が輝きを増し、その虹が人・社会・国・地球・未来を照らすようにしたい。そのためにも虹を日本ケニアから東アフリカへ、全アフリカへ、さらにアフリカから全世界へ着実にかけていかねばならない。その為には決して努力を怠るな・・そう肝に命じている。細い糸から太い綱になりつつある第2回日本ケニア学生会議、綱を一方から力強く引っ張りすぎて、切ってもいけない。また、力を緩めて綱をたるめてもいけない。バランスよく両側から綱を引かねばならない。すなわち相互の理解、たゆまない努力が必要である。また、今後築きあげる橋に不可欠な橋脚を強固にするために第2回日本ケニア学生会議・本会議が開催されるケニアを拠点に、縁の下、否、橋の下の力持ちができ、さらに橋脚を横に広げ、しかも、ぐんぐん上に伸ばし橋を押し上げ大空に一步でも近づくことができるような創設委員を選出することができたらと考えている。橋脚が腐ったら最後、橋を崩壊させないようにも、ピュア、純粋な心を持つ橋脚のみで橋を支えたい。日本ケニア学生会議に協力し、しかも腐らず・逃げず・焦らず、さらに、偏りが無く器が大きく、よりよい社会・世界・未来を築きあげることを念頭に、同時に自己改善にも努力を惜しまず、より愛と光の存在を目指すことができるような人物がケニアにいないはずがないと私は信じている。

ある学生から第2回のメンバーについてどう思う？と聞かれた。日本ケニア学生会議のベクトル、国際協力・国際交流を軸に、皆、道は異なれど同じ目的地を目指していることには変わらない。第1回本会議の挨拶で、決して混じることのない異質の水と油をよく振り混ぜれば、美味しいドレッシングになることは触れた。自分を含めた今回のメンバーを例えるなら、音楽好きが集合し、音楽を通して世界平和に貢献することを考えているとしよう。しかし、音楽好きという共通の部分、さらに心に根ざす核のような部分が同じでも、人によってはロックが好き、ヒップホップが好き・・と、さらなるジャンルにわかれてしまう。少なくとも、そう私の目には映る。レゲエとポップ、ジャズとクラシック、組み合わせることで美しいハーモニーを奏でることが可能だ。同じ音楽好きなのだからパンクと民謡も融合できるかもしれない。ケニアという国、また、共通のベクトルを軸に、今後どう異なる意見を組み合わせ日本ケニア学生会議として独自の美しい音色を奏でていくのか実に楽しみである。糸を綱にするために、綱を橋にするために、橋を虹にするために、さらに虹の輝きを増すために、人々の力添えが必要である。

よりよい社会・世界・未来のために

LET'S TAKE ACTION TOGETHER !!

TUCHUKUE HATUA PAMOJA !!!

---

---

## Speech for the Opening Ceremony

Founder of JKSC **Chie Goto**

---

---

Dr. Brown, distinguish guests, ladies and gentleman, I welcome you all to the 2nd Japan-Kenya Student Conference opening ceremony.

The 21st century is finally here. Unlike the twentieth century during which the fires of war burned continuously, today we are in a period when we must embrace diversity and raise mutual awareness to achieve co-existence.

A sense of order governs all matters in life. The Japan-Kenya Student Conference began with a thin string that connected both nations. In the second conference, we make the leap to weaving many thin strings into a thick net. Next, we'll build together a bridge that connects us, something we'll commemorate with an opening ceremony in the subsequent year. The objective is to enable students to go freely back and forth on this bridge. In the 5<sup>th</sup> conference, we'll elevate this bridge to a rainbow, one that becomes brighter and brighter as it shines on the future of peoples, communities, and nations. We should seek to extend this rainbow from Kenya to East Africa, East Africa to Central Africa, Central Africa to West, West to North, North to South Africa, to all countries in African continent, then to whole world.

To do so requires hard work. As the students weave the thin strings into a thick net, we can't rupture it by pulling it too hard from one side. On the other hand, we can't loosen the net and let it sag either. It should be balanced with equal tension from both sides. In other words, persistent efforts from both sides are needed to achieve mutual understanding.

With the commencement of the 2nd Japan-Kenya Student Conference, I believe that we can strengthen and extend the pillars in order to elevate the bridge one step closer to the big blue sky. To prevent the bridge from collapsing, the pillars need to be supporting with everyone's pure and genuine intentions. The Japan-Kenya Student Conference is a venue for students to work together for a better future and learn from each other with an open mind. I believe that members of the Japan-Kenya Student Conference can work together without fear, haste, nor bias to bring about a world filled with love and sunshine.

One student asked me for my opinion on the participants of the 2nd JKSC. While each student's sense of mission, cooperation, and cultural exchange may differ, we all have a common destination. In the first conference, I stated in my opinion remarks that a tasty dressing can be made from mixing unmixable elements, even

oil and water. Taking current members and I as examples, we all enjoy music and believe that music can contribute to world peace. Despite that common belief, everyone has different tastes in music with genres ranging from rock to classical. However, it is possible to compose a beautiful melody by a fusion of all the genres- pop, hip-hop, jazz, reggae, punk and folk music. In the spirit of a shared common objective, I truly look forward to listening to the beautiful melody to emanate from the discourse of diverse opinions and viewpoints that will take place in the conference.

Each one of us is responsible for weaving the thin strings into a thick net, expanding the net into a bridge, strengthening and elevating the bridge to a rainbow, and making the rainbow shine brighter and brighter.

For the future TUCHUKUE HATUA PAMOJA !!!

A SANTE SANA of our communities and the world.

LET'S TAKE ACTION TOGETHER !!!

開会式にて。一番右にいるのが JKSC 委員長キロンゾ、その隣が JKSC 創設者後藤千枝その右にいるのが USIU-A 学長の Dr. Brown

In the Opening Ceremony.

---

---

## 第 2 回日本ケニヤ学生会議

JKSC ケニヤ側事務局代表 神戸俊平

---

---

まず、ケニヤ側の代表でありながら、第 1 回目第 2 回目とも学生交流するケニヤ滞在中に日本帰国が重なり申し訳ありません。第 2 回目は象牙不買キャンペーンにて有川君らが活躍したパフォーマンス参加が、いまだ KWS (ケニヤ野生生物公社) でも強く印象に残り、JKSC の再訪が望まれておりました。第 2 回目準備のため、

メンバーとメール交換してきましたが日本帰国のおり、日比谷公園・国際協力 フェスティバルで、また新宿で、鳥飼・中村・曾根田さんらと話し合うことができました（新宿の喫茶店で前実行委員長中嶋君とばったり会ってびっくりしたけど！）。やはりケニア出発前に情報交換にとどまらず国内での勉強会・分科会での事前準備の積み重ねが、一般観光サファリとはまったく違う、得ることが多大であるとおもいました。

さて、第2回目ナイロビでキロンゾ君と相変わらず忙しく飛び回る創設者後藤さんらと再会しました。今回も相互間のスムーズ化が課題でした（何でも命令してくださいネ）。

USIU-A 開会式はブラウン学長も参加され、ケニア側の学生もたのしんでくれました。今回、英語の堪能なメンバーが交流にもきちんと紹介されていたのが印象に残りました。また、ナイロビの我が家にまで来てくださり、ケニアの漢方薬や象糞茶やら大変有意義（？）な時間をすごされたことと思っております。

廃棄物あふれる日本からケニアを訪問し、環境やさまざまな問題を現実に受け止められたことと思います。スラムやHIV感染者の実態を目の当たりにし、さまざまなことを考えたでしょう。各分野でその理解に、日本紹介に張り切ったことと思います。このような学生活動をして各自の主体性が確認されたはずです。これはいまの日本の学生に欠損したところです。これからのJKSCに、日本を含む現実社会にこのような経験を有用し、どのように対応していくかが、関わった学生たちの今後の課題になっていくことでしょう。

ナイロビ ケニア 2001年5月

---

---

## Opening ceremony

JKSC Student Advisor **George Oloo**

---

---

This is the second conference that JKSC is holding. A year has passed since the last conference in Nairobi, Kenya. We have learnt a lot since the last conference about each other and about our organization. Our aim is to be stronger with each passing year. The founder, Goto Chie had a nice vision when she decided to found JKSC: to get students involved with the society.

It is this vision that students should seek to build on. The students come from different regions of the world and from different cultural backgrounds but they have learnt to appreciate each other and to co-operate with each other. In this manner, they have brought their two cultures together. They have begun to realize how much they have in common. As one person said, it is only by social interaction and cultural exchanges that people can understand and value each other.

JKSC is building a bridge between Kenya and Japan. Some wonderful friendships have already developed. A number of common activities and projects are planned. JKSC has a bright future if we commit ourselves to its basic vision.

---

---

## 開会式

JKSC ケニア側学生顧問 ジョージ・オロー

---

---

前回、ケニアのナイロビで開かれた本会議から 1 年が過ぎ、このたび JKSC の第 2 回本会議が開催されます。我々は前回の本会議からお互いの事や、我々の組織について多くを学びました。我々の目標は年を経る毎により力強い組織へと成長していく事です。創設者の後藤千枝は、学生を社会に関わらせよう、という素晴らしい理念を持って JKSC を創設しようと決めました。

これこそが学生達が求められていた理念に違いありません。学生達はそれぞれ世界の異なる人種から成り異文化の背景を持ちますが、お互いに価値を認め、協力する事を学び自分達の 2 つの文化を互いに近づけてきました。彼らは互いにどんなに多くの共通点を持っているかに気づき始めています。ある人は、社会的な相互関係と文化的な交換によってのみ人々の相互理解を可能にし、お互いを評価できるようになる、と言いました。

JKSC はケニアと日本とを結ぶ架け橋を建てています。すでにくつつかの素晴らしい友情が発展してきました。いくつもの共同作業やプロジェクトが計画されています。私達がこの基本理念を貫くならば JKSC には輝かしい未来が待っているでしょう。

(和訳：菰田文江)

---

---

## 日本側学生代表 挨拶

東京水産大学 水産学部 資源育成学科 3 年 大平智江

---

---

第 2 回日本ケニア学生会議のメンバーが集まり活動が始まってから早一年、2001 年のケニアでの本会議を終えて 4 ヶ月経ち、いよいよ第 2 回メンバーの活動が第 3 回メンバーに受け継がれようとしている。

昨年 2000 年に開催した第 1 回本会議・ケニア開催においては、まだケニアの状況がよく分らなかったにもかかわらず、設立間もない会議の運営ノウハウ、ネットワ

ークの確立等、運営を「0 から 1 に持っていく」ことをしっかりと行った。それは一重に多くの方に支えていただいた末での実績である。そして、連絡手段の確立、日本側メンバーでの活動基盤等、今はOB・OGとなった第1期メンバーの努力と苦労は想像に絶する。それらを引き継いだ上での今回の活動となった。

昨年3月末、第1回本会議の報告会が終了した後、メンバー集めに忙殺され、また報告書を作成し、その中で第二期の活動として何をしたいか、模索する日々であった。第1回の実績を踏まえた上での地盤固めを目標とし、具体的にどのようなか、と。メンバーが揃い、定例会でケニアに関する勉強会が始まったのは9月であった。ここから私達は本格的に活動を開始したとも言える。

本会議準備と共に、「国際協力とは何か」「学生会議とは何か」についての意見をお互いにぶつけ、話し合う機会があった。それを通して今回の本会議のテーマを「開発援助と環境」と設定した。

本会議においては、日本とケニアの関係の一つとしてある、「開発援助」。様々な切り口から見た「持続可能な開発」を日本側学生とケニア側学生で考えるべく、JICAプロジェクト視察と講義、JBICの講義、国際NGOプランインターナショナルのマイクロクレジット見学等、UNEPでの講義、日本大使館での講演をプログラムに入れた。それぞれの専門分野が異なる学生の中に、どのような「持続可能な開発」像が生まれたのだろうか。ケニア側学生も、積極的に諸機関で質問をして様々なことを考えていた。

本会議テーマ「開発協力」に沿ったものとして「開発協力と環境」「エイズ」「幸せとは？」という3つの議題を設定し、分科会でチームを作って話し合った。

また、両国学生がナクルのエガトン大学で一泊したり、実行委員長の故郷であるエカラカラで2泊3日の滞在をしたりと、ナイロビに限らず行動範囲を広げた。

第3回本会議は、第4回日本開催本会議を視野に入れた上での、ケニア開催となる。そして、これまでナイロビ1都市で行っていた開催を、ナクル市にあるエガトン大学とナイロビにて期間を分けて開催することとなった。

最後になったが、多大なる支援をして下さった、在日ケニア大使館、国際交流基金、外務省ケニア担当小林様、在ケニア日本大使館の皆様、United States International University- Africa)の皆様、関係者の方に心より御礼申し上げたい。

---

## JKSC CHAIRMAN'S OPENING CEREMONY SPEECH

**Chair-person                      University of Nairobi                      Kilonzo Kovulo**

---

Dr. Brown, distinguished guests, it is with pleasure I recognize your presence. On behalf of the members of Japan-Kenya Conference I wish to give a few details about the conference.

## Historical Background

In April 1999, Japan-Kenya Students Conference was founded by Chie Goto, a freelance journalist. On the 9<sup>th</sup> March 2000 JKSC was officially launched in Kenya.

## JKSC's Mission

Our mission is summed up as the JKSC's motto that states: "Let's take action together for a better society, a better world and a better future." Anything is possible if you try !

How will the Americans become global citizens if they don't understand the cultures of other continents ? This applies to all the continents of this planet. Global citizenship transcends technology. Technology is but a facilitator.

Therefore, intensive interaction and dialogue is the only way to achieve mutual understanding and the best way to create world social stability.

The future lies in the hands of the young people and it is their duty to strategize by taking full responsibility for the best way forward.

JKSC has provided a fertile ground where certified social will grow to produce a healthy society.

## Achievements

JKSC has already initiated various projects, which include the following:

- A research on the effects of burning mosquito coils on human health
- A project to make greeting cards and book markers out of recycled waste paper

As a conclusion, I urge you all : **"Let's take action together !! "**

**Thank you very much.**

---

---

## JKSC 開会式での司会者のスピーチ

第 2 回ケニア側実行委員長 ナイロビ大学 キロンゾ・コヴウロ

---

---

ブラウン博士、素晴らしい来客者の方々、本日お目にかかる事が出来て光栄です。日本ケニア学生会議の実行委員を代表して、私はこの会議について少し詳しく説明させて頂きたいとおもいます。

## 歴史的背景

1999年4月、日本ケニア学生会議はフリーランス・ジャーナリストである後藤千枝によって創設されました。

2000年5月9日、JKSCは正式にケニアで設立される事となりました。

## JKSCの使命

我々の使命はJKSCの標語である「よりよい社会、世界、未来のために共に行動を起こそう」という言葉に集約されています。あなた方が挑戦する限りどんな事でも可能なものとなるのです。

アメリカ人が他大陸の人々の文化を理解せずにどうやってグローバルな市民になり得るのでしょうか？この事は地球上のすべての大陸についても当てはまるものと言えます。世界的な市民権は技術をしのいでいます。しかし技術は一助となりうるのです。

よって、強い相互連関と対話のみが相互理解を成し遂げるただ一つの方法であり、世界の社会的安定を構築するための最適な方法なのです。

未来は若者達の手にかかっています。そして未来に向けた最良の道を歩むための全ての責任を担うことにより、方法を講じていくことが私達の責務なのです。

JKSCは保証された社会が健全な社会を生み出すよう成長していく肥沃な土壌を与えました。

## 業績

JKSCは以下の様々な事業をすでに始めています。

- ・蚊取り線香による人体への影響についての調査
- ・再生紙で出来たカードやしおりを作る事業

最後に、ここにいる全員に「共に行動を起こそう！」と主張します。

誠にありがとうございました。

(和訳：菰田文江)

## 第2回日本ケニア学生会議・ケニア開催日程表

2月23日	日本側先遣隊、ケニア入国
2月23日 ～25日	日本側先遣隊、ケニア側メンバーとミーティング USIU-A生徒会と話し合い 日本側メンバー受け入れ準備
2月26日	日本側メンバーケニア入国 USIU-Aにてウェルカムパーティー
2月27日	午前：日本大使館を訪問し、領事担当の奥田氏に挨拶 UNEPの訪問について説明していただく
2月28日	午前： ・JICAナイロビ事務所を訪問、JICAについての総括的な話を伺う

	・伊藤忠訪問（一部メンバー）ケニアの経済についての話を伺う 午後：ミーティング
3月1日	午後：ミーティング
2日	午前：日本大使館表敬訪問 池田二等書記官の話を伺う 午後：ミーティング
3日	午後：日本側メンバーミーティング、文化交流会練習
4日	午後：ミーティング、文化交流会練習
5日	NGO・プランインターナショナル視察（エンブ）
6日	KEMRI（ケニア中央医学研究所）訪問 UNEP訪問（一部メンバー）正式訪問の調整を依頼する
7日	開会式の準備
8日	午前：開会式 午後：文化交流会
9日	午前：ナイロビ市内スラムエリア Deep Sea 訪問、住民と話し合い
10日	分科会1日目 午前：議論 午後：フィールドワーク
11日	午前：Deep Sea 訪問
12日	ニヤフルルの JICA 虹鱒養殖プロジェクト見学、JOCVの杉本氏に話を伺う。その後ナクル市のエガトン大学へ向かい、エガトン大学 JKSC メンバーと話し合う
13日	午前：エガトン大学学生部長表敬訪問 午後：エガトン大見学 その後、ナイロビへ戻る
14日	午前：朝日新聞ナイロビ支局訪問 午後：共同通信ナイロビ支局訪問
15日	ジョモケニヤッタ農工大学訪問 JICAのアフリカ人造り拠点プロジェクトについての話を伺う
16日	国連環境計画（UNEP）訪問
17日	分科会2日目 午前：議論 午後：フィールドワーク
18日	午前・午後：ナイロビ市内フィールドワーク キティンゲラグラス、ンゴングヒル観光 夕方：JKSC ケニア側事務局長神戸俊平と対談
19日	ナイロビ市内のスラムエリア・キベラ訪問
20日～ 22日	JKSC 委員長 K.Kovulo の出身地であるエカラカラ村にホームステイ。 2泊3日滞在
23日	国際協力銀行（JBIC）訪問
24日	分科会3日目（全体討論会） 午前：分科ごとに討論の内容を発表 午後：全体討論 閉会式

# 分科会

～分科会テーマ～

## テーマ1、開発協力と環境

## テーマ2、エイズ問題

## テーマ3、幸せとは

第二回ケニア開催の分科会では、昨年の分科会とは方式を変えた。テーマごとに日本側メンバーとケニア側メンバーがグループを作り、分科会の日として設けた3月10日、17日、24日の3日間中、まず10日、17日の2日間でそれぞれの国で準備してきた学術研究内容を発表、テーマに関するディスカッションとフィールドワークを行った。そして分科会最終日である24日に全体討論会を行い、グループごとのディスカッションの総括、フィールドワークでの調査結果、活動を通して経験した事を発表し、メンバー全体で情報を共有し、さらなる意見交換を行った。

		開発と環境	エイズ問題	幸せとは
3月10日	午前	発表・討論 (ナイロビ大学にて)	発表・討論 (国立博物館にて)	発表・討論 (Planet Safariにて)
	午後	フィールドワーク (CanDo訪問)	フィールドワーク (New Life Home訪問)	
3月17日	午前	発表・討論 (ナイロビ大学にて)	討論・総括 (Planet Safariにて)	討論
	午後	フィールドワーク (Huruma地区訪問)		フィールドワーク (ストリート・チルドレン更生施設主催のコンサート訪問)
3月24日		全体討論 (国立博物館庭にて)		

## 分科会報告 「開発協力と環境」班

### 分科会メンバー

矢向瞳

Kilonzo Kovulo

鳥飼恵美子

Lameck Bijumo

川田慎也

立教大学 コミュニティ福祉学部 三年

ナイロビ大学 言語学専攻 四年

東京水産大学 水産学部 資源育成学科 二年

エガトン大学 経済学専攻 三年

慶應義塾大学 総合政策学部 四年

## 内容

分科会「開発協力と環境」では、環境と開発の観点から持続可能な開発とは何か探る。

## 日程

分科会 1 日目には、午前中はナイロビ大学にて、ケニア側メンバーのプレゼンテーション、午後はケニアで活動を行っている日本の NGO、Can Do の事務局を訪問した。

分科会 2 日目には、午前中はナイロビ大学にて、日本側メンバーのプレゼンテーション、午後はナイロビの環境問題の実態を知るため、HURUMA 地区へフィールドワーク。

## 分科会「開発協力と環境」・プレゼンテーション

### 発表 1 日本の公害史 発表者 矢向 瞳

日本はケニアに対して開発協力をおこなっているが、そのあり方は日本が経験した開発の弊害の恐ろしさを十分に理解し、その経験を生かしたものだろうか。開発にともなって深刻になっていった日本の公害の歴史、特に水俣病について述べ、現在の日本とケニアの開発に対しての意識が正しいものであるかを考えるきっかけにしたい。

#### 日本の公害史

日本は開発（発展）により恐ろしい病気を経験してきた

1868 明治維新 日本の工業化を推し進める

1869 煤煙や悪臭など「公害」が社会問題になる

1890 年代 足尾鉍毒事件

1894～1945 日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦、太平洋戦争

戦争によって重化学工業が発展→産業廃棄物の増大 公害の多様・複雑化

1945 敗戦 産業の再生のために急速に生産の拡大

軍事関係の産業→科学関連製品の生産 公害の激化

1949～51 各地で公害対策条例が制定されるが戦後復興体制の中埋もれていく

1955 高度成長期 エネルギー源は石炭から石油へ転換  
石油精製、石油関連産業のコンビナートの建設

日本は「公害列島」と化し 河は緑色に濁り、海や港は白く濁り泡立ち、魚は白い腹を見せて浮かび上がり、大気には煤塵や亜硫酸ガスが立ち込め、連日のように光化学スモッグが発生した。大気汚染により深刻な呼吸器障害の患者が多発。多くは「死ぬより辛い」と言わせるほどの発作に苦しみ、学校にも仕事にも行けないという状態に追い込まれた。

1956 「もはや戦後ではない」といわれたこの年、水俣で奇病発生 の報告

1960 四日市で呼吸器疾患が多発

・政府「所得倍増計画」（10年後に2倍にする）を発表

四大工業地帯を帯状につなぎ効率的に工業化を行う。工業地帯で深刻な公害多発

1965 新潟水俣病発生を公式確認

1967～四大公害裁判（被害住民が企業を相手取り提訴）

↑（水俣病・四日市ぜんそく・新潟水俣病・イタイイタイ病）

1968 GNP が世界で第二位になる

このように、環境への配慮もなく日本の工業化は進められ、利益のみを追求する企業を、経済発展を望む国は守り続けた。そして日本は現在のような物質的に豊かな暮らしを勝ちとった。しかし、その背後には多くの公害病に苦しみ、亡くなっていった方たちがいて、自然もたくさん破壊されてきたのだ。そしてその苦しみは今も終わらない。

日本の公害のひとつ、水俣病

去年の夏水俣に訪れた時、「水俣病が私に‘生き方’を問うてきた」と感じた。水俣病が伝えようとしていることは何か。日本の代表的な公害である水俣病を取り上げてみたい。

日本の戦後の復興と、西欧に追いつき追い越せという高度経済成長は、国家が栄え企業が発展すれば、人々の福祉は自動的に実現するという思想を土台にしていたかも知れない。そして貧しいがゆえに、多くの日本人がそのような思想やそれに基づく施策を支持したかもしれない。しかしその誤りは現在の暮らしを見れば明らかだ。何よりも未だに水俣病に苦しむ人々がその誤りを如実に体現し、告発している。

Q 水俣（熊本県）はどんなところだったのか

水俣から見える不知火海は、海辺の人々を懐深く包み込み、質素な中にも、豊かな自然の恵みのあるあたたかい暮らしを与え続けてきた。海が、食べ物も遊び場もおやつも与えてくれたのだ。漁民は協力して漁をし、親戚のつながりも強く、助け合い、信頼し合っていた。のちに水俣病事件により、海は奪われ、人とのつながりも

壊されていくことになる。

Q 水俣病はいつ頃発生したのか

今からわずか50年前ごろから、水俣で魚や鳥や猫の変死が観察されている。

「もはや戦後ではない」と謳った1956年、海辺に住む、前日まで元気だった女の子が急変。座ることも食べることも話すこともできなくなった。その後次々に原因不明の患者が発生した。「うつる奇病」として怖がられ、病気になった人は病院で隔離されたり、村中の人から家から出るなど言われたり、石を投げられたりといじめられた人もいた。

Q 水俣病の原因はなにか

水俣病は、総合化学会社チッソが海に無処理で流したメチル水銀を含む廃水によって引き起こされた。1932年より、実に36年間にわたって流された。水俣病の原因がチッソの廃水だと究明された以後も、なお9年間、水銀は流され続けた。

Q チッソはどのような会社だったのか

チッソは科学肥料の製造で飛躍的に業績を伸ばし、第一次世界大戦後には、朝鮮侵略によって、日本有数の総合化学会社にまで成長をとげた。主要工場のあった水俣では、チッソは「城主」として君臨し、社会・経済全般にわたって影響力を深めた。チッソが急成長した鍵は、安全対策を欠いた、一貫した利潤追求第一主義にあった。チッソの社員になれる人はエリートであり、羨ましがられる存在であった。現在も水俣にあり、生産している。

Q 水俣病の症状はどのようなものか

水俣病は、メチル水銀によって主に脳の中樞神経と末梢神経が冒される病気で、感覚障害、ふるえなど多彩な臨床症状を示す全身病である。水銀に汚染された魚を食べた人は数十万人におよぶといわれている。

### 公害の特徴

- ・人権が保障されない。医療費はもらえても生活は苦しい（生活費の保障が十分ではない）。病気のためにできないことまでは補償されない。（仕事したくてもできない。これでは結婚も難しくなる。水俣病の場合は人格まで水銀に侵される人もいた）
- ・痛み、苦しみが理解されにくい。人から差別を受ける。（補償金目当てのニセ患者呼ばわりや奇病だ、伝染病だと言って人として扱われなかった）
- ・補償や、処分・処理のお金は、操業中止した企業には払えず、税金から出る。
- ・認定の打ち切りをされると、どこからも補償されなくなる。（認定もされにくい）
- ・公害が起こってしまうと原因追求、補償などにかなり時間がかかる。（原因がはっ

きりわからないと、操業中止、漁獲中止できないなど。)

- ・公害防止の法律を作っても、規制のない外国に会社を設立し、公害輸出をする会社がでてくる。
- ・法律があっても結局、生産過程でできる有害なものの処分の場所や方法に困るから違反してしまい、被害が拡大する。
- ・健康の大切さ、命の大切さ、幸せのあり方は尊重されない。
- ・他者への想像力の欠如が問題を引き起こし、ひどくしている。

\*想像力を養うために水俣病で対立した人々のそれぞれの立場に立って考えてみましょう。

#### あなたがチッソの工場長だとしましょう

あなたの会社は「豊かな」生活のための製品を作る仕事をしていて、漁業に頼っていた水俣では、従業員は憧れの的。「貧しい」水俣が私の会社のおかげで発展している。会社もどんどん大きくなってきていて、従業員も多い。

ところで、私の工場が海に流している排水はかなり有害らしい。魚が死んだり、漁民が病気になっている。やっぱりその原因はうちの会社だろうか？海は広いから毒素は薄くなると思っていたけど違うのか？

さて、こんな状況のとき、工場長のあなたはどうしますか？考えてみてください。では、実際この後どうなったのでしょうか。

先ほど述べたとおり、チッソは水銀を流し続けました。なぜか？

ほかに処分する方法なんてないだろう。しかたないか。私には養わなければならない家族だっているし、従業員だってたくさんいる。工場をストップしたくない。なんてたって今が一番稼ぎ時なのだから。水俣市民だって、国だって、発展を望んでいる。貧乏な漁師が少くらい犠牲になったって、構わないだろう。何とか逃げ切ろう・・・とこんな感じではないか。実際に、チッソはお金を払って東京大学にチッソのもみ消しの研究を依頼し、厚生省は水俣病の原因を追求していた熊本大学の研究費を打ち切って、原因が明らかになるのを妨害している。国までチッソの見方なら工場長も心強かったでしょう。

#### あなたは水俣病にかかったようです

漁師なのに手先がしびれ、目の調子も悪くなってしまい、仕事ができない。好きな海にも行けない。いったい何の病気だろう。まっすぐ歩けなくなってきて変な目で見られる。人にはこの前おつりを手渡しでもらえなかった。近所の人が冷たい。家族にはとっても迷惑かけてしまっている。最近では家族までおかしくなってきた。私から感染して奇病にかかったんだろうか…。どうなるんだろうか、この先。病院代もたくさんかかる。

どんな気持ちですか？あなたならこの後どう行動しますか？考えてみてください。

では実際、患者さんたちはどう感じて、どう行動したのでしょうか。それまで仲の良かった村人が急にいじめるようになって、人間不信になった人もいる。水俣にいられなくなって夜中に引っ越した家族もいる。「奇病」にかかって親戚の恥だと言われ、家から出られなくなった人もいる。家族に水俣病患者がいると嫁にいけないからと、患者であっても隠し続けて、認定の申請もせず、補償金を受け取らなかった人もいる。なぜ何にもしていない自分たちがこんな目に会うのか、世の中はどうなってしまったのか、自らに問い続け、闘争し続けた人もいます。いまだに治療に通う人もいます。

#### あなたは水俣病患者ではない水俣市民です

最近奇病が流行っていて、水俣病なんて名前がついているから水俣のイメージが悪くなっちゃう。お嫁に行くときに水俣出身だなんて知れたら断られるんじゃないかしら。ホント迷惑だわ。よだれたらしてるし、ふらふら歩いちゃってみっともない。チッソを訴えるなんていってるけどやめてほしいわ。チッソあつての水俣なんだから、チッソがなくなっちゃったらどうするのよ。うつる病気と言ううわさだから近寄りたくない。

あなたなら患者に対してどんな対応を取りますか？

では実際、どんな事が起きたのか。水俣病という名は水俣のイメージを悪くすると水俣市民は抗議した。(水俣病患者はとても傷ついた) エリートしか入れなかったチッソに、水俣病が発生した頃から漁民が働けるようになった。チッソは自分たちの味方をたくさん作りたかったのでしょう。チッソで働く市民が増え、チッソの味方になり、水俣病患者をいじめた。彼らは補償金を請求して、チッソを苦しめる。きっと金目当てのニセ患者もいるだろう。もしチッソがつぶれたら自分たちも失業してしまうから、チッソを守りたい。・・・というように、人とのつながりの深かった水俣で水俣病が発生したために、人びとのつながりが破壊され、水俣病患者とそうでない市民が対立した。

上の内容は基本的に事実を元にし、想像力を働かせるために書いた。実際の立場では、色々な感情や事実が他にもたくさんあるだろう。

#### まとめ

チッソが作り出した素材を用いた製品は、私たちの身の回りにあふれている。チッソの技術は、私たちの生活を便利で快適なものにしてきた。チッソをはじめとする化学工業に支えられて経済成長をとげた日本。しかし、発展に目を奪われた結果が水俣病である。

チッソの恩恵を受けている私たちは単に水銀を垂れ流し続けたチッソを責めることのできる立場にはないことが分かるだろう。水俣の人は「まだよか生活しまっか？」と私たちに問いかけている。発展を望めば、必ず弊害はでる。法律が出来ても、適切な処理方法が発明されても、環境に負担をかけるのを止める事は出来ない。私たちが今のような物質的に豊かな状態でもまだ発展を止めない中、ケニアのような発展途上国に自分たちの生活に少しでも近づくようにと開発協力した場合、この地球はどうなっていくのだろうか。地球の資源は限りがあるのに、先進国の私たちがそれを必要以上に消費し続けてしまっていて、それを搾取されている発展途上国に開発協力をしていこうと言うのは無理があるように思う。私たちが発展する事に集中するとき、権力の弱い人たちがその矛盾、ひずみを負ってしまう。日本がしてきたのと同じようなやり方でケニアに開発協力した場合、ケニアの中一部か、もしくは今度はもっと力の弱い国がその運命を負ってしまう可能性があることを認識してもらいたい。

発表2 日本の環境問題に対する取り組み 発表者 鳥飼恵美子

### 公害対策の歴史

第一次大戦以降には、公害は酷かったものの、生産を第一に考える傾向が強く、特別な対策は行われなかった。

第二次大戦後、日本は重化学工業を中心とした急激な経済成長のため、大工業地帯を中心とした公害問題は、これまでとは比較にならないほど大規模で深刻なものであった。

これに対して昭和 20 年代半ばから地方公共団体において公害防止条例が制定されるなど先駆的な取り組みが進められた。しかし、経済発展が公害を全く考慮しない方針で進められたため、四大公害をはじめ、大気汚染、水質汚濁、地盤沈下など公害問題が深刻化し、それらの地域の被害者や居住者の中から反公害運動が起こされはじめた。この頃からようやく国によって環境保全制度の整備が進められること

となった。1967年に公害問題対策の指針となる公害対策基本法を制定し、公害問題の計画的・総合的な解決を図る姿勢を明確にした。この法律は、環境基準を設定し、国・地方自治体・事業者・住民それぞれの責務を示したほか、汚染物質の排出規制や監視・測定体制の整備、公害事業についての原因者の費用負担、公害防止計画の策定等について定めた。1970年11月からいわゆる公害国会（第64国会）が開かれ、公害対策基本法や大気汚染防止法の改正法をはじめ、水質や廃棄物等に関する14の公害関係法案が一挙に可決された。1971年に公害・環境問題の専門政府機関・環境庁が発足し、1973年には、公害健康被害補償法が制定された。

### 複雑化する環境問題への取り組み

公害対策・環境保全の整備や経済安定によって、環境の状況は全般的に改善されていった。しかし、都市化の進展や生活様式の変化によって、都市部における大気汚染や、湖沼、内湾の閉鎖性水域における水質汚濁などの新たな環境問題が顕在化した。これらの都市生活型公害は、いままでの企業などに対するような規制では対応が困難であった。このため、大気汚染・水質汚濁の著しい地域の汚染物質の総排出量を削減するための総量規制の考え方が導入された。また、公害問題の未然防止の観点から、環境影響評価（環境アセスメント）制度の導入が検討され、統一的なルールに基づく環境影響評価制度が実施されることとなった。このように複雑化、グローバル化する環境問題に対して、平成5年、環境保全に関する基本的理念と新たな施策の枠組みを示す「環境基本法」が成立した。

### 環境問題への取り組み・実践例

国による公害対策以外にも様々な分野で、環境保全に対しての取り組みが行われている。

企業においても様々な取り組みが為されている。例えば、乗用車の製造、販売を主に行っている日産自動車では、製造過程での省エネ、廃棄物の減少や、大気を汚染しないような車の開発、リサイクルするときにも有害ガスを発生させないような努力を行っている。

また、近年はNGOによる取り組みも目覚ましい。生活様式の変化によって深刻化してきた自然破壊、生活廃水問題、ゴミ問題、大気汚染問題などの解決のために、市民の環境に対する関心を高めようという動きが出てきた。児童に対する環境教育や、環境問題に関するイベントの開催など、環境を汚さない努力を市民レベルで広めようとしている。

21世紀における“持続可能な開発”の構築を目指して

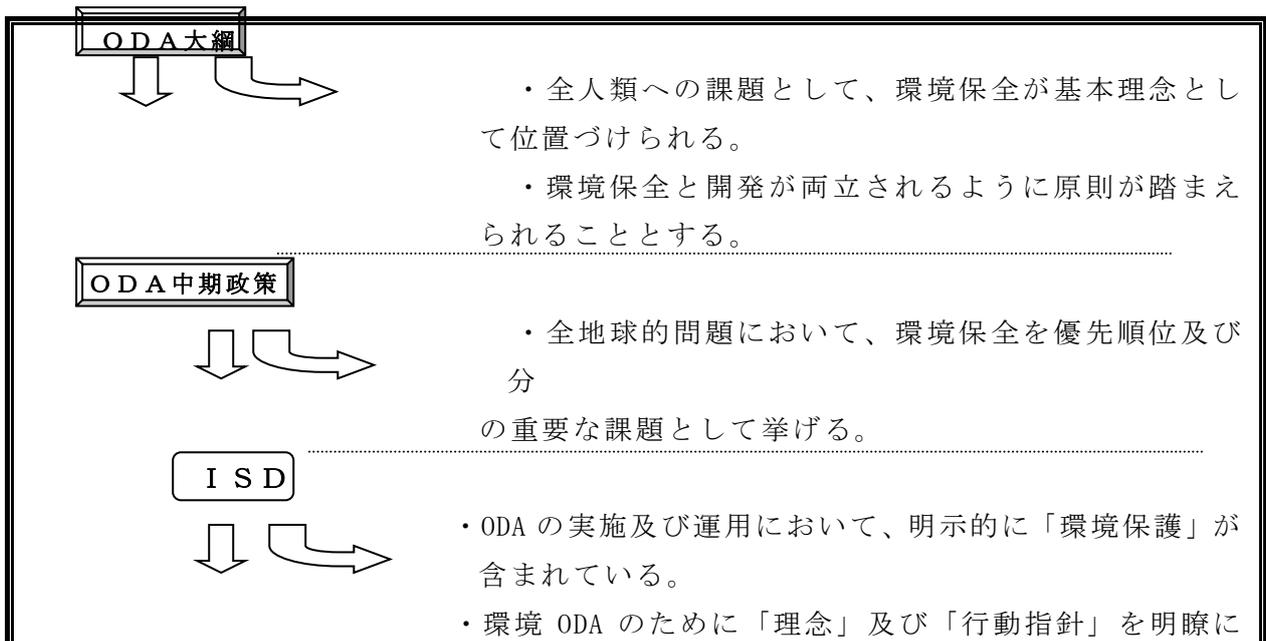
－ 日本の環境ODA政策を通じて

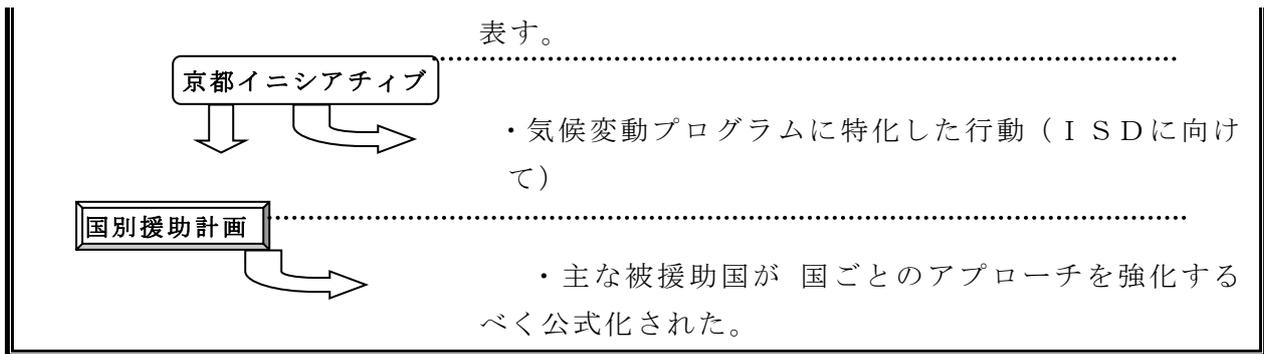
第I章：日本の環境ODA政策

1992年6月、内閣により正式に採択されたODA大綱には、日本の援助政策を貫く基本理念である「環境保全」が含まれ。この原則は、環境と開発の両立に配慮した規律において援助が実施されることを意味するものである。1999年8月に発表された中期ODA政策においても「環境保全」が優先順位の高い課題として列挙されることとなった。

日本は、90年代初頭においてこれらの環境協力を推進し始めた。今日における環境協力は、「21世紀に向けた環境開発支援構想（ISD）」に従う形で実施されている。ISDとは、“アジェンダ21”の実施状況を評価するべく、97年6月に開催された国連環境開発特別総会（UNGASS）において発表されたものである。97年12月の気候変動枠組み条約第3回定期会合（COP3）の開催期間中において、発展途上国での地球温暖化プログラムへの対処援助を含む京都イニシアチブが日本により発表された。京都イニシアチブは、地球温暖化問題に対処すべき開発を推進して行く段階にある途上国を支援することを目指したものである。同イニシアチブの下、日本は伝統的な環境協力政策に加え、地球環境問題に積極的支援を実施している。

ODA枠組みにおける日本の環境保全政策





## 「21世紀に向けた環境開発支援構想（I S D）」の理念

### 人間の安全保障

環境破壊は人類そのものの生存を脅かすこととなり、そして広域分野における安保問題を構成することとなる。

### オーナーシップ（主体的取り組み）

発展途上国が環境問題に対処すべき第一の責任と役割を引き受ける必要がある。援助国は、そのような自助努力を支援するべきである。

### 持続可能な開発

環境協力の目的は、それぞれに異なる途上国の経済・社会情勢に注意を払った持続可能な開発を実現することにある。

## 第II章：地球環境問題を伝える日本の努力

- (1) 日本は、世界中全ての人々が環境政策と調和して“持続可能な開発”が実現されることを願っている。同時に日本は、多国間環境条約の如く国際枠組みを構築すべく積極的に取り組むとともに、途上国での能力開発を支援してきた。

### ・国際枠組み構築への積極的貢献

日本は、国際枠組み構築のために積極的な関与を図ってきた。こうした事例の一つとしては、C O P 3 が日本が議長国として 1997 年に京都で開催されたことに表されている。

### ・環境 O D A の強化

日本も他の先進諸国同様に環境 O D A の強化に努めるところとなっている。環境 O D A は、毎年度の二国間 O D A 実績の約 2・3 割を占めている。途上国との環境協力の取り組みを強化するために、地球温暖化の分野において I S D や京都イニシアティブに取り組んでいる。

## ・環境関係国際機関やフォーラムへの貢献

日本は、国連環境計画（UNEP）に対して、メイン・ドナーとして重要な役割を果たしている。

1992年10月、日本はUNEP国際環境技術研究所を大阪と滋賀に誘致することとなった。又日本は国連持続可能な開発委員会（CSD）にも積極的に参加している。そして日本は、地球環境ファシリテーター（GEF）にも登録している。これは途上国への支援のための重要な資金メカニズムのことである。

- (2) 2002年に「リオ+10」会議が開催される。これは、1992年の国連環境開発会議（UNCED）で採択された“アジェンダ21”の包括的な評価がかかる会議で実施されるのである。日本は「リオ+10」の成功に向け、積極的な貢献を果たしている。そして日本は、UNCED以降のグローバル化の進展や技術革新や多くの国際環境条約の効率的実行をも視野に含め、未来に目を向けた議題が設定されるべきものと信じている。

## 第Ⅲ章：未来への諸課題

### (1) 環境に関連する協定および事務局の活動における可能な共同作業の促進

様々な国際的な枠組みは、オゾン層の減少、気候変動、砂漠化および生物多様性の保存のように異なり、又相互に関連づけられた環境問題に取り組むために設立された。多国間の環境上合意(MEA)の下における活動を MEA 事務局の適切な準備によってより有効に効率的に管理する必要がある。

### (2) 貿易と環境

どのように環境保護、特に MEA の中で規定されたものについて、を貿易規制に導入するかについて検討し続けていくべきであるし、そうした状況は WTO と調整することができるものと考えられる。

### (3) NGOとのパートナー・シップ

NGOはより積極的にMEAsに関する交渉や会議に関与しており、その結果としてNGOとの意見の交換が一段と重要なものになってきている。

### (4) 発展途上国について

発展途上国への資金援助や技術移転は、MEAsを途上国が利用するために必須なものといえる。こうした認識の下、日本は環境問題の広い分野に渡り発展途上国を支援しつつ行くのである。

(参照：<http://www.mofa.go.jp/policy/environment/pamph/2000/index.html>)

\*ケニア側学生の発表は、分科会総括・TOWARDS SELF-EXTINCTION(Kilonzo Kovulo 著)に含まれます。

## <分科会一日目・フィールドワーク>

### Can Do 訪問報告

Opwaka Bramwell Etwa Comrada

アフリカ地域開発市民の会 (Community Action Development Organisation・Can Do) は日本の NGO で、開発協力活動を通して、アフリカの地域に暮らす人々と共に、より豊かな社会を実現することを目指し、設立された。東京とナイロビに事務所を持つ。

2001年3月10日、分科会1日目の午後、我々「開発と環境」班は CanDo ナイロビ事務所へ訪問する事が出来た。そこで、Can Do ナイロビ事務所長の永岡宏昌氏、そして事務所のスタッフの方々とお会いした。その歓迎が暖かかったことと、ディスカッションが生き生きしていた事は我々の心に残るだろう。

Can Do がムインギ県にて行っているプロジェクトについての我々と永岡氏との最初の議論の中で、参考として、「開発と環境」について講義して下さった。

Can Do がムインギ県にて行っている環境プロジェクトのゴールは広がっているが、まずは学校の教育からはじめる。環境保護のプロジェクトは、回復に向けてと、学校における教育に関するものがある。Can Do は革新的かつ効果的な方法をすでに学校からコミュニティーに向けて行っている。Can Do のアプローチは人々と共に働いていけるように、彼らのライフスタイルを重視している事に示される。Can Do はコミュニティーに彼ら独自の考えを課さない。仕事を良くするために、コミュニティーのいい面、悪い面を考慮し、組織訓練の実行、相互理解の努力を行う。Can Do は、コミュニティーの人々は自分たち自身でどのような開発を望むのか、決めなくてはならない、と考える。コミュニティーは何が必要か知っている。そしてそれらの全ては、情報や合理的な考え、話し合いの材料として、使われるべきである。Can Do は、開発に関しての持続性は、比較的新しい考え方であると認識し、社会的、経済的に確立したコミュニティーのパラダイムとは反対の活動をしている。

活動と実践の基礎からの転換のためには、コミュニティーにおける新しい価値観が必要だ。貧しい人々は生活していくために、環境に害を与えるような仕事をす以外の選択が無い。それ以外の選択肢が、この状況を変えるために必要だ。しかし、そのためには、コミュニティーがその第一歩をとり、その努力に他の人間が協力する事が重要だ。

開発に対して、所定の地域によって個々人違った独自の認識を持つ。生活を向上させるために彼らはいい方法を調べるが、それを開発として考えてはいない。これらの努力、試みは本質的なものによって促される。そのために参加型の開発は非常に重要である。バランスは関係し、接近に用いた集団の間でぶつかるはずだ。

Can Do とその臨機応変なスタッフ達からは多くのことを学んだ。その活動は、壮大な、後に続くべき良い手本であると結論できた。

今回の講義は、我々にできる (can do)、という事を信じさせてくれた。

Come rain come sunshine.

Can we do it?

Let us take action together!

(和訳・鳥飼恵美子)

(参照 : <http://www.t3.rim.or.jp/~tam-tam/cando/cando.html>)

**CanDo ナイロビオフィスにて In the Nairobi office of CanDo**

**SUBJECT: CAN DO REPORT**

**By Opwaka B. E. Comrade**

**CAN DO SAYS – WE CAN DO IT!**

The Community Action Development Organisation (Can Do) is a Japanese non-governmental organisation with a mission to work in partnership with communities in Africa and to realise a community defined quality society. Can Do has its headquarters in Tokyo, Japan, and an office in Nairobi, Kenya.

The members of the 2<sup>nd</sup> conference's development and environment' sections were privileged to visit Can Do on Saturday, 10<sup>th</sup> March, 2001. They met Mr. Hiroaki Magaoka, CanDo country representatives and the CanDo staff in their Nairobi office. The warm welcome (feel at home in my office ) and lively discussion will be a much cherished memory for everyone.

A vivid presentation on the subject of 'development and environment' was given

during the section meeting by Mr. Nagaoka, it referred to the initial discussion between him and the section members on the subject of CanDo's project site in Nov Division, Mwingi District of Eastern Province, Kenya.

The environmental projects are dealing with range rehabilitation and school-based environmental activities and education. The goal for the environmental projects is to extend to, the level of the community first though environmental activities and then to establish education in schools. Can Do has done its best to establish some innovative and effective method to implement an extension program from the school to the community. CanDo's approach is defined by the community's lifestyle which they respect and incorporate for harmonious working. They do not believe in imposing themselves or their ideas on the community. In order to improve their work an assessment of both positive and negative aspects of the community and organisation practices has been carried out and a mutual understanding has been reached.

Development is a problematic word to define. The word has both positive and negative meanings to it. CanDo believes that the people should define their own kind of development and what or how they want to proceed in relations to it. The community knows what it needs. All these should be using good information rational thinking and decision-making processes to their best possible abilities. CanDo recognised that sustainability is a relatively new concept, it runs contrary to the community's established paradigms of social and economical behaviour. It requires a new ethic of living for its introduction, promotion, adoption, and acceptance by all sectors of the community and gradual fundamental transformation in their activities and practices. People living in poverty often have no other choice but to engage in activities that could be considered environmentally harmful. Alternatives are needed for this to change. But for the sake of success, it is very important that the community takes the step first and their facilitate.

Development, for example, each person views it differently since his/her own perception. Most of them look into how they can improve their lives but they do not see this as development. All this is driven by intrinsic and/or extrinsic factors. Therefore participatory development is very important. A balance must be struck between all parties involved and the right approach used.

A lot was learnt from CanDo and its resourceful staff. In conclusion, CanDo, its staff and work can be summarised as being noble, admirable and a good model to follow.

CanDo made the section members believe that they can do it. Come rain come sunshine. Can we do it? Let us take action together!

(For more information : <http://www.t3.rim.or.jp/~tam-tam/cando/cando.html>)

## <分科会二日目・フィールドワーク> フルマ (HURUMA) 地区訪問報告

鳥飼 恵美子

3月17日午後、我々分科会「開発と環境」班は、ナイロビにあるフルマ(HURUMA)地区を訪れた。ケニア側メンバーが、ナイロビでの環境問題を知るのに最適、と、この場所をフィールドワークに選んだのだ。ナイロビ市街地からバスで約30分ほどのところにあるのだが、道中、コンクリートにボコボコ穴が空いている道の悪さと、窓から入ってくる砂埃には閉口した。バスの車窓からは、私達が訪れたナイロビ市内の大規模スラム・キベラと並ぶ、広大なスラムエリアが見えた。この一つ一つの屋根の下で、数多くのドラマが繰り広げられているのだろう。

バスを降り、ケニア側メンバーの案内で居住地を突き進んでいく。私達についてくる好奇心旺盛な子ども達の相手をしつつ、ちょろちょろと汚水が流れている足元に注意をしながら歩いていった。そして、ちょっとした広場に出たとき、日本側メンバー3名は驚きの声をあげた。なんと、そこには人の身長3倍はあろうかという高さの巨大なごみの「山」があったのだ。周りには焼却場もなにも無い。そして、ゴミが分別されている様子も無かった。

その後、ナイロビリバー沿いへと進んだ。ここでも私達日本側メンバーにとっては驚くような景色が広がっていた。川辺の約1000㎡はあろうかというスペースがゴミで埋め尽くされていたのである。当然川にも多くのゴミが捨てられているのであろう。川の水は病的な緑色をしていた。さらに、そのゴミの上を豚が何匹か歩き回って何かを食べている。ここの住民は、ゴミを餌にして家畜を養っているのだろう。

このフィールドワークでは、嫌になるほどたくさんのゴミを見た。そしてゴミを巡るたくさんの問題も知った。

私は分別せずに捨てられてしまっているゴミがとても気になった。ゴミも有機物だけならば、放置しておくで腐って不衛生ではあるけれども、自然に分解されるが、ビニールや金属、プラスチックなどはずっと分解されずに残ってしまうだろう。

何でも構わず放り込まれてしまうナイロビリバーも気にかかる。ナイロビという名前はマサイ語の「冷たい水」という言葉からきたもので、赤土の多いケニアでもナイロビでは比較的澄んだ水が得られたそう。それがこのように汚染されてしま

っている。ここからたいして離れていない上流の方では、もっと水が澄んでいることから、下流になるにつれ相当に酷く汚染されているのだろうと推測できる。

そして、ゴミをあさる家畜にも問題があるだろう。家畜の餌がゴミで済めば、リサイクルとなり経済的であるが、不衛生である。病気が広まってしまったら、被害は大きいだろうし、有害な物質を食べてしまった場合は、それが体内に蓄積してその肉を食べる人間にも悪影響を及ぼしてしまうのではないか。

この後「開発と環境」班ではこれらのことについて、何が原因なのかと話し合った。その中で皆が最も強く感じたのは、環境問題に対する関心の低さであった。このような環境に暮らしていても、ゴミ問題の重大さを認識していないのは、その害の影響を認識していないためである。また、ゴミを平気で周りに捨ててしまうのは誰も注意するものがないく、皆が同じような事をするからで、コミュニティーもゴミを所定の場所以外に捨てる事は大きな事ではないと考えているのだろう。また、ゴミを捨てるのが悪い事とわかっているにもかかわらず、自己中心的な考えからゴミを捨ててしまう人もいることだろう。環境に対する認識、知識を高めるための活動がいま必要とされているのだ。

## フルマ地区のゴミ山 Garbage mountain in Huruma

### 分科会総括

自滅に向かって

Kilonzo Kovulo

持続可能な開発は、このテクノロジーの時代においてどの国も同じように関心がある事である。持続可能な開発は、はじめに、再生しうる資源の使用との関係で作

られた考えである。つまりそれが無限に続けられる活動に関して、その考えを吟味する人によって変わると考えられた。JKSC のメンバーが、第二回本会議をケニアのナイロビで開催している時、私達は 1987 年に環境と開発に関する世界委員会によって与えられた定義「将来の世代が享受する経済的、社会的な利益を損なわない形で、現在の世代が環境を利用することで開発は持続可能になる」という定義に同意した。持続可能な開発に向けての最初の動きは、全ての国民が生物圏における他の全ての生物との相互連関性を理解する事である。長年にわたり、人間は、特に全ての他の生物、そして自然の支配者として生きていた。環境にマイナスの影響を与えてきた無責任な活動のために、人間は、今このように因果の法則にみあう生存挑戦に直面している。私たちが始めた出来事の連鎖は遠く私たちが制御できないところまでつながっていく。世界の生態系はいかなる部分も、他に依存せずに存在する事は出来ない。全てのものは影響を受けながら他に影響を及ぼす。素人の視点からは、世界は非常に巨大で、その資源は尽きる事のないくらい非常に豊富に見える。この視点こそが、地球、その資源、及び、その生態系の非論理的な開発の原因であったにちがいない。資源は、再生可能か否かのいずれかである。再生不可能なタイプ（石油、及び、鉱物のようなもの）の資源の多くは、地下の奥深くから産出する。つまり限られてはいるが再生不可能なものと共に、生態系は発展してきた。その結果、これらの資源の多くは、生命体にとっては 異質なものであり、場合によっては生態系を乱す有害なものである。そういうわけで、再生不可能な資源を消費した後で、人間がそれらの扱いにおいて困難に面しているのである。食物、住居、外敵・略奪者からのような基本的な生存に直結して必要なものではないもののために、天然資源の過剰開発がされ、動物が捕獲されている。全ての場所の全ての人々が、環境を損なうことなく、快適で質の高い生活を送れるようにするためには、経済発展を社会的問題、環境問題、そして、平等の問題を統合して考えなければならない。生物学的観点から見ると、現代経済は、自然生物圏のプロセスに依存しているエネルギーと物質の一連の相互作用であるとみなされる。過去において、経済と生態系のプロセスとの相互依存関係は、しばしば見落とされたり、無視されてきた。環境は生産のための資源の無尽蔵の宝庫、あるいは、底のないゴミ捨て穴としてみなされた。個人レベルでは、我々は、大気や水、木や野生生物の価値を当然認識できるが市場では、この価値を商品価格に組み込まない。これらの価格が反映するものは、原材料の採取、栽培、製品化、包装、宣伝、及び、運搬のコストである。会社が水を浄化するためのコストを負担しない限り、製品である化学物質の価格には生産のための真のコストは反映されない。もし会社がその浄化コストを負担するならば、製品価格が上昇し、消費者は別製品を探して離れていくだろう。そうなれば、その会社は有毒な廃水を低減する方法を考えようとするでしょう。すなわち、我々は、十分な責任を負うべきであり、さもないと、我々は、自分達自身も害するようになるだろう。個人、NGO、政府、及び、他の団体は、より洗練された技術を導入し、自然を保護する正確な方法を見出すべきである。例えば、誰であろうとも環境破壊に対して

責任があり、それに関するコストを負担すべきだという表明である“汚染者負担の原則”というのがある。

これは、誰が環境劣化に関して責任があるかが常に明白であるとは限らないため、実施しにくいかもしれない。貧困、低開発、と環境劣化のつながりを否定することは、論理的ではないであろう。世界人口の約 40 パーセントが貧しい生活をしているといわれている。十億人以上が 極度の貧困状態にあり、毎日約 4 万人の子供達が、病気、又は、栄養失調のため死んでいる。しばしば、食料と燃料の切迫して必要が環境の過剰利用を強制する。森林破壊、土壌浸食、砂漠化は、極端な貧困としばしば関連している環境問題である。自然に良くない貧困救済策が、公式化され実行されるのは悲しい事である。農業生産の落ち込み、魚獲量の減少、地方さらには国家の経済は、経済的悪化による圧迫を感じ、有害廃棄物の処理費用、医療給付、飢餓救済費などが他の利益を相殺する。貧しい人々がこの問題から脱出する方法や機会を与えられるとき、真の環境を維持できる開発は、現実になるだろう。それと同時に、産業及び経済は、研究され、よく理解されるべきである。世界の支配的経済システムは、消費と成長という 2 つの潜在的に自己破壊でと環境に有害な原理に基づいている。ほとんどの経済活動は、資源消費であり、消費成長の持続に依存している。今日、産業活動は世界のエネルギーの 37 %を消費し、二酸化炭素の 50%、硫黄酸化物の 90 %やオゾン層枯渇を脅かす多数の化学物質を放出している。世界取引機構(WTO)の設立は、国際取引と市場の様相を一変させるだろう。従って、環境保護論者や環境に関心のある人々は、無責任な事業者や産業の促進によって自然が損害を受けないように監視し、調査しなければならない。ている現状を調べ、考えるべきなのである。人口増加は、自然を維持するために利用可能な資源を制限しなくてはならない現実を考慮する警告の目安になる。地球上の人口は、56 億人であるとされ、平均で 1 日当たり 25 万人ずつ増加しており、これは 30 日ごとにスイスがもう 1 つ、10 年で中国がもう 1 つ誕生できる増加率である。今世紀の終わりまでには、この惑星に 60 億人を超える人類がいることになるだろう。人口増加は確かに問題だが、人びとの環境への影響はその数だけではなく、生物圏における園分布、エネルギーや物質の消費レベル、及び一定の生活水準を得るための技術力にも依存する。大規模な人口は、それらの生態系に相当の影響を及ぼす。開発は、エネルギー消費によってますます進む。世界の大部分のエネルギー使用は、現在持続不可能である。エネルギーの非効率的な使用は、比較的安価で豊富なエネルギー供給が、人びとを無駄の多い持続不可能な消費に習慣付けている先進国において、特に広まっている問題である。この習慣が「南」においても採用される事のないように、重要な教訓が先進国から学ばれる必要がある。太陽熱、風力、地熱、水力や中国、インドで使われるようなバイオマス(エネルギー源として利用させる生物資源)などの再生可能なエネルギーの利用はそのような教訓を含む。廃棄物処理の更に良い方法を、すぐに作るべきである。1991 年に UNDP (国連開発計画)は、世界中の都市で、

7200 億トンの廃棄物が毎年生産されると推定した。廃棄物は、人間の健康や環境など広範囲に及び、長期渡って取り返しのつかない影響をもたらす。例えば、核廃棄物からの放射能は、非常に有害である。UNEP の報告において、「人々は、しばしば非常に無駄の多い生産と消費を行いながら、その後の廃棄物の適切な処理にほとんど注意を払わない。」とある。国際原子力機構 (IAEA) によれば、世界の 413 の商業用原子炉は 1991 年に世界の電力の 13% を供給した。これらの原子炉は同時に 1980 年に約 9500 トンの使用済み燃料を発生し、世界の使用済み燃料の蓄積量は 1985 年の 2 倍の 84000 トンに達した。IAEA は、現在稼働中または建設中の原子炉が半世紀半ばに運転を停止するまで発生する廃棄物の総量は 450000 トンを超えるだろうと予測している。有害な廃棄物の不適切な処理は、しばしば悲劇的な結果を引き起こす。1950 及び 1960 年代に、日本の水俣や新潟で、海や川に垂れ流された水銀廃棄物による汚染魚を食べたために、約 2000 人が神経性の病気にかかり、そのうち 400 人以上が死亡した。(訳者注：実際の患者、死亡者の数は把握できないほどに多い) 世界各地の淡水湧き水は、米国のラブ運河やオランダの Lekkerkerk のように、化学廃棄物が捨てられた土地での住宅建設が大規模な住民非難や何億ドルもの浄化費用を招いた。これは、開発途上諸国へ教訓である。1989 年に採択された「有害廃棄物の越境移動とその処理に関するバーゼル条約」は、承認された有害廃棄物の取引を注意深く監視することを目的の一つとしている。さもなければ、国々は「外国の廃棄物」の取り扱いの問題を解決する事が困難になるだろう。例えば 1984 年フランスの人気のない屠殺場で 41 バレルのダイオキシン廃棄物が発見された。それらは 1976 年イタリアのセベソの化学事故によってひどく汚染された荒廃した物質を含んでいた。

人類の活動は、今日身近に感じられるようになった気候の変化において重要な役割を果たしている。大気は、非常に薄い層 (地球を取り巻くガス、蒸気、及び、粒子の集まり) から成る。大気は、地球の全生命体の構成要素である炭素、窒素、酸素、そして水素の循環、再循環のシステムとして機能している。大気は隕石の脅威から私たちを守る。隕石の大部分が大気を通過中を燃え尽きるのだ。同様に、大気は目に見えない有害な放射線からも私たちを守ってくれるのだ。今日、我々が呼吸している空気は、様々な形で汚染されている。特に硫黄酸化物 (おもに発電所と工場から排出される) 窒素酸化物 (発電所、工場、および自動車から排出される) 一酸化炭素 (おもに自動車から排出される) ばいじんやダスト (浮遊粒子状物質 (SPM) として知られ、物の燃焼に伴って発生する) などは脅威であり、大気汚染は、十二分に人間の健康に影響を及ぼす。アテネのアクロポリス、ローマのコロセウム、インドのタージマハールなどの記念物は、数千年にわたり当初の面影を保って来ましたが、今世紀に入り酸性雨や大気汚染により急速にむしばまれてきた。多くの都市の黒ずんだビルは、特に東ヨーロッパにおいて、私たちが大気汚染の管理と適切な浄化をなしえなかったことを証言している。UNEP の世界環境調査システム

( GEMS ) は、 75 ヶ国 175 地点の大気汚染を監視する。最近の報告によれば、二酸化硫黄による大気汚染は、 54 都市中、 27 都市で受忍限度内、 11 都市 ( ロンドン、ニューヨーク、香港など ) で限度間近、 16 都市 ( リオデジャネイロ、パリ、マドリードなど ) で限度を超えている。ばいじんとダストのレベルは 8 都市で受忍限度内、 10 都市 ( トロント、シドニーなど ) で限度間近、 23 都市 ( バンコク、テヘラン、リオデジャネイロなど ) で限度を超えている。

現在、国際的な科学コミュニティの大部分は、人間活動に由来する大気中へのガスの蓄積が、究極的には地球の表面温度を押し上げ、地域の気候に明白な変化をもたらすであろうと信じている。二酸化炭素、メタン、CFC、ハロン、そして亜酸化窒素の排出が急速に大気中の温室ガスの濃度を増加させ、人為的な温室効果をもたらしている。地球温暖化が水蒸気を増加させ、雪や氷をとかすであろうということは、とてもよく理解されている。気温が上がると空気はより多くの水蒸気を蓄積し、それがまた温室効果に寄与する。気候モデルでは地球温暖化の結果、この惑星の気温は平均約 0.8~2.4℃上がるだろうと予測している。最も確からしい影響予測によれば、地球規模の平均気温の上昇に加えて、多数の物理的、生態学的システムへの影響が生じる。この惑星のいくつかの地域では、破滅的な結果が生じるだろう。ある国際的な科学的評価によれば、来世紀末までに 1.5~4.5℃の温暖化が、40~120センチメートルの地球規模での海面上昇をもたらすだろうと推定されている。温暖化がハリケーン ( 台風 ) や雷雨などの、より勢力の強い、より頻繁な嵐をもたらすだろう。酸性雨は、産業活動の直接的な結果である。化石燃料を燃やすことにより二酸化硫黄が空気中にのぼり、水と反応し、硫酸を生産する。同様に、汚染大気中の窒素酸化物は硝酸に変化する。これらの物質は、その後雨、及び、雪として降ってくる。酸性雨は、実際に生産された場所から最高 500 メートル離れた場所においても降る。生態系の全体を死に至らせる以外に、酸性雨はまた、国の重要な宝物や建造物の数々をむしばみ、同様に交通体系に欠かせない橋梁などの構造物を風化させる。

オゾン層の破壊によって私達の生命は危機に直面している。オゾン層を攻撃している主要な犯人は、クロロフルオロカーボン (CFC) とハロンである。オゾン層についての論議は、1974 年にカリフォルニア大学 Irvine 校の研究者が、オゾン層を薄くしている原因は CFC 放出であると特定したときから始まった。1985 年に南極上空でオゾン層の穴が発見され、懸念が広範囲に広まった。NASA などの測定結果により、南極上空のオゾン濃度が春季に 60% 以上も低下することが明瞭に示されたのだ。この穴は時には米国ほどの大きさに達し、1979 年以降ほぼずっと成長を続けている。今では同様の濃度低下が北半球でも観測されている。最近の UNEP のデータによれば、被害はさらに広がり、ニューヨークやマドリードの位置する中緯度上空でも、オゾン濃度が 5% 減少している。将来的には、赤道上空でも強度の枯渇が観測されるかもしれない。成層圏オゾンの減少は、地表に達する B 紫外線 (UV-B) の量を

増加させる。UV-B に肌をさらすことは、皮膚がん、人間の免疫システムの抑制の原因になる。この放射線の増加は作物の葉を傷め、光合成や水利用効率を損なう。オゾン減少のシミュレーションによれば、25%のオゾン減少は25%の収穫減をもたらす。長期的には、オゾン枯渇は世界の最重要作物の多くについて収穫減をもたらす、食料需要の満足を困難にするおそれがある。

人類の活動は、今様々な生物を脅かしている。生物学の生命の最も大きな多様性は、発展途上国にある。先進国が多くの自然の生息地を破壊したからである。これは、大規模な森林伐採、焼畑、サンゴ礁の破壊、破壊的な漁業実践、植物の過度な収穫、pesticides の無差別な使用、及び、湿地の充填、大気汚染、未開拓地の農業や都市の使用への転換の結果として起こった。多くのケースにおいて、生物多様性の損失のための根本原因は、基礎的な経済的な、人口統計の、そして、政治的な傾向において発見される。同じくグローバルな負債は、生物多様性に貢献しない環境を築く。人間は、生物多様性からそれらのちょうどその存在を抽出し、それ故、なぜそれらが同じものの保護のために前の正面にあるべき真の理由がある。森林は様々な生物種をその中に守っている。つまり、森林はただの木の集まりではなく、それ自体が生態系そのものなのである。

このようなことから、世界各地で森林と林地の損失は、重大な問題である。その損失は、降雨パターン、気温、風速をかえ、豊かな土地を乾燥させ、洪水や土壌吸収力の変化をもたらす。そして人間や動物の生活を破綻させる恐れがある。「熱帯雨林行動 ネットワーク」によれば、熱帯雨林破壊の主要因は誤った開発計画であり、その事業の多くは米国、ヨーロッパ、及び日本の税金や先進工業国の民間銀行によって融資を受けている。世界の砂漠林のうち、毎年 8,2 万 ha が失われており、メキシコとパキスタンでその 60%を占める。丘陵・山地林については、毎年 250 万 ha が失われており、そのうちの 64ha はブラジル、37 万 ha はメキシコ、15 万 ha はインドネシアで失われている。

最大の問題は「どのぐらいのあいだこの自滅への動きが続くか」ということである。今や JKSC メンバーはこれらすべての事実を知っているので、持続可能な開発を実現するために既存の開発の向きを変え、私たちがどんな役割を果たし、どのような方策を立てるべきであろうか。一番大事なことは強固な活動をとうして持続可能な開発に対する意識を構築することである。

### **JKSC として次のことを行う予定である。**

- ①開発に関係する環境問題に対して、一般の関心を高めるために、草の根レベルからの教育を実施し問題意識を養成する。
- ②政府機関と協力する。なぜなら政府が環境にやさしい政策を実施できる唯一の機関であるから。

③他の組織と協力し活動をともにする。

(和訳 矢向瞳)

## The Summary

### TOWARDS SELF-EXTINCTION

By Kilonzo Kovulo

The idea of sustainable development is the concern of every nation that is ready to share in this era of technology. Sustainable development was first conceived in relation to the use of renewable resources, that an activity is only sustainable in as much as it can continue indefinitely the definition of sustainable development depends on who is scrutinizing the idea. As members of JKSC, during our 2nd student's conference held in Nairobi, Kenya, we concurred with the definition given in 1987 by the World Commission on Environment and Development that "Development is sustainable only if it meets the needs of the present, without compromising the ability of future generations to meet their own needs."

The first moves towards sustainable development is that all the peoples should understand their interconnectedness with all other forms of life in the biosphere. For many years human beings have lived as the rulers of all other forms of life in particular and the environment in general. Due to irresponsible activities that have had the negative impact on environment, human beings are now faced with survival challenges thus agreeing with the law of cause and effect. Everything we do set off a chain of events that

extends far beyond our control. In other words, everything is related with and interconnected to everything else. Since no part of the global ecosystem exists independently of another, none can be affected without affecting the others. From a layman's perspectives the world looks so huge and its resources so abundant such that they are inexhaustible. This must have been the cause of an illogical exploitation of the earth, its resources and its ecosystem. Resources are either 'renewable' or non-renewable-able. Many resources of the non-renewable type (such as petroleum and minerals) exist beneath the earth's crust, and so the earth's ecosystem has evolved with only limited exposure to them. As a result, many non-renewable resources are 'foreign' to the biosphere. That is why after their retrieval human being are faced with difficulties in their handling.

Consumption has gone far, beyond the immediate needs of basic survival, such as food, housing and the protection against enemies and predators thus prompting overexploitation of natural resources. The incorporation of social, environmental and equity issues into economic development is a necessary step to ensures that all people everywhere are able to enjoy a comfortable standard of living and improved quality of life without causing irreversible damages to the environment. According to ecologists, the modern human economy is a set of interactions of energy and materials that exist alongside and is dependent upon natural biosphiric process.

In the past, this interdependence of economic and ecological processes was often overlooked or unrecognized. The environment was regarded as unlimited source of resources to be exploited for production, or as a bottomless pit into which wastes could be disposed. On a personal level, we of course value the air, the water, the trees and wildlife. Markets do not incorporate this value into the prices of goods. What these prices do reflect is the extracting or growing raw materials, the cost of production, packaging, advertising and transport. What they do not reflect is the environmental costs associated with the production and distribution of the goods. For instance, unless a company pays the cost of cleaning up the water it pollutes, the prices of its chemicals will not reflect the true cost of producing them. If the companies were forced to pay these costs, its prices would increase encouraging consumers to look for other chemicals on substitutes. It also would encourage the company to find ways of reducing the amount of toxic waste it produces. In other words we should take full responsibility otherwise we shall be harming ourselves.

Individuals, NGOs, governments and other bodies should come up with more

and accurate ways of protecting the environment as more and sophisticated technology is introduced. For example there is "polluter pays principle" which states that whoever is responsible for damage to the environment should bear the cost associated with it. This may be difficult to enforce because it is not always obvious who is responsible for environmental degradation.

It will not be logical to deny the connection that is there between poverty, underdevelopment and environmental degradation. It is estimated that about 40 percent of the world's population lives in poverty. More than one billion people are considered absolutely poor, and every day an estimated 40,000 children die of disease and malnutrition. Often the poor are forced to exploit the environment due to limited choices of food and fuel. Deforestation, soil erosion and desertification are environmental problems that are often associated with extreme poverty. It is sad that poor policies that are environment unfriendly are formulated and implemented. Local and national economies feel the economic stress of degradation when Agricultural fields decline, fish catches fall, and the costs of cleaning up toxic wastes, providing health care and alleviating hunger begin to eat away at any profits. This symbolizes the selfish nature of human beings who have made themselves obviliovious of the destruction they cause to the biodiversity. When the poor are given the means and opportunity to break out of this problem, real sustainable development will be a reality.

At the same time industries and economies should be studied and well understood. The world's dominant economic systems are based on two potentially self-destructive and environmentally damaging principles: consumption and growth. Most human economic activity is centered on consuming resources, in addition, this activity depends on maintaining a growth in consumer activity.

Today industries consume 37 percent of world's energy, and emits 50 percent of the carbon dioxides, 90 percent of the sulphur oxides and many of the chemicals now threatening the ozone layer with depletion.

The growth in international trade for example the formation of World Trade organization will bring new contours in trade as well as in the markets and therefore, environmentalists and those with environmental concerns, should both monitor and search for ways in which the environment could suffer from irresponsible business and industrial practices.

Population growth is at an alarming rate considering the fact that available resources to sustain it are limited. The human population is

estimated to be 5.6 billion, and is increasing by an average rate of 250,000 people a day the equivalent of another Switzerland every 30 days, and a new China every 10 years. By the end of the millennium, there will be more than six billion peoples on this planet. Apart from population increase, the peoples location in the biosphere, their levels of consumption of energy and materials, and the technology used to attain a given standard of living all have an effect to the environment. Large populations do exert considerable stress on their ecosystems.

The idea of development goes hand in hand with energy consumption. Most energy use around the world is currently unsustainable. Inefficient use of energy is a problem today because it devours excessive amounts of our already scarce non-renewable resources. This pattern is prevalent in the developed world. To prevent the same from being adopted developing world (South) important lessons must be learned from developed countries; such lessons include the use of renewable energy e.g. solar, wind, geothermal hydropower etc. and biomass as used in China and India.

Better ways of wastes disposal should also be improvised. In 1991 UNDP estimated that 720 billion tons of world urban wastes are produced annually. Waste can have far-reaching and sometimes long-term and irreversible consequences for human health and environment. For example radiations from nuclear wastes are very harmful. In its report UNDP went further and declared " people often are too wasteful in their production and consumption, and then pay too little attention to proper disposal of refuse" . According to the U.N. International Atomic Energy (IAEA), the world' s 413 commercial nuclear reactors produced 13 percent of the world' s electricity in 1991. In 1980, these reactors also created about 9500 tons of irradiated fuel, bringing the world' s waste accumulation of used fuel to 84,000 tons-twice as much as in 1985, IAEA estimates that the total wastes generated from all the nuclear reactors now operating or under construction worldwide will exceed 450,000 tone before the plants have all closed down in the middle of the next century.

Improper disposal of hazardous wastes often results in tragedy. In the 1950s and 1960' s, some 2000 people at Minamata and Niigate, Japan, suffered crippling neurological diseases after eating fish poisoned by mercury wastes discharge into the sea. More than 400 of them died residual effect of the same is still felt up to date. World wide, fresh water wells have often been contaminated by leaks from chemical dumps, building of housing estates- such as those at Love Canal, in the US, and Lekkerkerk, in the Netherlands-

on land where chemical waste has been dumped has resulted in mass evacuations and hundreds of millions of dollars in clean-up costs. This should be a lesson to the developing world. Thanks to the Basel Convention on the Control of Transboundary Movements of Hazardous Wastes and their Disposal, adopted in 1989, that aims at ensuring that any authorized traffic in hazardous waste that takes place is carefully controlled, otherwise countries would face the problem of handling "foreign wastes" For example In 1984, 41 barrels of dioxin waste turned up in an abandoned abattoir in France. They contained heavily contaminated waste materials from a chemical plant in the town of Seveso, Italy, resulting from a chemical accident in 1976.

Human activities are now playing a key role in the climatic changes felt today. The atmosphere consists of a very thin layer, which is a collection of gases, vapour and particles surrounding the earth. It acts as a system for cycling and recycling carbondioxide, nitrogen oxygen and hydrogen, which are constituents of all living matter on earth. The atmosphere protects us from the threats of meteorites, which for the most part burn up as they go through the atmosphere, and the invisible threats like harmful radiation. The air we breath is now polluted in many ways: sulphur oxide, emitted mainly by power stations and industry; nitrogen oxides, emitted by power stations, industry and vehicles; carbon monoxide, emitted mainly by vehicles; and soot and dust, known technically as suspended particulate matter (SPM), found everywhere fuels are burnt. Air pollution affects more than human health. It affects monuments such as the Acropolis in Athens, the Coliseum in Rome and the Taj Mahal in India, which have stood intact for thousands of years, but in this century, are crumbling away because of acid rain. The blackened buildings of many cities, particularly those n Eastern Europe, stand testimony to our failure to control air pollution and to clean properly after it.

UNEP' s Global Environment Monitoring System (GEMS) monitors air pollution at 175 sites in 75 countries. In a recent assessment of sulphur dioxide pollution in 54 cities, GEMS reported that air quality is acceptable in 27 cities, marginal in 11 (including London, New York and Hong Kong) and unacceptable in 16 (including Rio de Janeiro, Paris and Madrid). Dust and soot levels were acceptable in 8 cities, marginal in 10 (including Toronto and Sydney) and unacceptable in 23 (including Bangkok, Tehran and Rio de Janeiro).

Today the international scientific community believes the human-caused

build-up of gases in the atmosphere will lead to enhanced warming of the earth's surface and to significant changes in regional climates.

Emissions of CO<sub>2</sub>, methane, chlorocarbons, halons and nitrous oxide are rapidly increasing the concentrations of natural greenhouse gases in the atmosphere, resulting in a human induced greenhouse effect. Due to global warming there will be an increase in water vapour, and the melting of snow and ice. As temperatures increase the air will hold more water vapour which in itself contributes to the greenhouse effect. As a result of global warming, climate models predict that the planet could eventually warm by an average of about 0.8 to 2.4 degrees Celsius. This means many physical and biological systems will be affected. One international scientific assessment concluded that a warming of 1.5 to 4.5 degrees Celsius would cause a rise in global sea levels of 40 - 120 centimetres by the end of the next century. This could lead to an increase in more intense or more frequent storms, including hurricanes (typhoons) and thunderstorms.

Acid rain is a direct consequence of industrial activity, sulphur dioxide rises from burning fossil fuels and reacts with water to produce sulphuric acid. As well, the nitrous oxides found in pollution are converted into nitric acid. These substances then fall to earth as rain and snow. Acid rain might fall up to 500 kilometres away from where it was actually produced. Acid rain causes massive destruction of ecological systems and corrodes several important national treasures and buildings as well as the weathering of structures vital to transportation systems such as bridges.

Due to pollution the ozone layer which is a form of oxygen, similar to that we breathe is faced with total depletion. The primary culprits in the attack on the ozone layer are chloro-fluoro-carbons (CFCs) and halons. Debate over the ozone layer first began in 1975, when researchers at the University of California at Irvine identified CFC emissions as the cause for the thinning of the ozone layer. In 1985, a "hole" in the ozone layer was discovered above the Antarctic. This created wide spread concern. Data provided by NASA and other agencies have shown that ozone levels fall by more than 60 percent over the south pole during the spring months. This hole is at times as big as the United States, and has been growing most years since 1979. According to the recent data from UNEP, the ozone level has also diminished, by five percent, over the middle latitudes, where New York and Madrid are situated, and may eventually show the greatest degree of disintegration over the equator.

The ozone depletion will lead to increased UV-B (Ultra Violet - B)

radiation to reach the earth's surface. Exposure to UV - B cause skin cancer and a possible suppression of the human immunity system. Increased radiations from UV-B can break down the leaves of crops, decreasing the efficiency of photosynthesis and water use. Simulated ozone loss studies show that ozone loss of 25 percent reduces the crop yield by 25 percent. In the long run, ozone depletion could reduce the productivity of many of the world's most important crops, making it difficult to meet the world's food needs.

Human activities are now threatening the biodiversity. The greatest diversity of biological life is in developing countries. This is because developed countries have destroyed many natural habitats. This has been as a result of large scale clearing and burning of forests, destruction of coral reefs, destructive fishing practices, overharvesting of plants and indiscriminate use of pesticides, draining and filling of wetlands, air pollution and the conversion of wildlands to agricultural and urban uses. In many cases, the root causes for the loss of biodiversity are found in basic economic, demographic and political trends. Global debt also creates an environment that is not conducive to the preservation of biodiversity. Human beings extract their very existence from biodiversity and therefore there is the very reason why they should be in the fore front for the protection of the same. Forests harbour a great deal of the biodiversity. Forests are much more than the trees - they are an entire ecosystem unto themselves. The loss of forests and woodlands around the world is a serious issue. It can contribute to changes in rainfall patterns, temperatures, wind speeds, aridity of otherwise fertile lands flooding and soil absorption characteristics. It can cause disruptions in lives of both people and animals. According to the Rainforest Action network, ill conceived development schemes are the main cause of tropical deforestation. Many of these projects are finance by American, European and Japanese taxes and by private banks based in industrialized countries.

Global annual deforestation for desert forest stands at an estimated 82,000 hectares, 60 percent of which is lost in Mexico and Pakistan. Hills and mountains lose about 2.5 million hectares of forest annually, 640,000 of which are lost in Brazil, 370,000 in Mexico and 150,000 hectares in Indonesia.

The biggest question is, "For how long will this tread towards self extinction continue?"

Now that as members of JKSC know all these facts what role or measures have we taken to reverse this tread so as to realize a sustainable

development?

The most important thing is conscious building towards sustainable development through intensive campaigns.

**JKSC is ready to do the following:-**

1. Carrying out education and training initiatives right from the grass root level as a way of creating public awareness towards matters concerning the environment in relation to development.
2. Cooperation/pursue cooperation with governments. Governments are the ultimate institutions that will facilitate implementation environment friendly policies.
3. Coordinate activities with other organizations.

**SOURCES**

- A presentation by JKSC members during the 2nd conference
- Lectures by UNEP officials
- 'Taking Action' UNEP publication  
compiled and written by Kilonzo Kovulo • JKSC Chairperson

## **分科会「開発協力と環境」感想**

### **立教大学 コミュニティ福祉学部 三年 矢向瞳**

プレゼンテーションでは自分が学んでいた水俣病について、発展の弊害として取り上げ発表したが、ケニア側からは「日本がそんなことを経験していたとは知らなかった」という意見が出て、悲惨な水俣の経験をプラスに生かすためのささやかな貢献が、ちょっと出来たかもしれないと思って嬉しかった。開発の問題は一口に環境と共存するようにすすめるのが良いと言っても、人間の欲や傲慢さが必ず邪魔をしてしまうだろう。またそれぞれの立場に立つと、悪いとは分かっているけどそうせざるを得なかったというような場合があることに気づく。そういうことを一緒に感じたかったので、水俣病を例に、チツソ・患者・一般市民の3つの立場になりきっ

て意見を言い合うというロールプレイをしたかったのだが、準備が間に合わず出来なかったのもとても残念だ。

興味のあるテーマの分科会に参加する形式をとったし、小人数だったため、他のメンバーとも意見や質問が多く交わらせて楽しかった。

フィールドワークも大変興味深かった。CAN DO でも面白い話が聞けたし、スラムでごみの山を見て考えさせられた。ケニアにはゴミの回収システムがないため不衛生だが、逆にどれだけゴミを出しているのか一目でわかるから、ゴミを出すことに敏感になるのではないだろうか、と期待した。その点日本は、回収されれば自分の目の前から出したゴミは消えて、どれだけゴミを買っては捨てているか実感できない。何メートルもあるゴミの山を良く見れば、私達が普段捨てているゴミがたくさんあった。結局同じである。ゴミを出すこと自体がまずは問題なのだ。

### 東京水産大学 水産学部 資源育成学科 二年 鳥飼恵美子

ケニア側メンバーのケニアの環境問題についての発表が興味深かった。想像以上にケニアの環境問題は深刻であった。根本の問題は貧困からきている。ケニアでは金がかかるリサイクルシステムもないし、裁く立場のものが賄賂を受け取るなど、政治腐敗のため、環境対策に関わる法も効果をなさない。都市部に人口が集中し、極端に人口密度の高いスラムが出来る。スラムではごみ収集が行われておらず、一人当たりの土地が少ないため、ごみをあまり出さなくても地域にごみが溜まってしまうのは自然である。フルマ地区を訪れたときにも感じたが、彼らの生活環境は本当にひどいと思う。ポリオなどの伝染病も感染しやすいと聞く。なぜ、ケニアではこのような状況が改善されないのだろうか。その問いに対して、ケニア側メンバーの意見で一番強かったものは、「環境対策が進まないのは、政治の腐敗のためである」というものだった。ケニアで今一番問題になっているのは政治腐敗なのだろう。それが環境問題にまで波及しているのだ。一刻も早く政治が良くなる事を願う。

Can Do への訪問においても大変貴重な経験をさせていただいた。Can Do では、市民の環境に対する意識を育てることに重点を置き、市民の向上心をサポートする形で事業を行っている。私たちはこれまでみてきた事で、一方的な援助は効果的でないことを認識した。また、環境を無視した開発も成功しない事も知った。Can Do は、こういった問題点を考慮した上で、革新的で効果的な事業を行っている。これからはこのような開発協力が主流になっていくのだろう。

### 慶應義塾大学 総合政策学部 四年 川田慎也

「**awareness and consciousness**」(気付くことと意識すること)これは分科会の最終報告として掲げられたキーワードである。誰でも環境問題が存在していることに気付きながらも、それが自分自身の問題と化しているとまでは意識していない。ある意味、基本的なことかもしれないが、その基本的な欠如している結果が、今日における様々な問題を生み出したのではないだろうか。

ケニア側メンバーとは、色々な場や活動において国籍や価値観等の相違から様々な誤解を引き起こしてきたが、環境問題に関しては問題意識も含め驚くほど建設的に議論が進んだように思われる。しかし、事前準備不足は歪めず、又言語の壁もさる事ながら、十分に議論が煮詰まっていなかったところもあったが、そこは日本側・ケニア側双方が支えつつ、互いの信頼醸成が図られたように思えた。

最後に改めて重要であると感じられたのは、「Think globally, Act locally」という思考を持つことであり、国籍等の差違を超越して共に地球規模問題に取り組もうとするチャレンジ・シップであるように強く感じられたことを記して、筆を置きたい。

分科会討議での1コマ  
One scene in section meeting debate  
エイズ班分科会報告

1、参加者

日本側	東京農業大学応用生物科学部 2年	青木さよ子
	東京水産大学水産学部 2年	大平智江
	慶応義塾大学法学部政治学科 2年	吉田恭子
ケニア側	Nairobi University	Ben Masese ベン マッセッセ
	Nairobi University	Leonard Otieno レオナード オティエノ

2、分科会二日間の活動

分科会では一日目と二日目に班ごとの話し合い、三日目に3つの各グループが話し合いを通じて得た知識を全体で共有する。ここではエイズ班の第一日目と二日目の紹介をしようと思う。

一日目は、国立博物館の芝生の上で、ケニアと日本のエイズ問題を交互に発表し、違いを見つけまとめていった。国も地域も文化も異なるため、状況のほとんどが異

なっているが、だからこそ学ぶ点も多い。はじめは社会的な統計や状況の比較をしていたが、話は次第に移り、特に性に対する意識の差が印象的であった。

例えば、都市ごとにガールフレンドや妻がいるのは普通である、という点だ。特に若い世代では、よく行き来する都市ごとにガールフレンドやボーイフレンドがいるのは特に不思議ではない。つまり自分の恋人が他に付き合っている人がエイズに感染していたら、自分も感染する可能性は高い。人間関係が複雑にからまり、だからこそエイズの脅威が常に身近にあるということだった。また、結婚した男性は各地に妻をもつことがあっても妻は複数の夫を持つことはできず、夫は逆に全ての妻と子供を養うことが前提だ。また、このシステムは総人口の約35%が男性という、女性が多いというバランス故に成り立っている。この時、国立博物館を見学に来た高校生達にエイズの簡単な講義をし、パンフレットを配ったり、白熱した議論をするなど興味深いものとなった。

午後に「幸せ」班と訪れた孤児院・ニューライフホームは、1994年に設立され、キリスト教的意味で孤児を育てるという趣旨の下、孤児の中でもHIVに感染している子供も引き取っている。

現在、ニューライフホームには23人の孤児がいて、そのうち5人がHIVに感染している。ここでは乳幼児のみを病院から引き取って保育するが、2歳になると他の孤児院へと委託する。

ニューライフホームでは、エイズ感染している子供の90%以上は陽性から陰性になる。それは生まれてすぐの状態では母親の感染した血液が体を流れているが、やがて自分自身で血液を作るようになり、その過程でHIVに感染しなければ陰性となるのだ。感染した母親から子供が飲む母乳を介してHIVウィルスが子供に移行するからである。過程でHIVに感染しないようにするためには、十分な栄養とHIVに感染していないミルク、そして愛情が必要だということだった。

孤児院、ニューライフホームでのフィールドワーク。

ここにいる赤ちゃんのお世話を半日しました。

**The field work at New Life Home.**

**We took care of orphanages in half a day.**

二日目では、主に分科会一日目（10日）に話し合った内容をメンバーで分担してまとめたレポートを最終チェックし、分科会3日目に発表できる内容にした。

この時に話し合われたこと、考えたこととは、エイズ問題を話し合うとき、それを個人レベルで予防するとなると無視できないのは、人々の持つ価値観ということだ。ケニアで、恋人や夫婦同士で、「コンドームを使用したい」と主張するのは、相手に対して「あなたはHIV感染している可能性があるから、コンドームを使いたい」というのと同じ意味なのである。つまり、妻がコンドーム使用の必要性を思っても、それを言えばHIV感染を疑われていると知った夫は、気分を害するというわけだ。夫は、妻が自分を信用していないと思うだろう。これが、コンドーム使用の定着しない理由の一つだと考えられる。

エイズを予防するために知識をつけても、価値観をどう変えていくか、難しいことを痛感した。

### 3、分科会内容

#### ①エイズとは

“AIDS”とは Acquired Immune Deficiency Syndrome(後天性免疫不全症候群)をあらわし、ヒト免疫不全ウイルス (HIV) によって引き起こされる。この HIV/AIDS は白血球を攻撃することで、体の免疫機構を破壊する。現在、HIVを完全に予防や治療方法は確立されていない。

HIV 感染後から AIDS の症状が現れるまでは数年から数十年の潜伏期間がある。感染経路としては、性交渉、HIVに感染した輸血、使いまわしの注射針、母子感染などがあげられる。また、食べ物や飲み物を共に食べる、握手する、蚊や虫による媒介からHIVに感染することはない。

#### ②エイズ孤児

世界状況として、主に異性間性交渉によってエイズが広がっているサハラ以南アフリカ諸国では、600万人の人がHIV感染していると推定され、その約半数は妊娠可能年齢に達する女性である。中央アフリカ数カ国の町では、30歳から40歳の人口の40%がHIVに感染していると報告されている。エイズ感染者の大部分は、18歳から44歳の親適齢期であるとも言われている。

HIV感染している母親から生まれてくる子供に、HIV感染する確率は約30%である。1990年には50万人もの感染している子供がアフリカで生まれた。そして感染した母親から生まれる子供の70%はHIV感染していないが、彼らの母親や父親は大抵の場合エイズによって死んでしまい、子供達は孤児となってしまふ。

両親がエイズによって死亡してしまった場合、残された子供をエイズ孤児という。この場合、感染している子供も感染していない子供もエイズ孤児に含まれる。ユニセフの調査によると、1990年代の中央アフリカと東アフリカの10ヶ国で、310万から550万人の15歳以下のエイズ孤児がいる。少なくとも900万人のエイズ孤児がサハラ以南のアフリカにいたと思われる。

ケニアでは、全人口の7.5%の成人がHIVに感染していると言われている。都市部では住んでいる人口の13%から14%、田舎部では住民の8%から9%の感染者が推定される。調査によれば妊娠女性の20%がナイロビ、モンバサや他の都市でHIVに感染しているとも言われている。またキスムでは妊娠女性の35%が感染しているとの報告をしている。すでに、ケニアでは20万人のエイズ孤児がいる。垂直感染によるエイズ孤児は生きることができても10歳程度までだといわれている。若い人を失うということは、国としての生産力を失うということに等しい。

ケニアの状況とは異なり、日本でHIV感染しているエイズ孤児は報告されていない。理由として、親が感染するケースが非常に少ないのと、感染者は子供を産んで、その子供が感染するというリスクを犯したとしないということがあげられる。

### ③エイズの予防

医療従事者達は、この病気を押さえる一番の方法は教育だと考えている。地域社会の人たちにAIDS/HIVの感染原因は何か、どのように病態が進行するのかなどの正確なAIDS/HIVの性質を認識させることで、彼らが自分達の生活中で正しい選択を行うことができるのではないかと。

また、ウィルス感染を防ぐものとして、性交渉時にはコンドームを使用すること、注射針や剃刀など、皮膚を傷つけるものを人と共有するのは避けるか、消毒されたものを使う必要がある。

### ④エイズの現状把握と文化とエイズのかかわり

エイズはケニアにおいて、大多数の人々がエイズは自分にとって身近な存在であると感じるほど深刻な問題となっている。ケニアでは人口2800万人のうち210万人もがHIVに感染していると報告されている。1982年に初めてエイズがケニア内で発見されて以来、驚くべき速さでHIV/AIDSに感染する人が増加している。しかしながら、大多数のケニア人はHIV/AIDS自体についての知識を持ち合わせていない。HIV/AIDSによる影響は次のようなところで見られる。

例えば、病院の病棟がAIDS患者によって80%近く占められているにも関わらず、社会においてHIV/AIDSのことが多く語られない。また、エイズによって両親を無くしたエイズ孤児が増え、生活を路上でするようになり、ストリートチルドレンが増えてきている。

HIV/AIDS はケニアの社会のいたるところで影響を及ぼしている。その影響は社会的、経済的、政治的構造にまで浸透している。ケニア社会には HIV/AIDS に感染している人を恥じたり、さらには不名誉なことと捉えたりする傾向がある。具体的には、

- 1、HIV/AIDS に感染している人々は、性の道徳がかけているとみなされ、仕事場・家庭・教会等社会集団において軽視されたり差別されたりする。
- 2、HIV/AIDS 患者はその家族によって見捨てられたり、家から追い出されたり、さらに殺されたりすることもある。
- 3、働き手を失った工場、特に運営能力のある比較的裕福な管理職を HIV 感染で失うことで、会社が潰れ、経済が停滞する。
- 4、子供たちは孤児として、自分たちで生きていくために働かざるをえない状況になる。子供なので働き口がみつからず、ストリートチルドレンになる数が多い。
- 5、HIV 感染者は「感染した」という事実から、時に仕事を失い収入を得られなくなる。
- 6、保険会社は HIV/AIDS 患者を対象外としている。
- 7、銀行の中には HIV/AIDS 患者にローンを貸さないところもある。
- 8、一定のコミュニティでは、宗教的理由からエイズ感染者を追放する。

JKSC が調べたところ、ケニアの HIV/AIDS に対する政府や国際社会からの対応は、まだ十分だとは言えない。HIV/AIDS を議題にした国際会議が開催されてはいるものの、その影響力は端々には行き渡らない。与えられている支援は十分とはいえないほどのものである。なぜならまだ数え切れないほどの HIV/AIDS 感染者、AIDS による死亡者、AIDS 発病者が何もされぬまま日々を送っているからである。

また、一番 HIV/AIDS にかかりやすいのは性的交渉を頻繁におこなう人々である。さらに、エイズウィルスは免疫力を弱めるために他の病気にかかりやすくなり、他の病気の数も増えている。

エイズには根幹治療法が無く、効果のある薬はどれも高いために、HIV/AIDS 患者は病院で治療を受けずに、家で簡単な治療を受けることを勧められる。HIV/AIDS 患者数が増えているにもかかわらず、発病してしまった人を介護する施設は非常に少なく、エイズ孤児のための施設がわずかに存在するのが現状である。

## ⑤日本の現状とケニアの現状比較

性的交渉でエイズに感染しやすいことは先ほども述べたが、平均的にケニアでは10代前半から、日本では10代後半から性的交渉をする人が目立ち始める。ケニアでは10代前半で性的交渉をはじめ、その後不特定多数の相手と性的な関係をもつことが一般的である一方、日本では相手との信頼関係により一対一の付き合いをするのが一般的である。

ケニアにおいて既婚者は配偶者が生きている限り性交渉は夫婦間でしか行われな

いとされているが、実際に守られていることは多くない。日本でも未婚者の間で性的交渉は一般的に行われているが、ケニアに比べて HIV/AIDS の問題はそれほど深刻ではない。

日本と比べケニアで HIV/AIDS が広がっている原因として、日本では長い間性教育が行われてきたがケニアでの性教育はつい最近になって始まったということ、日本では女性の意志で性的交渉を拒否することができるが、ケニアではまだ女性にそれだけの権利がないことなどが考えられる。つまり HIV ウィルス感染を撲滅するには、未だ弱い立場に置かれている女性の主張が認められるようになる事が重要である。

日本とケニアの間には文化の面でも大きな違いがある。ケニアのいくつかの部族で、エイズ感染の大きな要因となっている、未亡人を亡くなった夫の兄弟が受け継ぐという文化が依然として残っている。日本においては経済的な援助はあっても、肉体的関係を持つことはないだろう。ケニアのこの伝統では、未亡人を引き取った男性の妻にも、感染する可能性が非常に高いことを示している。

また、ケニアにおいて割礼はかなり地域に根付いたものであるが、日本では割礼というものは存在しない。割礼によって消毒されていないナイフを使いまわしにすることがあるので、そこから感染が広がっていくと思われる。

ケニアでは避妊さえしない地域も存在し、これらがその地域の部族を危機にさらしている。たとえコンドームを使用しているところでも、正しい使い方をされているか定かでない。日本では、コンドームの使い方やこれから社会がどのように変化していくかについての情報を手に入れることは簡単であるが、ケニアでは地理的・技術的・言語問題もあり、情報が十分広まらない。

特筆すべきことは、ケニアでの子供の性の乱用が日本より大きな問題となっていて、このことで HIV/AIDS の感染はより広がっているということだ。

結局、ケニアで HIV/AIDS を撲滅するためには多くの努力が必要である。性教育をより充実させ、男女間の関係はケニアのように富や財産によってできるものではなく、信頼の上に築かれる必要がある。割礼は、消毒したナイフを使用するべきであろう。また、社会はウィルスや HIV/AIDS、避妊の情報に目を向ける必要がある。これらを踏まえた上で、ケニアにおける HIV 感染者の広がりや社会的、経済的、政治的原因として以下のことが挙げられる。

- ① 異なる場所で生活をする人が多い夫婦間の肉体的疎遠。
- ② 貧困による売春の促進
- ③ 衛生管理がゆきとどいていないため、血液製剤や医療器具を介しての感染。
- ④ HIV/AIDS を公の場で話す機会が少ない。
- ⑤ 家から離れることによる複数の人と性的交渉。
- ⑥ HIV/AIDS テストを実施の不足。
- ⑦ 現実の状況を示すデータの不足。
- ⑧ 死亡診断書に HIV/AIDS で死亡しても HIV/AIDS が原因と記載されない。

⑨ HIV/AIDS は魔術であると信じる人がいる。たとえばルオ族では、HIV/AIDS の症状と似ているチラという病気があり、そのチラは祖先が誰かの行動に不満を抱いたときに起こるとされている。

## ⑥エイズ対策

HIV/AIDS を防ぐために、正しい知識を得る性教育が必要である。日本では小学校高学年から性教育が行われている。以下は日本の例である。

### <10年程前>

エイズについての十分な情報を得ることができていなかった。

性教育で重点がおかれていたのは HIV/AIDS は感染経路が決まっているので怖がる必要はないということである。

### <現在>

先生によって差はあるが小学校において HIV/AIDS についてかなり詳しく学ぶ。重点がおかれているのは HIV/AIDS 感染者とどのように共存していくかである。

ケニアでは最近まで性教育は行われていなく、最近になってようやく徐々に行われるようになって来た。行われるのは、セカンダリースクール（日本では中学校に相当）からである。他には、テレビ、ラジオ、広告などのマスメディア、友達や家族を通じて得ることができる。ただしマスメディアによる情報は、英語・スワヒリ語によるものが多く、部族語のみを使用する人々には意味がないことも考慮に入れるべきである。

## ⑦HIV 感染者のケア

### [日本]

保健所・NGO による相談やカウンセリングで、情報提供や心理的サポート、感染者同士によるカウンセリングが行われている。一般市民への啓発として 勉強会やニュース・レターの発行、講演会などイベントへの協力が行われている。

また、日常生活における心身両面の援助や入院時などの、身の回りの援助、入院患者の家族への宿泊所の提供、宅配給食活動や食事会、HIV 感染者同士の交流の場を提供することも行っている。

HIV 感染者は 1998 年より身体障害者として認定された。その結果、様々なサービスが受けられるようになり、またサービスを通して社会参加が可能になった。医療費を援助してもらえるようにもなった。(更生医療)

### [ケニア]

HIV/AIDS 感染者のサポートグループがあり、カウンセリングなどの精神面でのサポートを行う。また在宅ケアでは栄養バランスのとれた食事の提供、身体を綺麗にすることなど、身の回りの世話なども行っている。地域社会の一員として過ごせるようにサポートを行う NGO 団体も活動している。さらに、マスメディアによる HIV/AIDS キャンペーンでは HIV/AIDS 問題が深刻に取り上げられている。そして

最近では HIV/AIDS 患者に対する偏見がなくなりはじめ、仕事を得ることが可能になってきている。

### ⑧行動を変える

HIV/AIDS 感染に対して、積極的に HIV/AIDS を防ごうと各個人にできることを実践することで、徐々に社会はよい方向に向かうだろう。つまり、何かしら実践することは HIV/AIDS 感染を防ぐこととなり、感染者を減らす事につながるだろう。それは個人の意識や行動力を必要とする。人々はなぜ行動を起こして実践しなければならないのか？それは、知識だけではエイズを食い止めることはできないからである。

HIV/AIDS は性交渉を通じて感染し、治療薬や十分な栄養をとらないと、治らないまま死んでしまうと言われているにもかかわらず、人々はリスクの高い性交渉を続ける。HIV 感染は全ての人に影響を及ぼすために、一人か行動を変えればそこで HIV 感染を食い止められるかもしれない。もし私達が「行動を変えることは可能である」、「行動を変えることはエイズを防ぐ過程である」と信じれば、間違いなく私達は HIV/AIDS に勝つことができるだろう。具体的にどのように行動を変えるか、それは各個人の考えによるものであり、だからこそ様々な手段での情報提供や、共同体での啓発活動が必要だと考える。

### ⑨JKSC のこれからの取り組み

日本ケニア学生会議はエイズと戦っていくため以下のことを行いたいと考える。

- ・若い世代の人々に HIV/AIDS や性問題について知ってもらう
- ・コンドームの使用を推奨し、コンドームを使うように呼びかける
- ・HIV/AIDS について、身近な人と話す
- ・HIV/AIDS のことを考え、友達、恋人との性交渉について敏感になる
- ・NGO 団体、厚生省、エイズに関心のある企業などと経験や考えを共有しあい、新しい知識を得ながらエイズ撲滅に勤める
- ・HIV/AIDS に関する冊子を学生や社会に広く配り、多くの人が HIV/AIDS の知識を得ることのできるようにする。

国立博物館の芝生で討論している様子。

Discussion about AIDS situation in Japan and in Kenya in National Musium.

#### ⑩日本人学生とケニア人学生のH I V / A I D S意識調査

エイズが社会的問題となっている今、感染者のかなりの割合を私達と同世代の人が占めている。そこで我々は日本とケニアの学生に同じアンケートを行いその意識の違いを比較してみることにした。以下の資料は、日本人学生対象人数87人(2001年2月実施)とケニア人学生対象人数48人(2001年2月末～3月上旬実施)の協力で行ったものである。

#### Q 1, エイズと聞いて何を連想しますか

##### [日本人学生]

不治の病ー27 血友病ー7セックスー10 血液ー3 母子感染ー3  
コンドームー2 アフリカーー2 同性愛ー2 差別ー2 教育ー2 その他ー7

##### [ケニア人学生]

死ー33 かからないようにするー3 エイズにかかっている人を助けるー2  
エイズ孤児ー1 道徳の欠如ー2その他4

このように見えてみると日本では血友病を連想する人が多い事が分かる。また、治療薬で AIDS 発症を遅らせることができる日本とはいえ、まだエイズは不治の病なのである。ケニア人学生の回答からはエイズを現実問題として捕らえている事が分かる。現在の社会問題となっているエイズ孤児をはじめ、身近に存在するエイズ感染者を助ける事、治す手立てがないので最終的には死にいたることを認識しているのである。

#### Q 2. エイズは自分と関係ないものだと思いますか?

##### ・日本

関係あると思う… 61%  
関係ないと思う… 16%  
分からない…………… 23%

##### ・ケニア

関係あると思う… 86%  
関係ないと思う… 10%  
分からない…………… 4%

日本の学生に関係あるという答えが63%あったのは意外だが、メディアや性教育においてエイズに関する事が広く知られている結果だと思われる。ケニアの学生の大半は関係あると答えており、エイズに対する危機感が強いことが伺われる。

Q 3. 人がHIV性だと分かったら今まで通りき合うことができますか？

・ 日本	・ ケニア
出来る…………… 61%	出来る…………… 61%
出来ない…………… 6%	出来ない…………… 10%
分からない…………… 33%	分からない…………… 29%

両国学生の間には大きな意見の差は見られない。

Q 4. 恋人がHIV性だと分かたら今まで通りき合うことができますか？

・ 日本	・ ケニア
出来る…………… 25%	出来る…………… 59%
出来ない…………… 18%	出来ない…………… 12%
分からない…………… 57%	分からない…………… 29%

Q 3. に比べ大きく違いが出た。日本の学生の「分からない」57%と、ケニアの学生「出来る」の59%が、ほぼ等しい割合で最も多い答えであった。日本の学生では分からないと答えた人が半分以上いる。それはこの質問のような状況を想像することが、困難なのではないだろうか。ケニアの学生側では半分以上が出来ると答えている。だが、「分からない」も29%おり HIVの蔓延率を考えると、「分からない」という答えが多いように感じる。

Q 5. セックスの時コンドームを使用する目的は何ですか？

・ 日本	・ ケニア
避妊…………… 29%	避妊…………… 9%
エイズ予防…………… 2%	エイズ予防…………… 2%
両方…………… 69%	両方…………… 89%

避妊にのみに用いるという答えと、エイズ予防・避妊の両方に用いるという答えの間に差がある。両国の HIV に対する危機感の差が見られる。

## Q 6. あなたがエイズであることがわかったらまず何をしますか

### [日本人学生]

医者に行くー18 旅にでるー3 家族に言うー12 人生について考えるー6  
知識を身につけるー2 分からないー2 恋人に言うー2 その他ー3

### [ケニア人学生]

カウンセリングに行くー8 自殺するー10  
何をしたいのか分からないー9  
事実を容認しようとしてつとめ良い方向に考えるー8  
祈りをささげるー3 家族と話すー3 その他ー7

このことから日本人はエイズを漠然と捉えている事が分かる。治療だけを考えて、精神的なケアを考慮した回答が全く得られなかった事からもこのことはいえるだろう。また精神的ケアの制度も不十分で、カウンセリングの存在が浸透していない状況が原因であろうか。一方ケニア人学生の回答からはエイズから逃げようとする人とそれに立ち向かおうとする2つの方向性がみとれる。どちらにも共通して言える事は非現実的な手立てではなく、現実的にとることの出来る手立てであることだ。

HIV感染者の数が少ない日本と、多くの感染者のいるケニアの学生を対象に行うアンケートなので、大きな違いが結果に表れると思っていたが、違いはそれほど目立たない。理由として、ケニア側では大学生を対象としていることから、それなりに教育を受けてきている階級であるという点が考えられ、日本側では日常生活においてあまり意識していない事柄であっても、アンケートとして改めて聞かれると意識してしまうという事が考えられる。

## 4、分科会感想 エイズ問題班

### 慶応義塾大学 法学部政治学科 2年 吉田 恭子

分科会をはじめる前は言いたいことを伝えることができるのか、向こうの言いたいことを適切に理解することが出来るのか等不安があったが、いいケニヤ人・日本人に恵まれ楽しい分科会となった。この分科会を通じて、実際に体験する、生の声を聞くことは本を読んだりパソコンで調べたりするのと比べ心に響く度合いが全く違うことを、また知識を持つこととそれに基づいて行動できるということは全く違うことを実感した。フィールドワークで行ったエイズ孤児院でそれを経験した。エイズの感染経路を知識としては持っていたが実際エイズ孤児が目の前にいたときにそれに基づいて行動することが出来なかった。またエイズの危機が身近に感じているケニヤ人の生の声を聞くことでどのぐらいエイズに対して関心がありどのように感じているかがわかった。

## 東京農業大学 応用生物科学学部 2年 青木さよ子

3回の分科会を通して、アフリカ(ケニア)においてエイズの問題はとても深刻で少しでもその被害を減らすために努力されていることがわかった。しかし、日本でもケニアでも AIDS/HIV に関心をもっている人は正しい知識をもち分別のある行動をしているがそうでない人はリスクの高い行動をしているということがわかる。特にケニアでは10代前半から性交渉を始め、一般的に不特定多数の相手がいるというのだから驚いた。10代前半で正しい知識をもち HIV/AIDS の恐さを知っている人はどのくらいいるのだろうか。また、なぜ性交渉を行うのかという質問に対して「性交渉は愛の表現である。他にどのように愛を表現するのか。」という答えがケニア側から返って来た。これに対して日本とケニアの考えの違いというよりは男女間の考えの違いを感じた。ケニアでは文化的な問題もあり日本に比べ HIV/AIDS から身を守るのは難しいがそれでも各自が強い意志をもっていれば解決できる、解決できないまでもう少しよい状況になると思う。最も HIV/AIDS が深刻である地域の同年代の意見を聞くことができてよかったと思う。

## 東京水産大学 水産学部 2年 大平智江

エイズ問題とは、アフリカ大陸を蝕む深刻な問題であると同時に、世界規模で広がり解決策を考えていくべきものである。だからこそ、市民レベル、ウィルス専門家レベル、政府レベル、国際レベルで話し合いがもたれる中で、学生レベルで討論することも大きな意味があると考えている。

話し合いは、日本とケニアと状況についての報告で始まった。人口に占める感染者確率が日本は非常に低いのに比べ、ケニアは高い。そこにある様々な背景…「日本での AIDS 感染者数は少ない。」「例え感染しても高額なエイズ治療をすることのできるほど、豊かだ。」そのようなイメージだけでなく、私達が話す薬害 AIDS の実態、それをとりまく日本社会。同時に報告されるケニアの状況は、「想像以上の深刻さ」と一言ではくくれない現実があった。ケニアでの恋愛観、結婚観、その背景にある伝統社会や人口比率などは、複雑に絡まり、エイズ感染を広げる原因ともなっている場合が多い。

状況の複雑さゆえに解決が一筋縄でいかないことを実感した。それは日本での薬害エイズ問題や、ケニアのエイズ問題どちらにも言える事ではないだろうか。

これから先、私達はエイズ問題を通して自分達の社会問題を見ることとなるだろう。ケニアでは、エイズ感染原因となる売春やエイズ孤児のケア施設不足の問題、政府のエイズ対策が遅れていることがあげられる。「貧困」がもたらすひとつの病としてだけでなく、私達の社会の病巣を暴いているエイズ、そうとも思える。

これからどのようにエイズ問題に立ち向かっていくか、そのよき道を、ケニアにいる友と探していきたい。

## 分科会報告「幸せ」班

### 分科会メンバー

日本側	中村香織	日本女子大学	人間社会学部	現代社会学科
	大原京子	中央大学		国際政策文化学科
	梅川瑞穂	東京水産大学	水産学部	海洋環境学科
ケニア側	Jacqueline Anyanzwa	USIU-A		国際関係学専攻

### テーマ

「幸せ」とは何か。

### 日程

分科会第一日目

午前中 日本側 「幸せ」に関するアンケート結果を中心としたプレゼンテーション(梅川)。

幸せ班全体で、それに関する討論

午後 フィールドワーク

「A I D S」班と共に、AIDS 孤児院「New Life Home」へ。

ここで、子供たちの世話をするボランティア活動に参加

#### 分科会第二日目

午前中 ケニア側 「幸せ」に関するアンケート結果を中心としたプレゼンテーション(ジャッキー)

全体で、それをもとに討論会

一日目と二日目の討論のまとめ

午後 フィールドワーク

ストリート・チルドレンの更生施設主催のコンサート、

「Children's Voice」～Please Listen to Us～

に参加

#### アンケート結果からの考察（次ページ参照）

対象：大学生

実施期間・方法：2001年の1月から2月にかけて、電子メールの送信や大学構内でのアンケート用紙配布を行った。

日本	男性	44人	ケニア	男性	20人
	女性	36人		女性	20人

1. あなたの今の幸せを数字で表すと何%ですか。

結果のグラフからわかるように、日本・ケニアともに女性のほうが、幸せの%が高い。その理由を、今回聞きそびれてしまったことが残念である。

3. 何歳まで生きていきたいですか。

男女での違いはあまり認められない。また、日本・ケニアとも、同じように考えている。

5. あなたは今の自分が好きですか。

これに関しては、男女の違いはあまりないが、日本とケニアでは大きく差が出た。グラフを見てもらえればわかるように、「はい」と答えた日本人は半数以下。それに対して、「はい」と答えたケニア人は女性で8割、男性は100%である。

8. あなたが結婚相手に望むことはなんですか。

この質問では、「性格」「共通の趣味」を大切と思う人が男女、日本・ケニア全てにおいて多かった。万国共通の思いなのだろう。

9. あなたは子供が欲しいですか。

この質問には、回答者の8割以上が「はい」と答えた。一方で、少数ながら「いいえ」と答えた人もいる。日本の女性の場合、育児と仕事の両方を考えたうえで、仕事を続けたいから、欲しくないという人が多いようだ。

10. 9で「はい」と答えた方は、何人子供が欲しいですか。

日本・ケニアともに2～3人という人が多い。1家族の平均子供数が2人未満の日本と、平均の子供数をもっと多い(正確な数はわからないが、4～5人兄弟がいることは決して珍しくない)ケニアで、同じような結果が出たことは興味深い。日本・ケニアの若者たちは、今の自分たちの暮らしや親の様子を考えた上で、それ以上は経済的に苦しいと考えているようだ。













## 「幸せ」班フィールドワーク報告（3月10日、17日）

日本女子大学2年 中村香織

分科会「幸せ」班は、1日目は「エイズ」班とともに HIV に感染した乳幼児の孤児院ニューライフホームを訪問した。そこでお話を伺った後、みんなで1日ベビーシッターになって、子供達の世話をした。エイズ感染している子供を抱くと陽性 positive の子が陰性 negative になることがあるそうだ。それには科学的な理由もあるのだが、子供が HIV に感染しないようにするには、愛情が必要なのだ。HIV に感染しているの事実を忘れてしまいそうになるくらい、ここの子供達はたくさんの人達の愛情を受けて、幸せいっぱいの無邪気な笑顔をしていた。赤ん坊の世話になれていない私にとっては試行錯誤の連続、ちょっと気を緩めると泣き出してしまうので、気の休む暇なく育児に全力集中して子供達と付き合った。ここで私は子供達か

ら、幸せをもらった。ここの孤児院に入れる子供は暖かいベッドや食事が与えられるが、ほとんどの HIV 感染者の子供は貧しく、食べ物も満足に取れないひどい状況だそうだ。ここは設備も整い、ここにいる子供達の環境はとてもよいものだったので、AIDS のことよりもベビーシッターをしたという印象が残った。

2日目のフィールドワークは、ストリートチルドレンに焦点を当てた。ケニアに来て初めてストリートチルドレンに接し、日本とは比較にならないほど、経済格差があるのだと実感した。ナイロビ市内のナクマツトやパークレー銀行の周辺を通るたびに、ストリートの子ども達に何度もお金をくれとせがまれた。それに対して、日本のメンバーは、パンやお菓子をあげる人もいたし、あげない人もいた。それぞれどのようにこの国にいるストリートチルドレンに対応すればいいのか迷った。逆にケニア側のメンバーは、殆ど対応は一緒だった。ケニアに来てから出会ったストリートにいる子供達に対して、どういった対応が幸せなのか、私達にできることは何かを「幸せ」班で考えてみることにした。そこで、ストリートチルドレンにドラムを教えているジャッキーの友人、アビルさんに彼の活動の話聞いた。アビルさんは、普段はナショナルシアターでアフリカの伝統的な音楽を教えているが、別の活動として毎週水曜日にストリートチルドレン達にドラムを教えている。「ストリートチルドレンの状況はとても厳しい。音楽は彼らに必要なだ。ドラムをたたくことで子供達は元気になれる。」と話してくれた。アビルさん達のグループはその日、ストリートチルドレンや障害者など子供の施設団体が集まって開いた「**Children's voice concert ~Please listen to us~**」というコンサートで演奏して帰ってきたばかりだということを伺い、みんなでこのコンサートを見に行くことにした。シティセンターの地下1階で、コンサートは行われていた。会場の外は、エイズや児童労働、麻薬、暴力、妊娠などを批判する子供たちが描いた絵が展示されていた。私達が行った時、元ストリートチルドレンで現在はリハビリテーション施設にいる男の子が、エイズにかかって、母親をうらむ話の歌を歌っていた。子供達はおそろいのピンクの T シャツを身に着けていて、ストリートにいる暗い表情をした子供達と違って、明るい笑顔を見せていた。隣に座っていた方が、リハビリテーション施設の校長マリエさんで、リハビリテーション施設について色々話を聞くことが出来た。マリエさんの施設は、子供達に洋服と教育、そして愛を与えている。マリエさんの施設に来たストリートチルドレン達は、必ず、元気で良い子供に更正するそうだ。マリエさんのもとには、妊娠した子供も来ると言っていた。また、ストリートにいる子供達は、シンナーを吸うなどの非行や犯罪あげくは、暴行されて妊娠するなど様々な事件に巻き込まれる可能性があるため、子供達をストリートにいさせないために、ストリートにいる子供達に食べ物などあげないで欲しい。リハビリテーション施設は、とてもストリートチルドレンの問題を解決するには有効な手段だと思うが、資金が足りないので十分な対応ができないと話してくれた。

## 感想

### 分科会～幸せを考える～

東京水産大学 梅川瑞穂

多分、幸せについて考えることができる、ということ自体が幸せなことなんだろうなあ、と私は臆げに思っていた。そして、笑顔。エイズ孤児院や、ストリートチルドレンの更生施設主催のコンサートに行き私が感じたのは、笑顔の量が幸せのバロメーターになるのかな、ということだ。笑うことができるということは大切なことだと思う。気持ちに余裕が必要だ。幸せの定義は、人それぞれだろう。しかし、幸せは、笑顔につながっている。

コンサートに行った時、そこの子供たちの描いた絵が展示してあった。胸に迫ってくる何かがあった。絵が巧いかどうかは問題ではなく、絵から発されるコトバがあるのだ。ストリートに立っていた頃の自分たちを描いた絵に、笑顔はなかった。そして、現在の自分たちを描いた作品。その違いは明らかだった。「Please Listen to Us」の文字が胸に痛い。私は、なんだか泣きたくなっていた。この台詞の裏に潜む、孤独の影を垣間見たような気がしたのだ。心の叫びだと思った。それと同時に、自分と向かい合ってくれる誰かがいることを、すごく幸せなことだと感じた。

この先、幸せについて考える時、私はこの時のことをきっと思い出す。私にとっての分科会の、一番の記憶である。

### 幸せ感想

日本女子大学 2年 中村香織

分科会「幸せ」班は、最後まで幸せ班として何をするのか迷った。準備不足と分科会の形態変化、ケニア側メンバー不足、日数不足など理由はあるにせよ、せっかくのテーマを生かせなかったと後悔が残っている。上手く進行しなかった大きな要因として、ケニア側と日本側の「幸せ」の捉え方の違いがあった。ケニア側は幸せチームとしてケニアの問題の1つ貧困層に幸せを与えて行く、take action をすでに目指して、「幸せ」とは何か、どういうものかといった議論より以前にこの問題に取り組みたがっていた。ストリートチルドレンに関するフィールドワークは、現状を理解するために見聞きする事よりも、子供を助けるような直接的な手段を取りたがった。経済的に豊かだが幸せとは何かと考える日本メンバーと絶対的貧困層とお金持ちの差がはっきり分かれ、貧困層の問題解決が最大のテーマのケニアメンバーとの間には大きなズレがあった。チームの中で感じたのだから、全体として話してみたら、もっと大きくギャップを感じただろうと思う。そんな中、ケニアメンバー

と活動し話し合う中で、ケニアの貧富の格差が私の想像以上のものであることを痛感した。ケニアには中間層はいるが、殆ど少数で、圧倒的多数の貧困層と少数の特権的な金持ち層に分かれ、貧困層は金持ち層と比べることができないほど、お金がなく生活は苦しい状況、その一方で、金持ち層の下の部分にいる人々は貧困層に落ちないように今の地位を守るために必死に働かなければいけない。モイ大統領の長い政権が、この国の政治腐敗、さらにはケニア経済などケニア社会に悪影響を及ぼしている。貧困層の生活は、「テリイブル！（ひどい）」。スラムのキベラはその例で、女性達の中には買春をしている人もいて、10円や5円という安い値段でやっている、ひどい時にはお金させもらえないこともあるそうだ。スラムでは、エイズや治安などたくさん問題がある、など、幸せを話し合う中でケニア社会の問題についてたくさん語った。ケニアは、経済悪化、政治腐敗、民主化、貧困、エイズなど解決しにくい難しい問題を抱えているが、こうした社会問題に強い関心を持ち、改善していかこうとするケニア側の姿勢から、このような意欲的な若い世代が担うケニアの未来は明るいものになりうるのではないかと感じた。結果として今回は大きな成果は出せなかったが、少人数だった事もあって、チーム内でお互いをよく知り尽くすことが出来た。また、滞在の中で、たくさんケニア人の幸せ観をみる事ができた。特に、こっちまで幸せにしてくれる、子供達のキラキラした笑顔。お互いの環境によって幸せの価値観は異なるが、幸せと感ずるところは一緒にいて同じだと感じた。来年も是非このテーマをやって欲しい。

## **Personal essay about happy group**

**Jacqueline Anyanzwa**

I was part of the happy team. I still have no idea how I ended up there but I can say that it was worth it. I really enjoyed the time that I spent with the students and I learnt a number of things from Kaori. She was always happy and I could not understand why. Being happy means being positive to all that one does and hopes for. Things in life do change if one is positive. Being negative has a big impact on our day to day life.

We did a questionnaire and found out that on certain issues the Kenyan youth and the Japanese youth shared the same views. We also found out that not all shared the same levels of happiness. This could be because of the current economic situation and hardships that are being experienced in the country. One of the field projects that we did was visit the New Life Home where the children

were infected with the HIV virus. Some of the children were adopted and others have died. We babysat them, fed them and had fun with them. The children, as innocent as they were, seemed happy and they smiled at us not knowing whether they would see tomorrow or not.

### Personal essay about happy group

ジャッキー・アンヤンズワ

私は、「幸せについて」の班のメンバーだった。私は、この分科会で話し合われたことが、今後どのように生かされていくかは今でも分からないが、しかし、話し合いそのものが、価値あるものだったと思う。私は、他のメンバーと過ごし、そして、香織からとても沢山のことを学んだこの時間を本当に楽しんだ。香織はいつも楽しそうにしている、私は、はじめそれがなぜなのかわからなかった。幸せであるということは、行動し、希望を持つ、あらゆることに対してポジティブになるということだ。もし、ポジティブに生きていくなれば、人生の様子も変わってくるだろう。そして、ネガティブであることは、私たちの日々の生活に強い影響を与えることになる。

私達は、幸せに関するアンケート調査を行い、ケニアの学生と日本の学生が、同じような考え方を共有しているという明確な結果を見出した。それと同時に、全く同じ幸せの水準を分かち合っているわけではないということもわかった。このことは、各国で経験されている現在の経済状況と貧困の違いによるものであろう。フィールドワークの一つとして、私達はHIVウィルスに感染してしまった子供たちのいる孤児院、“New Life Home”を訪れた。養子にもらわれていく子供もいれば、発症して死んでしまう子供もいる。私達はその子供たちのベビーシッターをし、赤ちゃんに食事を食べさせ、一緒に遊んだ。その子供たちは、幸せそうに見えるくらいに無邪気で、明日の命があるかどうかともわからないということをも知らずに私たちに笑いかけてくれた。（和訳:梅川瑞穂）

# プロジェクト

- 1、JICA のナイロビ事務所 **ト** 訪問（2月28日）……………88
- 2、伊藤忠商事ナイロビ事務所訪問記（2月28日）……………89
- 3、日本大使館表敬訪問（3月2日）……………91
- 4、プランインターナショナル訪問（3月5日）……………92
- 5、ケニア中央医学研究所（KEMRI）見学（3月7日）……………93
- 6、開会式・文化交流（3月8日）……………94
- 7、Deep Sea（ナイロビ市内のスラム）訪問（3月9・11日）…99
- 8、JICA ニャフルル見学（3月12日）……………102
- 9、JKSC Chats with Asahi Shinbun(March. 14<sup>th</sup>) ……104  
朝日新聞社ナイロビ支局訪問（和訳）（3月14日）

10、	ジョモ・ケニヤッタ農工大学訪問（3月15日）	106
11、	国連環境計画（UNEP）訪問（3月16日）	108
12、	ナイロビ郊外フィールドワーク（3月18日）	109
13、	キベラを歩く（3月19日）	112
14、	エカラカラ（Ekalakala）滞在（3月20～22日）	114
15、	エカラカラでの屠殺（3月21日）	117
16、	国際協力銀行ナイロビ事務所訪問記（3月23日）	119
17、	共同通信社ナイロビ支局長・大野氏との会談（3月23日）	120
18、	閉会式（3月24日）	122

## JICA のナイロビ事務所へ訪問（2月28日）

矢向 瞳

遠くからも目立つ高いビルの中に JICA のオフィスはあった。オフィスの窓からはナイロビ国立公園と、ビルの立ち並ぶ市内が見渡せる。あまりにも立派なビルだったので、ビルにお金をかける分もっと多くの貧しい人たちが救えたらいいのにと、友達とつぶやいてしまったくらいだ。

私たちに話してくださった仁田知樹氏から、始めにケニアについて、その後に JICA について説明があった。大変テンポよく楽しく話して下さり、リラックスしていろいろ質問できた。仁田氏が仕事の役目上一番気にしているのは、隊員や職員とその家族の安全である。来年の選挙をひかえ、ケニアの治安は悪くなる一方であるという状況で、ナイロビは特に暗くなると危険なので、残業が出来なくて困っているというナイロビならではの話も伺った。治安がよければ、ナイロビは「夏の軽井沢」と言えるほど気候の良い、住みやすいところなのだ。

\*ケニアの抱える問題

・長期政権

モイ大統領が22年大統領を続けている事がある。一期の年期は5年で、今は5期目である。アメリカは2期までなのだが、ケニアに決まりはなく長期政権反対の声により、憲法改正がなされるかもしれないとの事だ。

#### ・貧困

ケニアでは人口 2870 万人の内 1150 万人が貧困者（地方人口の 47%+都市人口の 29%）、つまり半分近くが貧困者と言われているが、何を貧困とするかによって結果は変わる。上記の数字は（1994年）貧困ラインを一人一ヶ月のお金が、地方＝約 2500 円、都市＝約 3750 円とした場合である。地方だと貨幣と関係のないところで生活している事があるので低く設定されている。警官であっても一ヶ月の給料が約 4300 円で、安すぎるからといってストライキを起こそうとした事もあるらしい。ちなみに Deep Sea（スラム）では掘っ立て小屋に住むのに、月に約 1200 円払っている。ケニア側メンバーに聞いた彼の家の電気代は月に約 3000 円。私の大切な安い食料だったバナナは一本 7.5 円。お腹一杯になる食堂の料理は約 150 円（ちょっと高い）。ケニア事務所所長橋本栄治氏のナイロビ便り「サバンナに吹く風」のコピーも頂いたのだが、それには 2000 年の時点でケニアの人口の約半数の人びとが一日 1 ドル以下の生活を余儀なくされていると書かれている。

#### \*ケニアに入っている JICA 協力隊員の様子

ケニアの隣の国タンザニアでは、部族が 100 以上もあるため、部族間の伝達に共通した言葉が必要であり、スワヒリ語を話せる人が多い。これに対し、ケニアの部族は 40 あまりのため、部族語で事足りてしまいスワヒリ語が普及していない。それぞれの地域に入っていく協力隊員はケニアに行く前に英語の研修期間があるが、スワヒリ語が必要な人は現地に来てから学んでもらうそうだ。スワヒリ語でも通じないところに行く場合は、個人で頑張って獲得するしかない。言葉は協力隊員として活動をする際とても重要だから、英語の通じないところに行くのはそれだけでハンデがあるのだ。

また隊員は、現地のカウンターパートナーと協力して仕事をするのだが、ケニアの場合、カウンターパートナーがエイズで亡くなってしまい、活動が出来なくなってしまうということもあり、問題だと言う。ケニアなど、エイズが猛威をふるっている国との国際協力ではこういうこともあるのだ。青年海外協力隊に興味のある日本側学生が何人かいたので、色々質問が出た。ケニアには現在 93 名（男性 53 名、女性 40 名）の協力隊が派遣され活動している。二年後の帰国の際、多くの人が「教えられる事のほうが多かった」という感想を残しているとの事だ。ただ、その後彼らがどう生きていくのだろうか。せっかくの経験を生かせずに日本にいる元協力隊員も多くいるだろう。毎年さまざまな国から多くの人びとが協力隊の仕事を終えて帰って来るのだ。水も電気も十分でない所でたくましく活動していた人たちもいる。彼らのパワーを十分に生かせる受け皿はあるのだろうか。

二国間関係を様々な担い手の立場から考えるに当たり、企業からの視点として伊藤忠商事ナイロビ・オフィスを訪問することとなった。

発展途上国が経済発展を図るに当たり、最も重要になるのは「直接投資・貿易」の存在であると思われる。日本の円借款事業が伝統的に重視してきた経済インフラ整備もこの点を捉え実施されている。途上国・移行国の初期段階において、ODAや国有・国営企業の存在が重要であることは言うまでもない。しかし、国の財政が果たす資源・所得配分（再配分）機能が、市場の失敗を超えて継続的に及ぼされれば市場メカニズムを阻害することとなる。こうした事態は、グローバル化が促進される今日において、大きな問題となって途上諸国に立ち塞がりつつあり、改めて「直接投資・貿易」を中心としたマーケット・メカニズムの重要性が認識されるに至っている。

こうした経緯から、日本を代表する商社である伊藤忠商事を訪問することにした次第である。尚、伊藤忠商事は日本とケニア間のトレーディング業務を行っている。他の日本企業に関する状況は、ケニア経済の停滞と治安の悪化により新規進出企業はなく、撤退が相次いでいる状態にある。

伊藤忠商事では、中山のぼる氏に業務概要説明と意見交換をして頂くこととなった。

日本企業を取り巻くケニア経済の厳しさを中心にして説明頂いた上で、様々な点について意見交換をして頂くこととなった。ここでは、特に二点に絞って記したい。

まず第一点目は、人材の育成についてである。長年に渡り、ケニア経済の変動を身をもって体験されてきた氏のご意見として、これからの発展を担って行くべき能力を備えた人材の不足や人材育成の枠組み不備、行政機構に携わる者の行政官としての意識欠如がケニアにおいて存在しているのではないかという指摘がなされた。これに対して、ケニア側メンバーのキロンゾ、ジャッキーも同様に、人材（特に公務員を中心に）の問題について、強い危機意識を持っていることを表すとともに、現状のケニアが取り組む重点として、人材育成が挙げられるものとの意見を述べた。企業の重要性が掲げられても、それを担うにたるアントレプレナーシップや、マネージメント能力を有する人物がいなければ、マーケット・メカニズムは真に機能することはないと見える。

第二点目は、農業生産の拡大・体制整備・技術革新である。ケニアが持続可能な開発を実現するためには、食糧の自給体制を確立すべきとの意見を挙げられた。多くの発展途上国（社会主義国も含めて）は、歴史的に農業部門での収益を工業化に向け利用を図り、農業の強化を図ることを怠ったために食糧輸入国に転落して、貴重な外貨を取り崩さざるを得ない状況に陥ったりしてきた。又、アフリカ諸国では、単品の商品作物に特化したモノカルチャー体制に置かれており、国際価格に左右さ

れ易い状況を創出し、食糧は輸入に頼る状況が存在している。

こうした状況下、社会・経済システムの基盤としての農業を拡大すべく、それを支える政府や海外からの支援枠組みを強化するとともに、“緑の革命”による生産性を向上させるような技術革新を図って行く必要があるものと思われる。

そして、こうした事項を実現すべく人材の育成が改めて重要になるものといえるとの話し合いがなされることとなった。

### 伊藤忠商事訪問 JKSC visit Ito-chu corporation

日本大使館表敬訪問（3月2日）

梅川 瑞穂

私たちは、日本大使館に表敬訪問し、池田二等書記官に日本の対東アフリカ政策についての話を伺った。

池田氏は日本とケニアの政治・経済・文化の関係について、話して下さり、私たちにとっては、生の国家関係を身近に知るよい機会となった。

経済関係について主に語ってくださったのは、日本ケニア間の輸出入についてだ。日本はケニアに工業製品を輸出しており、ケニアは日本にタバコや鉄鉱石、農作物を輸出している。実際、ナイロビの街を歩いていると日本語の書かれた自動車が走っているのをよく目にする。また、日本語が書かれていないまでも、日産やトヨタなどの自動車メーカーの車が多く、その多くが中古車の輸入によるものだそうだ。日本では、ケニア産の紅茶やコーヒーは有名である。だが、日本とケニアの貿易額は大きく開きがあり、対ケニアで日本は黒字を出しており、対日本でケニアは赤字となっている。貿易において、日本はケニアも含めてアフリカで多額のお金を得ているのである。しかし、日本はアフリカから工業材料や農作物などの重要なものを輸入しており、輸入なくして輸出をすることはできない。

文化の面では、まだお互いを知り始めた段階だが、ゆっくりと、しかし確実に少

しずつ関係を築いていっているようだ。お互いに、国費の交換留学生を派遣したり受け入れたりしている。他にも、大学ごとに交換留学制度を設けているところもある。ナイロビ大学でも、そういった日本人学生に私たちも実際に会った。また、ケニアへの日本人旅行者は多い。

政治に関しては、援助の話が中心となった。ケニアのGDPが、日本のODAの支出量と深く関わっているという話には驚いた。ODAの起こす事業がどれほど大掛かりで、お金の掛かるものであるかが窺えた。また、ケニア側メンバーの一人が、「日本は赤字決算なのに、なぜアフリカに援助をし続けているのか」といった質問をした。これに対し、池田氏は日本にとって、アフリカとのネットワークが大切なのだと語っていらした。アフリカの発展が、日本にとっても利益をもたらし、世界の発展にも繋がっていくという事だ。しかし、実際、日本の経済状態は危機的な状況にあり、今後の支援に関しては今までと同程度し続けていける保証は無い、ともおっしゃっていた。

私たちにとっては、大変貴重な話を伺うことができ、改めて、日本とケニアの関係について考えるよい機会となった。その後の、NGOやJICAのプロジェクト訪問、スラムの視察など、折に触れて、このときの話思い出し、考えを深めていくことができた。池田様には、ご多忙の中、貴重な時間を割いていただき、ありがとうございました。この場を借りて、謝辞を申し上げます。

## プランインターナショナル訪問（3月5日）

吉田恭子

プランインターナショナルはイギリスに本部を置く民間で非営利のNGOで、特定の宗教や政治に関係なく、国連に公認・登録されている。活動の始まりは1937年。現在、アジア・アフリカ・中南米の42ヶ国で地域の人たちの積極的な参加のもと、生活環境の向上を目指し、多岐にわたる開発援助プロジェクトを進めている。プランインターナショナルは日本ではフォスター・プランとして知られている。フォスターとは英語で育てる・奨励するという意味である。貧困による深刻な問題を抱えた途上国の中でもっとも弱い立場にあり影響を受けやすいのは子供たちだ。未来を担う子供たちが、それぞれの希望をもてる明日を実現するために、プランインターナショナルは子供に焦点を当てている。

今回の訪問ではケニアにある4つの支部のうちエンブでおこなわれている3つのプロジェクトを見せていただいた。それは、住居の向上を目指すプロジェクト、家畜によって生活向上を目指すプロジェクト、マイクロファイナンスによる生活向上を目指すプロジェクトであった。

住居の向上を目指すプロジェクトでは、劣悪な環境のもとでの生活は子供にいい影響を与えないため、一定の場所に人々を集め、コミュニティを作り、共同で家を

作ることがすすめられている。家の作り方はプランインターナショナルで働く専門家が教え、その後自分たちだけで作り、その経過を専門家がチェックするという過程でこのプロジェクトはすすめられている。

#### プランインターナショナルの指導によりコミュニティーに建てられた家

##### **Plan International gives instruction for building houses**

家畜によって生活向上を目指すプロジェクトは、牛を一家庭に一頭あたえ牛から得られるミルクによってその家庭の食生活の向上を図ろうとするものだ。また余剰のミルクは周辺の住民に売り、お金を得ることもしている。このプロジェクトに関してプランインターナショナルの専門家は牛にいい環境を教え、病気にならないよう注意をはかり、さらには子牛を作ることも手伝っている。

マイクロファイナンスによる生活向上を目指すプロジェクトでは、肉屋を開業した例を見せていただいた。マイクロファイナンスとは、何か事業をしたくてもお金がなくてできない人に対してお金を貸して事業の立ち上げを助けることで、借りたお金は返さなくてはいけない。私たちがを見せていただいた肉屋さんは事業に成功し、借りたお金は全部返し終わり次に八百屋さんを開くことを計画しているそうだ。お金を貸す際に事業は成功しそうなのか・貸しても返ってくる保証はあるのか等々をチェックし、判断するため、貸した金の大部分は返ってきているそうである。

ケニア中央医学研究所 (KEMRI) 見学 (3月7日)

吉田 恭子

当日は訪問に先立ち JICA によって実施されている第三国研修に参加させていた

だいた。第三国研修とは周囲の国々とテクノロジー、技術をシェアし協力して抱えている問題を解決することを目的とした研修である。今回はケニアをはじめウガンダ、タンザニア、スーダン、ジンバブエなどの国から合計 16 人の方々が参加していた。また焦点はエイズに当てられており一ヶ月ほど開催されていた。まず AMANI を訪れた。ここはカウンセリングをおこなうところで、エイズの患者数は全体の 20 パーセントを占めている。Individual Counseling(個人カウンセリング)、Train counselor(カウンセリングをおこなう人の育成)、outreach(広報)の 3 本柱で活動はおこなわれている。1 日に一人のカウンセラーあたり 4 人、月にすると 75-80 人の患者を診ている。基本的には予約制であるが緊急時には対応をしたり、お金がなくてもカウンセリングをしたりと融通の利くところである。カウンセリングをするにあたって他人とのかかわりを考え、カウンセリングに依存することがないようにすること、自信を持たせることを必要とし重点をおいている。

次にエイズの孤児院に行った。道に迷い時間がなかったためそこでお世話しているシスターの説明を聞くことができなかった。全体で約 50 人のエイズ孤児がいて、働いている人は約 10 人だった。ここでは発病している子もしていない子も同じように生活している。

その後に KEMRI にてエイズについてのお話をしていただいた。エイズには 2 つのグループがありこれらの発祥元は異なっている。感染経路には①blood(血液) ②sexual(性交) ③IVDU(静脈薬物使用) ④mother to child(母子感染)がある。

KEMRI で主におこなっているプロジェクトは 3 つあり、①production of HIV test kit in Kenya(ケニアでのエイズテストキットをつくること) ②intervention of mother to child transmission of HIV[in Kenya](エイズの母子感染を防ぐこと) ③screening of Kenyan medical plant as a anti-HIV drugs(ケニアに生息する植物からの対抗エイズ薬を作ること)がそれである。そして質疑応答の時間がとられた。質問の中には今後新しいかたちのエイズが発見、または生まれてくるかもしれないのではないかというものがあった。これに対する答えは、感染経路はかわらないにしても新しいタイプのエイズが生まれてくる可能性はないとはいえないというものだった。またエイズ検査機関があるにもかかわらず少数の人しかそれを受けないのはなぜなのかとの問いには、周りの環境(カウンセリング、病院のアフターケア)が整っていないという回答がなされた。最後に JICA の派遣員である小林さんに KEMRI 全体を案内していただいた。ケニアに来てケニア人と仕事のペースをあわせるのが大変だという事等ここで生活しないとわからないような興味深い話をしていただいた。

KEMRI にて JICA から派遣された小林医師の説明を聞く JKSC メンバー

Dr. Kobayashi gives a lecture to JKSC members at KEMRI

開会式・文化交流 (3月8日)

青木さよ子 中村香織 吉田恭子

### **Opening Ceremony 開会式**

3月8日、USIU-A 大学内のダイニング・ホールで、来場者や USIU-A の日本語受講生、ナイロビ大学学生など多数の人々が参加する中、第2回日本ケニア学生会議・本会議の開会式が開催された。

#### **Guest**

Mr. John L. Mugerwa Second secretary Uganda high commission

Mr. B.Munzala Ministry of foreign affairs and international cooperation

Mr. Tomoki Nitta Deputy Resident Representative Director for General Affairs and administration (JICA)

Prof. Mavuti Dean of student of Nairobi University

Dr. Brown the vice-chancellor of USIU-A

Ms. Rita J.Asunda The deputy vice chancellor, Student affairs of USIU-A

Ms. Keziah Nyamwea Financial Aid and Alumni, USIU-A

Mr. Katsuji Nakamura Japanese teacher of USIU-A

#### **Supporter**

USIU-A Student Affairs Council (SAC) Peoples' popular Theatre

#### **来賓**

JICA ナイロビ事務所から総務班次長仁田氏、外務省からムンザラ氏、ウガンダ大使館から二等書記ムガワ氏、ナイロビ大学から学部長マブティ氏、USIU-A から学長ブラウン氏、副学長アスンダ氏、経理部長ニャモヤ氏、日本語教師の中村氏

#### **協力**

USIU-A 生徒会 Peoples' popular Theatre(ナイロビ大学演劇グループ)

## 開会式の様子 Opening Ceremony

### Program

- At 11:00 Arrival and introduction of guests (来賓紹介)
- At 11:15 Introduction of JKSC members (JKSC メンバー紹介)
- At 11:20 History and mission of JKSC (JKSC について)
- At 11:30 Michezo Africa performance (USIU-A 学生による歌唱)
- At 11:40 Official speech (オフィシャルスピーチ)
- At 11:50 Vibe tribe performance (VIBE 族の伝統舞踊)
- At 12:00 Cultural performance by Japanese students  
(日本側学生による文化紹介)
- At 12:15 Cultural performance by Kenyan students  
By Peoples' popular Theatre (ケニア側学生による演劇)
- At 12:25 The trekking massai warriors (マサイ戦士のトレッキング)

### ◆日本食メニュー

昼食：親子丼、肉じゃが、お吸い物

お菓子：かりんとう、ようかん、ひなあられ、おせんべい、

### ◆料理人

青木 さよ子(栄養学部に所属する料理班のボス)

梅川 瑞穂(キャベツ切りならおまかせ)

吉田 恭子(一番奮闘！)

### 開会式料理の感想

青木さよ子

3月8日、日本人メンバー全員がケニアに着き早くも10日以上が過ぎ活動が着実に進んでいく中、開会式が開催された。開会式に参加してくれた人に日本のお菓子を楽しんでもらおうと、ひなあられ、かりんとう、ようかんなどを用意し和紙で折った箱に入れ少しずつ食べてもらった。さらに来賓の方々には日本料理を召し上がっていただきたいと思い、親子丼、煮物、お吸い物を用意することになった。慣れないキッチンに、きれいな包丁、水にさえも気を使わなくてはならないという状況で悪戦苦闘の結果なんとかそれらを作り上げることができた。やはり他の国で日本料理を作るというのはそれなりの労力を要するものであることを身をもって感じた。材料をそろえるだけでも大変で似たようなもので代用すること、省略してしまうことを考えなくてはならない。そして調理器具。炊飯器がないのはいまでもなく代わりになべを使用。普段使い慣れた菜ばしがなく、かつこう不便だった。その国にあるものはその国に適しているように作られているということを感じるとともに、日本の便利さを感じ、切れる包丁をこれほど有り難いと思ったのはしばらくぶりだった。

童謡「ふるさと」の歌詞を手話とリコーダーで披露する日本側メンバー

Japanese members introduce FURUSATO a Japanese children's song with sign language

### Cultural Night 文化交流会

ケニア内部では、インド系やアラブ系、モンバサ、キスムなど各地域から、またタンザニアやマリなどアフリカ各国、アメリカ、中国など多彩な国出身の学生が集まる USIU-A 大学で、各国、各部族の民族を紹介する文化交流会が毎年行われている。今回私達日本メンバーも日本文化紹介という形で参加させてもらった。

◆プログラム

- I おはロック
- II ふるさと (童謡歌・手話を入れて)
- III LOVE CALL (パラパラ)
- IV 少年時代
- VI よさこいー (相模原乱舞)
- VII 花 (童謡歌)
- VIII 狐の踊り (チロヌップ リムセーアイヌ古式舞踊)

◆日本食メニュー

お好み焼き と かき餅

料理を作ったの一言

吉田恭子

お好み焼きに使用した小麦粉がケニアで買ったマンダジ(ドーナツのような甘い食べ物)用のものだったので色も味も異なっていてお好み焼きといえるものができるのかが不安であった。中に入れたキャベツも硬くて、丸ごと一個をきざむのに手首の関節が痛くなるほど苦勞した。何とかできた物体にソースと青海苔をかけるとお好み焼きのような味になり一安心したのを覚えている。かき餅に関してはもちを乾燥させなかったなので、油の中に入れてふくらみ始め、收拾がつかなくなったが、慣れとともに段々と形になっていった。何はともあれ料理を食べてくれた人々が美味しいとってくれたのがなによりの救いであった。

文化紹介を終えて

中村香織

今回の会議では、交流の面に焦点を当てて、たかが文化紹介、されど文化紹介で直前までの練習、アイヌの狐の踊りに詳しい大野徹人さん、メンバーの菰田に踊りをおしえてもらい、かなり熱の入った文化紹介だった。ケニア人は、日本人がアフリカ大陸の中でケニアがどの辺にあり、どのような国なのかわからないのと大差ない日本人観を持っている。まず、日本がどこにあるのか知らないし、日本と中国が異なる国で、異なる言語、文化を持っていることもわかっていないようだ。一方で、日本と聞けば、ソニーや日産など日本製の電化製品がケニアの家庭の中で使われていて、豊かな経済国というイメージは浸透している。ケニア学生に日本について他の面を知って欲しい、この発表で日本に興味をもってくれるようになったら、と、ケニア渡航前から合宿や普段の定例会を利用して一生懸命踊りの練習した(何より自分達が踊っていて楽しかったのが一番だったが)。普段踊りから遠ざかり、高校の授業以来の踊りというメンバーがほとんどの、ド素人の私たちだったが、練習を重ねた結果、プロ以上というお墨付きの評価をもらうほど上達?した。今回の日本文化紹介は、去年クラブなどで流行したパラパラと伝統的な踊りとして地域の一大イベントとなっているよさこい、そして、日本もケニアと同様に多様な文化をもっていることの紹介として、アイヌの踊りを取り入れた、ユニークな内容にした。日

本側の発表は、開会式と夜の Cultural night の 2 回、日本文化紹介という形で披露した。メンバーは、それぞれ、カラフルな浴衣、よさこい、アイヌの衣装を身に付けて踊った。オハロックの時は、唯一男性メンバーの川田が慎吾ママに変身し、踊った。開会式の時は、見てくれる人の反応が一番気になり心臓が飛び出すくらい緊張したが、よさこいは、「サムライの動きのようだ」という反応や、ふるさとは、とても綺麗な曲という感想をもらった。夜の Cultural night では、じっと見ることでより体を動かすのが好きなノリのいいケニアの学生達が、おはロックでは、「おはー」とそれに近いポーズをとったり、パラパラで一緒に踊ったり、観客と一緒にになって踊った。日本メンバーの多くが初めてのケニアで、ケニアについて知らないことばかりだったけれども、一緒に踊ったり歌ったりすることが、互いに興味を示し、知りあい理解する掛け橋になっていたと思う。そして、私達の発表は強烈にケニア側に印象に残ったと感じる。直前までヘトヘトになって動いていたので、終わった後はかなり疲れていたが、それ以上の充実感を味わった。文化紹介の日が終わっても、カラカラで、DEEP SEA など行く先々で、オハロックや狐の踊りなど、みんなで踊った。歌と踊りを抜きにしては考えられないほど、会議中本当によく踊った。ケニア人には、私たちが「歌い踊るのが好きなゆかいな人達」として印象に残ったのではないか。

## Deep Sea (ナイロビ市内のスラム) 訪問 (3月9日・11日)

矢向 瞳

第一回目のケニア開催の時にも訪れているスラムである Deep Sea に今回 2 度訪れた。

### \*Deep Sea 訪問報告

茶色い濁った色の川に向かって急斜面になっているところに、段々に土の壁の小さな家がぎっしり立ち並んでいる。周りにはトウモロコシ畑、高台にはお金持ちの住む大きな豪邸。このスラムが見下ろせる豪邸の人々は何を感じているのだろうか。

9日に訪れたときは、小学校に案内された。小学校となっている仕切りのない一つの小屋は11日の話し合いにも使われた場所で、住民の活動場所、教会、集会場と用途は様々変化する。私たちが子ども達にあったとき、彼らはどうもろこしの粉とその他の雑穀をどろどろの液体状にしたものを、一人ずつマグカップに渡され飲んでいった。給食のようなものだろう。日本の学校の給食に比べてとてもシンプルであり、教会から支給されている。クレヨンやポスターも教会からもらっていて、昨年行ったメンバーはその変化に驚き、教会からの援助を受けることに慣れている印象を持ったと言う。その後、名古屋の小学校からケニアの子ども達にと預かってきた習字や絵を子ども達に一人一人手渡すと、競って手を伸ばしてきた。とても素敵な絵に魅了されてじっくり見る子どもたちもいた。そして日本人メンバーは元気なノリの良い踊り(オハロック)を披露した。子どもたちが出て行った後、先生をしてい

る Ms.Lydia Mungai が私たちに小学校の現状などを話してくださり、私たちも質問をした。

その後、それぞれ Deep Sea を歩き、家に呼ばれたりして話をした。共通の感想としては、みんな私たちがどんな援助をしに来たのかと期待していて、私たちは学生団体でそういった援助の専門家ではないのだが、意識が違ってしまっているという事だと思う。

ノートがないといわれてノートをあげるというのは本当の援助とはいえないだろう。本当にそうする事がいいことなのか、それをする事によってどんな影響があるのか、など吟味する必要があるし、まずは急がず十分に調査をし、信頼関係を築く事だという意見にまとめ、再び訪問する予定の 11 日はコミュニティの中心人物を集めてもらって話を聞くことになった。

11 日も、おもに Deep Sea の成り立ち、抱える問題を中心に質問し話を伺った後、スラムを一回りしながら掘っ立て小屋の中に入ったりして、コミュニティを見学した。

#### \* Deep Sea の調査結果

(衛生) 川のそばには穴を掘って囲ってあるだけの共同トイレ (穴が埋まるとそのトイレはおしまい。次のトイレを作る)、そして分別せずに捨てられているゴミの山。豪雨が降れば土の壁の家は流されて川の水は茶色くなるし、ゴミ山のゴミだって川に流れていく。だからこの川の水は汚いのだ。飲料水は買ったり、教会で (安く) もらったりしているが、洗濯をしたり身体を洗うのはこの川でおこなっている。ビニールが土に埋まっていたり、そこらに落ちているのが気になった。

(土地) 住民は始めに土地代を払う上、毎月 800ksh(1300 円位)払わなくてはならない。これはかなりの額であるし、しかも問題は誰にお金が流れているのか分からないということだ。土地の権利問題は深刻で、スラムの中心人物たちはこの問題を何とかしていこうと意志を固めていた。

(住居) 土の壁で、斜面に立っているため雨に流される。流されてはまたつくるの繰り返し。畳 2 畳ほどのスペースに一家が暮らす。台所と呼ばれるところは単に部屋の隅。それとテーブルやベッド、ラジオがある程度。家と家の間は狭い。

(健康) シンナー、酒をやっている若者を昼間から見かけた。病院はあるが薬がほとんどないようだ。

(教育) 一つの部屋しかない。ノートがない。教材も少ない。持ち帰られないので家庭で自主学習ができない。いくら教育をしても次の学校に行くことができないため、子供の状況は変わらず結局ストリートに立つ子がでてしまうと先生は嘆く。

(仕事) 物乞い、近隣のお金持ちの家の警備やお手伝いさん、キオスクの売り子など。

#### \* 今後の計画

私達は、Deep sea に対して、お金や物の絡む働きかけをするのは、慎重に計画していかないと危険だと思い、学生らしい働きとは何であるか、と迷いつづけていた。

そんな時、ケニアで様々な活動をしている早川千晶さんと食事をする機会に相談することができた。早川さんはクリーンアップキャンペーンを薦めてくださった。クリーンアップキャンペーンとは、私達がスラムでゴミを拾い、または埋まっているゴミを掘り、分別して処理することで、ビニールも生ゴミと同じように土に還ると思っている人々をそうではないと気づかせたり、私達の行動に興味を持った人たちに参加してもらったり、ゴミをこういう形でまとめた方が気持ちいいのだと感じてもらって、分別して土に返せるものをごみにしないようにして量を減らしたり、ゴミ箱を作るきっかけにしたり、自分たちのコミュニティに対する意識も高まるなどということが期待できるのである。これは、学生らしい働きだし、私達にとってもケニア側と協力して汗を流しゴミと戦うことは得るものがあるだろうと思った。口でえらそうなことを言っている、実際に行動しないと分からない。ケニア側にも日本側にも、エリートで、普段そんな活動はしない人がいるから、効果的だと思った。実行してみようとしたが、日程の都合上不可能だったので、次回は是非やりたい。その際、環境問題についての情報を伝えた上でした方が良さだろう。結局ビニールを集めても処分に困り、燃やすしかないのだが、ビニールを燃やすと有害な物質が発生するという事さえ知らないから、これをきっかけにビニールよりも土に還るものを多く使うようになってくれるといいと思う。

私達はこのスラムとの関わり方を検討した際、柔軟性のある子どもに主に関わっていこうと決めた。子どもは親の影響を強く受け、特に外からの情報の少ないところでは、環境問題、アルコールやドラッグ、将来の選択、生き方、エイズなどについて、親の考えを強く引きずるだろう。しかし若い学生の身分の私達が親の年代の人々を変えていくのは困難である。関係を作りやすい子どもから、様々な情報のシェアを遊びや教育を通して伝えていきたいと考えた。子どもが親に学んだこと、感じたことを話すことから、その子達が将来コミュニティの中心になっていくことから、このスラムが良い方向に動いていってくれたらと思う。私達はエイズや環境問題など、様々な問題を人形劇(名古屋の主婦の方たちから提供していただいたもの)や絵本(UNEPで資料としていただいたもの)等を使って小学校で一緒に学べたらよいと思っている。また今回も名古屋の小学校の子ども達から、習字や絵や作文を預かって渡してきたが、これからも日本の子ども達とケニアの子ども達が交流を通して沢山のことを知り、感じ、学べるように掛け橋となっていくつもりである。日本側メンバーは日本の子供からのメッセージを英訳をして送るのだ。

**Deep Sea の小学校にて。**

子ども達は皆元気で明るく、カメラを向けるとみんな笑顔。

給食の UJI を JKSC メンバーにも分けてくれた

**At the elementary school of Deep sea.**

**The children are blighting, all of them are smile in the photo.**

ノートが無くて困っていると小学校の先生に強調されたのだが、日本から持ってくることは簡単だけれども、送料もかかり、何より私達が援助し続けなければやっていけない状態は良くないので、ケニアで調達できる方法を考えた。私達は NGO の入っていないこのスラムが援助慣れをするのを恐れている。既に訪問したとき、「私達にどんな援助をしてくれるの？」と言われたのだ。私達の立場にふさわしいことをしていきたいし、私達が「援助」する形でなく彼らが中心になって動くのを支える立場を目指している。案として挙がっているのは、企業を回り使用済みのコピーの裏紙を、ノートとして使うために集めるという方法である。ケニア側と一緒にスラムの人々も会社を回り自分達で集められるのが理想だが、まずはケニア側が交渉することになった。日本メンバーはもう Deep sea へ訪れることはできないので、ケニア側の情報を定期的に流してもらい、ここでの活動を把握することに決定した。

**JICA ニヤフルル見学 (3月12日)**

**大平 智江**

ナイロビから北北西に車を飛ばすこと 4 時間、ニヤフルルのタウンは標高 2360 メートルの高地にある。途中、グレイトリフトバレー（大地溝帯）を目にした。共通の祖先から人間とチンパンジーに別れた直接の原因となった、その大地の裂け目は、見ているものに口を噤ませるような静けさがあった。私は隣に座っていたジャッキーに「あなたの国は本当に美しくて綺麗だね。」と言うと、「ありがとう。」と嬉しそうに答え、二人共がもう一度車窓からの壮大な大地溝帯を眺めていた。

ケニアでの養殖について少し述べると、もともと虹鱒は淡水域冷水で育つ高級魚であり、ケニア土着種ではなくイギリスによって持ち込まれた。はじめは水の豊か

なケニア山の麓で放たれ、現在は国営一つ、民営二つの会社が産卵場を持つ。虹鱒は身がたんぱくで味もよく、大きなホテルで需要があるため、生産すれば売ることができる。現在は民営の工場で一箇所のみ虹鱒の飼料を作っているため、価格・品質の競争会社がないので魚の単価は下がらないという問題点もある。

ニヤフルタウンで虹鱒養殖の任務をこなしていらっしゃる青年海外協力隊の杉本さんに、一年ぶりの再会を果たした。快く私達を迎えてくださる杉本さんは昨年と全く同じであったが、タウンから車で30分程のところにある養殖場は大きな変貌を遂げていた。

昨年はプロジェクトが始まって1年だったため、養殖場の基礎ともいえる池（ポンド）や水路の基盤が掘られている状態だったが、今年はポンドに水が入り水路に水は流れ、更に稚魚が誕生したということだった。2年続けて同じプロジェクトを見せていただく醍醐味はここにあるのかもしれない。一年間で大きく前進した養殖プロジェクトは、見た様子だけでなくケニア人スタッフの様子も異なっていた。

昨年、まだプロジェクトが始まって間もないころ、その日の仕事がいきなり何かの要因でなくなってしまうと、昼寝したり家に帰ってしまっていたケニア人スタッフが、今年は自らでそれぞれのできる仕事を見つけ出し、それを片付けていた。この日は、届くはずだった用水路補修の材料がこなかったため、ケニア人スタッフ約6名は、養殖ポンド周辺の草刈をしていた。

生まれた稚魚と親魚を見せていただいた。稚魚は川から引いてきた、まず始めの一番綺麗な水で育てられる。小さな小屋の中には水槽があり、そこで稚魚は小さな体で元気よく泳ぎ回る。稚魚はどこから来たのだろうか？それは、民営で虹鱒の養殖場に協力してもらって親魚（成熟していて、卵や精子を取ることのできる魚。ある程度若いのが望ましい。）を手に入れているということだった。将来的には、ポンドで育てた魚から卵を採り、稚魚を育て、それをまた育てて卵をとるという、自家採卵が目的なのだろうか。

ケニア特有の養殖場の工夫があった。それは水路を二手に分け、川の水が全て養殖場に流れないようにになっている。というのも、雨季と乾季で川の水量の差が激しいことから、雨量の多い雨期には水が大量に流れ込んでしまう恐れがあるからである。

前述したように虹鱒は冷水域で育つ。ところがここでの普段の水温は14度から20度、孵化水温が17度前後とかなり高めであった。持ち込んだ虹鱒にもかかわらず、比較的高温で孵化することに驚きを覚えた。

### ニヤフルルの虹鱒養殖場 **Rainbow trout farms in Nyafururu**

その他、働いているケニア人スタッフや杉本さんの親切な説明に、メンバーは熱心に聞き入っていた。また、青年海外協力隊で働くことの苦労や経験をお聞きすることができ、大変有意義な時間であった。

そして、ニヤフルルタウンにて杉本さんと別れを告げたのち、私達はナクルのエガトン大学へとむかって出発した。

### **JKSC Chats with Asahi Shinbun(March. 14<sup>th</sup>)**

***Lameck Bijumo***

On 14th March 2001 JKSC visited Asahi Shinbum offices in Nairobi, Kenya, a city which houses two Japanese newspapers i.e. Asahi and Kyodo newspapers. Initially, Asahi had offices in Dar-es-salaam, Tanzania which were later moved to Nairobi in 1980. Since then the Nairobi office has covered the southern Sahara region. Other Asahi Shinbum offices in Africa are in Cairo, Egypt and South Africa. Asahi being the second largest newspaper in Japan after Yomuiiri Shinbum, has two publications everyday, that is in the mornings and evenings. 8.5 millions copies of the Asahi Shinbum are sold in Japan and other parts of the world daily! The circulation in other countries apart from Japan, targets Japanese citizens residing in those countries. The English edition of Asahi is published in Japan only for expatriates living there.

During our conversation with Asahi's Africa representative, Mr. Shingo Egi, several issues emerged: from socio-political issues to economic issues. The most outstanding issue was the bilateral relationship between Japan and Africa. Unlike most European countries whose relationships with Africa go way back to the colonial times when they were most interested in exporting cheap labor and raw materials from this continent, Japan looks at Africa as her partner hence advocate for cooperation, Japan's motive for cooperation was only to "support" African countries, a kind of cooperation which is to be embraced by both countries given that Japan never colonized any country. This drives away any suspicion about Japan's motive for the cooperation. Japan has not been concerned so much about Africa because of the vast distance that exists

between these two land masses. This explains why there are few Japanese people living in the continent. Asahi Shinbun has a responsibility to some extent to bridge the gap which exists between Japan and Africa. It does this by not only reporting about the misfortunes that befall Africa but also the good and admirable aspects of this continent: interesting culture, vast amount of natural resources which stretches across the continent and many others. Asahi sees the lack of proper channels of communication as a barrier to speeding this cooperation. For example, there is no direct flight to Japan. There are traveling problems such as long waiting periods for visas, internal conflicts and language problems. These are the major impediments to hastening cooperation. Also due to financial constraints, the newspaper cannot expand to other parts in Africa.

In the political arena, Egi commented on the value of political change in Africa giving Chad as an example of democracy in action; where the old leaders actually accepted defeat and paved the way for the young to take the leadership mantle. He also commented JKSC's activities as another way of speeding cooperation and all members to a challenge study world history very carefully especially, the development stages and also to find solutions to problems which entails development and never to learn from past mistakes.

#### 朝日新聞社ナイロビ支局訪問 (3月14日)

ラメック ビジュモ

2001年3月14日にJKSCメンバーは、朝日新聞社のオフィスを訪ねた。ここ、ケニアのナイロビには、日本のマスメディアが、朝日新聞社と共同通信社の2つある。最初、朝日新聞はタンザニアのダラエスサラームにオフィスを持っていたが、1980年にナイロビに移した。それ以来、ナイロビオフィスは南のサハラ砂漠領域を担当している。他のアフリカで朝日新聞のオフィスは、エジプトのカイロと南アフリカのヨハネスブルクにある。朝日新聞は読売新聞に次いで、世界で2番目に大きい新聞社であり、毎日2回、朝と昼に新聞を発行している。毎日約850万部の朝日新聞が日本および世界中に売られているのだ！日本を除いた他の国での流通は、それらの国に住んでいる日本人をターゲットにしている。朝日の英語版は、そこに住んでいる海外駐在員のためだけに日本で発行されている。

朝日新聞ナイロビ支局長の江木慎吾さんとの議論の中で、政治問題から経済問題までの、いくつかの問題テーマが飛び出した。最も目立った問題テーマは、日本とアフリカの両国の関係だった。安い労働力と天然資源に興味を示して、植民地の関係をアフリカと持ったヨーロッパ諸国とは違い、日本はアフリカをパートナーと見ている、すなわち、アフリカを「援助」ではなく、日本がアフリカで植民地化を行わなかったことによって両国間にできる「協力」のために日本はアフリカを支援している。このことは、私の日本のケニアに対する援助の動機についての疑問を消しさるものだった。(日本とケニアの関係の課題について)両国の間に存在する広大な距離のために、日本は、アフリカについてあまり関心を示していない。これはまた、

アフリカに住んでいる日本人が殆どいないこともいえる。朝日新聞は、(ジャーナリストとして)日本とアフリカの間で存在するギャップを埋めるための責任がある。それは、アフリカに降りかかる災難ばかりでなく、アフリカについてのよい、素晴らしい点、つまり、興味深い文化、豊かな天然資源などについて報道することである。朝日は、通信の経路の不足を、この協力を促進することへの障害と考えている。例えば、日本からアフリカへの直行便がないこと。(また、江木さんが報道をする上で苦労していることは、)ビザを取得するために長い期間待たされなければならないこと、内戦などの危険、また言語問題(アフリカ諸国の多くは、多民族国家で多言語のため)などの問題がある。これらは促進協りに主要な障害である。また、財源の関係で、将来的に朝日新聞はアフリカで支部を増やすことはできない。

政治的な分野(主にアフリカ諸国の政治腐敗の問題に関して)では、彼は、チャドを民主主義の手本の例として、アフリカでの政治変革の重要性を述べた。すなわち、古い指導者は敗北を認め、若い指導者が主導権をとるために道を譲るべきであるということである。彼はまた、JKSCの活動は(ケニアと日本の)協力を促進する1つの方法であり、彼は、すべてのJKSCメンバー(特にケニアの将来を担うケニアメンバー)に、ある挑戦を持ちかけている。それは、世界史を勉強する、特に開発部分において、(他国の)真似するのではなく、開発を伴う問題の解決策を追求し、そして以前起きた過ちを繰り返さないようにする必要があると述べている。

(訳 中村香織)

## ジョモ・ケニヤッタ農工大学訪問 (3月15日)

鳥飼恵美子

ジョモ・ケニヤッタ農工大学(JKUAT)は、農学部、工学部、理学部の3学部のみを持ち、設立前から日本(JICA)の協力を受けている大学である。ナイロビから北東に35Km、ティカロード沿いにあり、実験農場も含む広大な敷地を擁する。私たちは幸運なことに、このちょっと珍しい大学を訪れる機会を得た。あいにく、本会議開催中の3月には、JICAからJKUATへ派遣された専門家の方が2名しかおらず協力隊員も派遣されていなかったため、私達に対しての対応は難しいと考えていたが、JICAの方々の御厚意により、今回の訪問が実現したのだ。

JKUATのキャンパスに到着すると、JICAナイロビオフィスの高橋氏が私達を迎えてくれ、その後全員で「アフリカ人造り拠点計画(African Institute for Capacity Development・AICAD)」のプロジェクトコーディネーターである飯田氏から、同プロジェクトについての説明を伺った。

「アフリカ人造り拠点」・・・この言葉、耳にする事はあっても、その意味はなかなか理解しにくい事と思う。私達が聞いてきた内容をここで簡単に説明させてもらいたい。1980年からJKUATへは日本の無償資金協力で建物、実験室、設備等が寄

贈され、技術協力も行われてきた。そして、1998年10月に「アフリカ人造り拠点計画」の提案が提唱され、今まで JICA が大きな成果をあげてきた JKUAT に拠点を置くのが相応しいという事になった。この計画は、主に貧困対策と社会開発に、アフリカの人々自身に取り組めるように、人材育成や、共同研究開発、情報ネットワークの整備を行うことで、これを JKUAT を中心として進めていこうというのが、「アフリカ人造り拠点計画 (AICAD)」である。

飯田氏からの説明の後、私達は大学構内を車で案内していただいた。車で移動しても広大な畑などを眺める度に、これが大学であるのか、と疑問に思ってしまうほど広く大きかった。しかし、これほど大きな大学だというのに、在籍学生数は 2000 人程で、他の 4 つの国立大学の中で最も人数が少ない。JKUAT では、学生一人あたりにかかる金額が大きいののであまり多くの学生を受け入れられないのだそうだ。それは見学させていただいた研究棟からも良くわかった。充実した研究設備、日本から取り寄せたまだ新しい耕運機、立派な建物、よく手入れされている庭、そのすべてにケニアの他の大学とは違う、優遇された面を感じた。

理系の大学だという事で、女性が少ないそうだ。就職率は他の大学に比べ大変高く、卒業生は技術者として、農業省、運輸通信省、水道開発省、情報省、ケニア電々公社、国家灌漑委員会、または民間の企業等に就職する。

JKUAT は優れた技術を持つ人材を輩出し、また共同研究などにも力を入れている。国際協力という観点から、人材育成というのは、とても重要な事であると私も考える。ただ物質的な援助、一方的な協力をするのみでは、その国の発展にはつながらない。AICAD の方もアフリカの人々には国際協力機関に頼らず、自分達主体での行動をして欲しいということを仰っていた。全くそのとおりだと思う。ケニアでは貧困問題が深刻であるが、それを国民の手で解決できるような方向に国際協力が為されていくことを願う。

ジョモ・ケニヤッタ農工大学の実験農場にて、JICAの高橋氏、飯田氏と  
At the farm of Jomo Kenyatta University of Agriculture and Technology

国連環境計画 (UNEP)訪問 (3月16日)

梅川 瑞穂

私たちは今日、国連環境計画(UNEP)ナイロビ事務所を訪問した。UNEPは、1972年の国連人間環境会議(ストックホルム会議)において採択された、「人間環境宣言」・「国連国際行動計画」を実施に移すための機関として設立された。国連諸機関の環境に関する諸活動を総合的に調整管理し、未着手の環境問題に関して国際協力を推進していくことを目的としている。そして、その本部事務所が、ここケニアにある。

UNEPはとてもきれいで気持ちのいい所だった。中庭や、建物の設計が広々としていて、さすがに環境を考える機関の本部だなあ、と感じた。

はじめに、職員のカンテ氏を中心に、UNEPについての概略、設立の経緯・目的・所在地・理事国などのお話を伺い、その後、環境問題を解決するために何をすればいいか、などの意見を伺った。その際に、ただ一方的に話されるのではなく、私たちにも質問され、私たちが理解した上で話を進めてくださるという心遣いが感じられ、嬉しかった。次に、事務次長カカヘル氏にお会いして、現在の地球が抱えている環境問題について詳しく伺った。例えば、化学物質の問題。日本や欧米などの先進国ですでに規制されているDDTなどの化学物質が、発展途上国に流れて、アフリカなどでいまだに使われている。マラリアの殺虫剤として使われているのだ。DDTはマラリアと共に、他の生き物も殺してしまうし、土壌汚染・水質汚染の問題が起こってしまうが、これに替わる安いコストの物がないのがアフリカの現状である。こういった問題を、その国・その地域だけの問題と考えずに、地球に生きる全ての人々の問題と考えていかなければならない。野生生物や、自然資源を地球全体の宝と考えて保護していく必要があるのだ。そして、そのためのUNEPである、と語っていらした。カカヘル氏はとても感じのよい、気さくな方だ。日本人メンバーにも分かりやすいように、ゆっくりと、やさしい英語で喋って下さった。そして、その後、コックス女史とオーベン氏からUNEPの細かい話を伺った。コックス女史は、私たちに質問形式でUNEPに関することや今日の様々な地球環境問題のことを聞かれ、次々とテンポ良く説明して下さった。先進国と発展途上国間の問題、化学物質に関する責任問題、科学技術の発展と自然のバランスなど。話の中で、環境問題を考える時、一点からものを見てはいけない、あらゆる視点から物事を捉えなければならぬのだ、とい

うことをコックス女史はおっしゃりたいのではないかな、と感じた。オーベン氏は主に、環境教育について説明して下さった。子供のうちから、現在地球が抱えている環境問題について学び、関心を持ってもらえるようにすることが大事だと話されていた。

私は、UNEPを訪問したことで、学びたいと思う範囲が広がった。現在は、大学で海洋環境を中心に学んでいるが、水圏に限らず、もっと広い範囲で地球環境問題を学んでみたいと思う。知らないことがまだまだ沢山ある。知りたいと思うことが増えたことが嬉しい。

#### 国連環境計画 事務次長のカカヘル氏による講義

**A lecture given by Mr. Kakakhel, the Deputy-executive director of UNEP.**

ナイロビ郊外フィールドワーク (3月18日)

大平智江

この日の予定は、キティンゲラグラス再生ボトル工房→ンゴングヒル→神戸先生に会うというもので、そのために朝の8時に手配した車がUSIU-Aの門に来ることになっていた。参加者は、キロンゾと二人っきりで一日を過ごしたいという川田を抜いた8人の日本側メンバーと、ラメックである。

朝食を車の中で食べようと、パンやバター、果物などを用意していたのだが、車が時間に来ない。今日訪れる場所は3箇所ではあるが、時間はぎりぎりである。焦っている私達をよそに10分すぎ、20分すぎ、容赦なく時間は過ぎていく。陽射しも強くなり、少々早起きした私達はがりがりと果物をかじりつつ、待った。結局10時に白いワゴンは到着。

遅れてきたドライバーは「車がパンクして・・・」と言っていたが、「ケニアで車のパンクは確かに多い。けれど遅れた真の理由はドライバーしかわからないからね。」とキロンゾは後日、まくしたてる私に笑いながら言っていた。

ともかく、気を取り直して出発。最初の訪問場所、キティンゲラガラス工房はナイロビから車で45分くらい走った、ナイロビ国立公園内にある。ここでは、捨てられるジュースやビールのガラスボトルをナイロビ中から集め、それを溶かして芸術作品やステンドグラス、日用品やアクセサリに作り直す。ここはガラスを溶かすための大きな溶鉱炉と、色とりどりのガラスをちりばめた建物が点在し、らくだや陸亀、鳥など様々な動物が放し飼いになっている。

私達は道に迷いつつもキティンゲラガラス工房に到着。日曜日であったせいか、日ごろガラス工芸品作りに精を出している人は見えない。見回りをしていて人が私達を案内してくれた。

ナイロビ市内で使われているガラス、それがこうも美しく姿を変えらるとは驚きである。モニュメントやステンドグラスのような美術作品、ガラスの涼しげな透き通った音を鳴らす風鈴、ネックレスやピアスの優しい色のアクセサリ、そしてガラス工房の建物と建物を渡す道に埋め込まれているガラス。ものの可能性、それを自由な発想で見出し、作り出すセンスに、尊敬の念を抱かずにはいられない。

ガラスを溶かす溶鉱炉は、20メートルほどのレンガ作りの塔になっている。昨年ここに訪れた際に私は、「来年もここに絶対に来る」と心に決めていたほどのお気に入りの場所である。再び訪れられた興奮か、高さによる怖さか、震える足で塔の上に上る。天辺に着くと、眺望は一気に開け、蒼穹に真っ白な雲がぼかぼかと浮かぶのが見える。ナイロビ国立公園から吹いてくる緑の風が頬を柔らかく撫でていく。しかし昨年感じたものとは異なるものだった。風や景色が変わったのだろうか、それとも私自身が変わったのだろうか・・・

ンゴングヒルは、ナイロビ市郊外にある5つの丘である。キティンゲラガラス工房から車で1時間ほどであった。途中、安全のため警察の人を一人頼んで同行してもらい、急な斜面をワゴンが進んでいく。しかし人数が多かったためか、ワゴンは途中で進まなくなってしまい、結局歩くこととなった。まさか山なみに急な道を歩くことになるとは思わず、ゼーゼー言いながら歩く。どこからか小さな犬が来て、私達の道案内をしているかのように、柔らかく吠えたり、首を傾げて様子を見ながら、一緒に登っていく。いつしか子犬がいなくなってしまうと思ったら、丘の頂上に着いていた。丘は芝生と小さな花が生え、所々で低木が枝を揺らしている。

芝生が大好きなメンバーはそれぞれが駆け出し、丘の斜面から眼下に広がるマサイ・ランドを眺める。マサイ・ランドとは、マサイ族が遊牧生活する広大な土地のことで、地平線の彼方まで広がっている。丘の一方からはマサイ・ランドが、もう一方からはナイロビ国立公園を隔てて、地平線上にナイロビタウンの高層ビルが蜃気楼のように小さく見える。太陽の光を受けて黄金色に反射する、マサイ・ランド

にある湖と、茶褐色の大地。ぽつぽつとこんもりとした緑があり、遠くになだらかな稜線を描く山並みがある。

ンゴンゴヒルに寝っころがりながら、草の馨しい香をお腹一杯吸い込む。あお向けに転がって見た空は、手に届きそうなほど近い。蒼天に、翼で風を抱くように鳥が飛んでいた。それは胸が詰まるほど、奔放な姿であった。

神戸先生は、ケニアで獣医として仕事をされる傍ら、様々な分野でも活躍している。今回は、神戸先生のお宅にお邪魔した。

家にはアフリカの楽器が飾ってある。そしてランプ傘が素敵だ。それは神戸先生が今まで訪れた場所で、思い出の石や貝殻などを拾ってきて、それをひとつひとつ傘に飾っているのだ。小物の数は20個位だろうか、多くの思い出が小さな飾りに詰まっているに違いない。

神戸先生のお宅では、「サバンナティー」をご馳走になった。これはサバンナに落ちている象の糞を持ち帰り、カラカラになるまで乾燥させる。乾燥したものを細かくちぎり、熱湯に注いで煮出して飲むのだ。象は薬草を選んで食べるそうで、それが糞となって出てくるのを人が飲むと、新陳代謝が活発になって健康を保つのに役立つということである。味は普通のお茶で、飲むと体がぼかぼかとする。サバンナティーをメンバーはせっせとお替りしながら、マサイ族伝統の自然薬を神戸先生から説明してもらった。マサイ族は自然界に存在するもの、例えば木についている菌類や植物の枝、根などの薬としての効果を伝統的にしている。「惚れ薬」「抗生物質」などを実際に見せてもらい、非常に面白かった。

そして晩御飯はエチオピア料理を神戸先生ととり、そこでソンドウミリュウダム建設等を取りまく環境問題や、ケニアでも深刻な陰を落としているエイズ問題、先生の経験をお聞きし、辛い料理とお話をじっくりと味わった。

今日、私は、これまで重かった何かを、そっと解放できたような気がした。メンバーは何を感じたのだろうか。

神戸先生のお宅にて。マサイの薬についてお話しを伺う At Dr. Kambe's home  
キベラを歩く (3月19日) 中村香織

キベラは、ナイロビ最大のスラムとして知られている。キベラの歴史は、1960年代、イギリス政府が植民地化のために兵士として連れてきたヌビア人というスーダン兵を植民地化後本国に帰さず、このスーダン兵が現在のキベラに住み着いた時に遡る。このスーダン兵の特徴が夫婦、子供などを連れて、家族ぐるみで戦うものであったため、初めからキベラに集落が出来ていた。これがキベラの始まりと、考えられている。つまり、キベラは、自然発生ではなく、強制的にできたスラムであった。イギリス政府によるモンバサからウガンダまでの鉄道をひく為に、連れてこられた労働者がここに住んだり、その後、キベラはいわゆる低所得者によって、大規模なスラムへと発展してきた。独立後は、農村からの出稼ぎ労働者によって、キベラの規模は急激に拡大し続けている。最近では、ソマリアなどの近隣諸国から流れる難民も多いそうだ。特に最近では経済悪化から、その数の伸びは激しくなっているようだ。現在のキベラの人口は、240 エーカーの面積に 1200 万人(または、50 万人)だと推定されているが確かではない。キベラの生活者は、住み込みのメイドや低賃金労働者、露天商など多くが、きつく、長時間働きながら、低賃金所得者の仕事につく人が多い。「朝から晩までキベラに住む住民は汗水たらしながら働き、疲れた身体で歩いて帰ってくる、そんな毎日を繰り返して、お金を貯めて、いつか、ここからでる事を夢見ているんだ。」と、キベラで出会った人やケニアの友人が私に決まって言った。いわゆる単純労働者の人達がここに住んでいると思っていたが、JKSC アドバイザーであるナイロビ大学のオロー先生のような職業の人でもキベラに住んでいることは、私のキベラのイメージを膨らませるものだった。高級住宅地のすぐ隣にスラム地帯が広がっている、ケニアのスラムの特徴と同じようにキベラの隣に広がるモイ大統領の住宅など、高級住宅とのコントラストは、キベラの状況をさらに引き立てているように見えた。私は、計 2 回キベラを訪れているが、日差しが強くて、長時間キベラの中を歩くのはきつく、どちらも私の滞在時間は短いものに限られたが、キベラを他のスラムとは違った印象を持った。キベラは、その規模が大きすぎるため、キベラの中で賄えるよう、肉屋(ちゃんと鶏肉まで)、キオスク、服屋、チップスや魚の煮物、野菜、果物などの露店、診療所など生活に必要な、また、映画館(キベラスタイル)、バー、本、CD などの商店もある。キベラの外やナイロビ市内の手が届かない値段と比べると、ここでは、ほとんど(生活水を抜かして)がキベラの人に合わせた、「キベラ・プライス」で購入することができる。マンダジ(甘いドー

ナツのような食べ物)や焼きトウモロコシなど3日以上ずっとお店に置かれているらしいが、かなり安い。ここでは、キベラの中で暮らしやすい生活をできるように、至る所で工夫が見られた。均質化した西欧色の強いナイロビ市内と比べ、ここでは庶民っぽい、ケニア人らしい生活があるように感じた。印象に残るのは、元気なキベラの子供達。キベラの子供達は、外国人なれしているのか、色の違う私達が通ると、「ハワユー、ムズンゲー。ハワユー、ムズンゲー。(こんにちは、白い人)」と遠くからキラキラした笑顔で、声を合わせて呼んできた。ナイロビ市内で「ジャパニーズ」や「チャイニーズ」と早口で言われる時とは違って、そう呼ばれて嬉しい。私達の周りにも、私達に興味深々の子供達がついて来て、帰る道がわからなくなる子もいた。ここの子ども達は本当に元気で明るい。この子供達の中に、町で会ったストリートチルドレンもいるとは信じられなかった。

### キベラを通るウガンダとモンバサを結ぶ鉄道 At Kibera. The railway goes to Uganda from Monbasa

キベラには教会、モスク、伝統的な部族ごとの宗教、新興宗教などたくさんの宗教が集まっている。二回目に行った時が日曜日だったので、白い衣装を着た行列や赤や緑などカラフルな衣装を着た人達など、このような行列を何度か目にし、スピーカーを通した聖歌や説教がキベラ中に響いていた。キベラはナイロビの中で一番宗教が盛んな地域だということを証明していた。

全体的に、思った以上にキベラはスラムにしては綺麗だったが、表通りから少し目をやると、雨の後でぐちゃぐちゃになり、汚物と雨水が混ざり歩けない道や巨大なゴミの山が目についた。道を通る中で、何度か NGO が作ったトイレ、診療所を目にしたが、広大なキベラで見れば、わずかなもので、汚物が垂れ流しの光景も目にした。キベラの住民の人にとって重要なのは、生活用水の確保や医療の問題だ

った。キベラの中でも、貯水タンクを設置してあるところもあったが、多くの地域では、キベラの外へ出て、水を汲みに行かなければいけない。キベラの外では、タンクやバケツをもって、水を汲みに行く人達と何度もすれちがった。「中でも買えるが、高くて、外の方がましだが、それでも高い。」と友人は教えてくれた。キベラで生活している人達は辛く厳しい生活をしていて、ここで生活して行くことは大変なことだと感じた。貧しさにまわりつく、エイズ、教育、衛生状態、治安などキベラの問題は、深刻に考えていかなければいけない問題がある。まずキベラの問題を改善していく一歩として、キベラの人達が自分達の地域を改善していこうという気持ちが必要なのではないかと感じた。私の印象として、ここに住んでいる人達は、ここをお金が貯まったら、去る、通過点のような場所として捉え、キベラでの衛生状態やその他の問題を短期的な視野で見ているながらも、長期的な視点では考えていないのではないかと感じたからである。キベラの問題を考える時に、キベラを「貧困」で危険で汚い場所と片付けてしまうのではなく、知恵を出して、なんとか楽しく生きていこうとするキベラの人々の力を見逃してはいはいけない。実際にキベラを歩くことが出来て、私のキベラの印象は大きく変わった。

## エカラカラ (Ekalakala) 滞在 (3月20~22日)

中村香織

首都ナイロビ、モンバサ、ナクルなどのケニア主要都市などの都市と比べると、農村の風景は大きく異なる。私達が、今回滞在していたナイロビを少し離れ、郊外住宅地を過ぎると、一面に広がる農地と伝統的な家(屋根が草で覆われ、壁が牛の糞を混ぜたものが一般的で、中はひんやりと涼しい)など農村風景が目の前に広がり、その農地と農地の拠点として、小さな町の集落、いわゆる都市風景が繰り返し繰り返し、転回される。エカラカラへの道もこうした風景の繰り返しだった。農村の景色は、私に伝統的な生活スタイルへの興味をわかせたが、同時に農村部にいる若者にとって、刺激の少ない農村よりも、ディスコなどのエンターテイメント、多様な仕事の機会がある、都市の生活に憧れを抱くだろうと思った。しかし、ケニア人にとってナイロビなどの都市に住むようになったのは、植民地化後の話で、つい最近のこと。たとえ、住む場所がナイロビであっても、ふるさととして、自分が帰る場所は、この農村のようだ。私が日本の田園風景を見て懐かしいと感じるような、ケニア人にとって、この農村風景は懐かしい存在なのだろう。

エカラカラは、約 50 部族いるケニア部族の 1 つ、カンバ系の村である。ナイロビから北にマタツ(乗合バス)で 3 時間ほどの場所にあり、病院や教会、多数の商店、キオスク(小さい露店)があり、毎週水曜日には、マーケットが開かれている。人口 100 人ほどで、水道や電気が通っていない家が多く、殆どの家がランプで暮らしていた。エカラカラでは、周辺の伝統的な土と草の家とは反対に、レンガ造りの建物が大半をしめてい

た。

2泊3日の滞在で、私は、1日目は、エカラカラの中心部にある、JKSCメンバー、キロンゾの家に泊まり、2日目は、エカラカラから歩いて20分ほどのキロンゾの友人であるカロールの家に泊まらせてもらった。

カロールの両親は、父が日本の農林水産省のような政府機関に勤め、母が教師をしていたが、農業をしたいという母の希望で、6年ほど前にナイロビからエカラカラに移って来たそうだ。ケニヤッタ大学に在学中の兄とカレッジにいる姉は寮生活で家におらず、たまたまナイロビに出かけている父の留守で、母とカロールの2人だけが家にいた。彼女の家は、近代的な設計で、この周辺では唯一のレンガ造りの家であり、家の中に水洗トイレがあり、またソーラー装置による電気が使う事ができ、テレビがあった。といっても、水が貴重なので水洗トイレは家の鍵をかけた、夜だけ使い、電気も食事の時だけ使うなど、とても大切に使っていた。カロールは、バックストリートボーイズが好きな私と変わらない趣味の持つ18歳の女の子だが、しっかりしていて大変な働き者だった。朝は日の昇る前に起きて、朝食を作り、昼間は農作業の手伝い、夕飯づくりと休む暇もなく働いていた。私は、そんなカロールにくっついて、主に農作業と家事を手伝った。

- ◆ 水が貴重・・・私が行った時期は、乾期だったこともあって、この地域では、水が大変貴重になっていた。キロンゾの家よりも農家のカロールの家で水は本当に貴重なものなのだと実感した。カロールの家には、貯水タンクが設置されていたが、農作業に使う水を供給するために水を汲みに牛車でいった人が半日かかって探したにもかかわらず、結局手に入れることが出来なかった。お皿の洗い方は、貴重な水を少量で使うように、3つの樽を用意し、1つの樽で汚れを落とし、2つめの樽ですすぎ、最後の樽で水をきり、外で干して乾かすという方法だった。牛も塩を体に貯めるために、背中に大きなこぶがついていた。
- ◆ 家事・・・台所は、住まいとは別のところにあり、薪で火をおこす。木炭は使っていなかった。豆を使った料理が多く、食べられる豆と食べられない豆を手で分けた後、カラバシャ（瓢箪のようなもの）を使って、豆をさらに綺麗に掃除する。この方法は、不思議と美味しい豆だけがカラバシャ(カラバシュ)の中に落ちていき、汚いものは外に飛ばされる。カラバシャで豆を掃除する光景は、とても面白い。カラバシャは、家の飾りになったり、水やミルクを入れたりして生活のいろいろなところで見られた。
- ◆ ランプの暮らし・・・最初、電気がない、真っ暗で前が見えない、怖い！と感じていたが、頭の上には一面の星空が光りととても明るく、キロンゾの家では、時々近所の家からのヒソヒソ声が聞こえてきて、にぎやかだった。ただ、トイレに行くのは、嫌だった。外のトイレに入ってライトを照らすと、穴の下でゴキブリのような黒くて大きい物体がいくつも動いている、ゾッとする光景を目にしなければならなかったからである。
- ◆ 挨拶・・・カンバでは挨拶は、目上の人から声をかける。「ワーチャ」と声をかけられ

たら、内科で口を開ける時と同じような、「アー」と答える。その様子がとても愉快で、私達が挨拶するたびに、嬉しそうに笑っていた。この挨拶は、お互いをたちまち仲良しにさせてしまう不思議な魅力がある。

- ◆ お年寄り・・・エカラカラのおばあちゃん達は、みんな元気で村の人達から尊敬され、長生きしていた。お年寄り世代は、片言のスワヒリ語と全く英語の話せない人が多かった。エカラカラで有名な物知りのおじいさんに会った。白いひげをはやし、仙人のような風貌で、私が日本から来たと聞くと、「広島」「原爆」の話を熱っぽく語ってくれた。
- ◆ ナプキン騒動・・・地球の歩き方には「現地での生理用品は調達しにくい、特に地方に行く場合は買いだめが必要です」と書いてあり、ケニアでは生理用品をあまり使わないらしいという情報を持っていたので、日本から大量の生理用品を持っていったのだが、エカラカラでみんな一機に生理になってしまい、持ってきた生理用品では足りなくなってしまう事態が起こった。ここは、ナイロビではないので、みんな生理用品を使っていないのではないか、「生理用品」のことは、友達に聞いたことがなかったもので、本当のところのケニア生理用品事情はよくわからなく、どうカラカラでの滞在を切り抜けるか、不安でいっぱいだった。しかし、カロールに相談すると、お店で売っていて、みんな買うのは恥ずかしいのでお母さんが買ってきてくれた。この騒動から、エカラカラでも生理用品を買うことができるのだと知ったのだ。しかし、ケニアのナプキンはというと、すごく厚くて「なんじゃこりゃ」というものだったので、やはりできれば、日本で用意して行くことをお勧めする。

エカラカラの JKSC 委員長キロンゾの実家にてエカラカラの人たちと  
At JKSC chairperson, Kilonzo's home in Ekalakala

キロンゾの家は、エカラカラの中心部にあり、現代的なレンガ造りで、家は全体的に囲むように作られていたが、中庭から外に通じる構造になっていて、隣の家や他の家の境界線がなくどこまでも自分の庭が広がる開放的な空間だった。私達がパーティーなど中庭でしていると、近所の人達が抜けたり入ったり、エカラカラの子供達がいつのまにか参加していたり、村ならではのオープンな人のつきあいを感じた。キロンゾの家族はみんな親切な人ばかりで、私達のために部屋を提供してくださり、特別な料理を作ってくれ、心のこもったもてなしをして下さった。キロンゾ達の協力のおかげで、エカラカラでの滞在は、ナイロビの生活とは異なった生活を体験でき、たくさんの心優しい人達と知り合うことができ、期待以上の体験をすることができた。外来者の私達に貴重な水と食糧を心置きなく分け与えてくれ、いろいろなことを体験させてくれた。たった3日間という短い期間だったけれども、エカラカラの人達と同じ生活をする事でたくさんのことを学ぶことができた。

## エカラカラでの屠殺（3月21日）

大平智江

ケニアでの歓迎の印は、家畜を絞めて新鮮な肉をご馳走することである。今年はJKSCメンバー、キロンゾ一家が私達の為に山羊を用意してくれていた。

いよいよ昼前、太陽が天中近くに昇ったときにそれは始まった。山羊を医者が検査し、食べて大丈夫だと裁可が下された。その山羊は雄で、大型犬程の大きさであり、クリーム色の毛並みに白と黒の角をもっていた。山羊はキロンゾ宅から数十メートルのすぐ側にある屠殺場に連れて行かれた。屠殺場は固い石造り、床と屋根だけの建物で、天井からはロープがぶら下がっている。

緊張な面持ちで屠殺場にたたずむ私達とは対照的に、キロンゾはパンと牛乳を口にしている。彼らにとっては、ごく普通な生活の一部なのだろう。

予感があるのだろうか、暴れる山羊の足を4本まとめて縛り、横に寝かせる。頭を押さえ、喉をナイフで切ると、鮮血が溢れ出し、数分のうちにこときれた。流れた鮮血は鍋に入れて何処かに持っていった。そして、その時に頭を切り離れた。この頭は、家族の最年長の男性に持っていかれ食べられる。

その後は、4本の足を開いて紐で縛り、宙につるす。まずは皮を剥がし、そしておなかを割いて内臓を取り出すと、解体は完了だ。剥がした皮膚も、取り出した内臓も使われるらしく、丁寧に運ばれていった。全ての行程は30分程で済み、また他の家庭の羊が運ばれ屠殺が行われていた。屠殺された動物は、全く捨てられるところは無かった。

スーパーマーケットで肉を買う時、その肉はどのような過程で自分の手元にあるか考えることはあるだろうか？畜産場から肉の形になるまで、想像できるだろうか？パック詰め肉の肉を買い求めるだけだった私には、この屠殺が衝撃的であった。

喉を切られ、次第に細くなっていく山羊の声。あたりに漂う血の香り。首の骨が

折られ、首が切り離される瞬間。そして忘れられないのが、山羊の後にやってきた羊だった。羊は暴れずされるがままになっていた。横になり、屠殺されるまでの数分間、羊はただ空の一点を見つめ、私からは羊の目にうつった青空と白い雲が見えた。魚を捌く時には感じない、罪悪感と自分に迫ってくるリアリティーの世界。自分の食べているものがどのような行程で手元に来ているのか分からない、自分の国がまるで仮想現実のように感じられ、説明し難い恐怖を感じた。

同時に、私はしばらく前に友人と交わした議論を思い出した。同じ生物なのに、魚は平気で捌くのに、畜産動物はかわいそうだと言う。動物はかわいそうで、植物は平気でむしって食べる。それぞれ、何が違いなのか？魚はかわいそうで、畜産動物は平気で屠殺する文化もあることから、文化的・歴史的背景によるものなのだろうか？疑問は疑問を呼ぶ。

考え込んでしまった私を、何人もの人が気にかけてくれた。ケニア人も日本人も同じメッセージをくれる。生きるために食べる、それが自然の摂理である、と。

屠殺の数時間後、山羊の肉と大ご馳走が振舞われた。食べる前にケニア人と共に祈った。山羊やその他の、私達が殺めては食している生物に許しを請うのではなく、心からの感謝を込めて。

絞めたばかりの山羊を解体する老人 **A old man takes the goat apart**

### ・はじめに

閉会式を翌日に控えた3月23日、国際協力銀行（JBIC）ナイロビ事務所を訪問した。

JBICは、1999年に旧海外経済協力基金（OECF）と旧日本輸出入銀行が合併して成立した政府系金融機関として、政府開発援助（ODA）の一翼である有償資金援助として知られる円借款業務（海外経済協力業務）と、国際金融業務を実施する機関であり、貸出し資金量から世界銀行等とも肩を並べる世界有数の国際開発金融機関である。

JBICは、アフリカ諸国に対して旧OECF時代から累計で1兆3千億円に上る円借款を供与しており、中でもケニアに対しては約1700億円を供与するトップ・ドナーであり、同国経済にインフラ整備を通じて大きな影響を及ぼしている。

こうした事情から、開発協力の在り方を包括的に考察するべく、サハラ以南の唯一の事務所であるナイロビ・オフィスを訪問することとし、対ケニア・サハラ以南政策を伺うことにした。

当日は多忙な業務にも関わらず、主席駐在員（所長に相当）の澤井克紀氏をはじめとして、Pui Carr 女史と齋藤光範氏に対応して頂くことになった。

### ・オフィスにて

当日の進行については、最初にJBIC、円借款、そしてケニア向け借款の概要を説明していただいた上で、円借款を通じたアフリカ開発に関する諸問題として4点に渡る問題：①日本がアフリカ開発を支援する理由、②アフリカ諸国における債務管理、③国際通貨基金（IMF）・世界銀行の業務と貧困削減戦略ペーパー（PRSP）、④非政府組織（NGO）との関係、についてレクチャー及び質問を通じた意見交換を行った。

特に、日本政府がイニシアチブをとり推進された、1993年に開催されたアフリカ開発会議（TICAD I）・98年のTICAD II、又、ジュビリー2000等の市民運動による99年のケルン・サミットにおける重債務貧困国（HIPC）への債務削減に代表される様々な政策を通じつつ、アフリカ諸国の現状や、国際機関・NGOとの協力関係を踏まえた上での日本の対アフリカ ODA 政策について貴重なお話を伺うことが出来た。

メンバーからの質問で、開催終了後に衆議院外務委員会でも取り上げられることとなった“ソンドゥ・ミリウ水力発電プロジェクト”についての質問がなされ、この問題をケース・スタディーとして、経済インフラの整備と環境保全の在り方・フィジビリティ＝スタディー・現地の住民参加と政府の関係・NGOの役割について改めて考えさせられる契機となった。

しかし、改めて考えさせられたのはこの地域で ODA を供与すべき国益と ODA の内容についてである。今日において、円借款・ODA 政策に対し様々な批判がなされているが、アフリカ諸国に対し長年に渡り経済インフラの整備を中心に供与された円借款の役割は否定することが出来ないほど重要なものといえる。しかしながら、大規模な額を拠出しているに関わらず、そこでの実現対象たる「国益」や戦略が曖昧であるように感じられてならない。

国益を「世界の他地域との関係に関して国民が共有できる優先事項の集合」(ジョセフ・ナイ・Jr) であると解するならば、そうした意味での国益を検討・確定し、それを実現するための円借款の役割を再定義する必要があるのではないだろうか。昨今の“人間の安全保障”を確保することを「国益」と定義する動きもあるが、それに相応しい内容を備えた円借款を実施すべきではないだろうか。ベーシック・ヒューマン・ニーズ (BHN) 等に比重を移していくべきとする議論を受け入れつつも、伝統的な日本の強みである経済インフラ整備を中心として改めて再確認する必要があるものと思われる。そして、それを実施するのに効果的で、現地住民に配慮した実施体制やプロセスを再構築すべきものである。

無論、JBIC のスタッフの方々も時代と状況に応じて“変革と挑戦”を図ろうとされている。それ以上に一市民として我々もまたアフリカ諸国、そしてそこに供与される ODA の在り方に対して、関心を払う必要があるものだとすることを強く感じさせられることになった訪問であった。

## 共同通信社ナイロビ支局長・大野氏との会談 (3月23日)

鳥飼恵美子

2月23日午後2時半より、かねてからの約束どおり、私達は JKSC 学生アドバイザーである、ナイロビ大学のオロー先生のオフィスで、共同通信社ナイロビ支局長の大野圭一郎氏との会談を果たした。通信社は新聞社とは異なり、様々な新聞社に記事を提供している。共同通信社はアフリカ大陸に支局を3つ持つ。一つはエジプトのカイロ支局で北アフリカを担当する。南部アフリカを担当するのは南アフリカのヨハネスブルク支局。そして大野氏の勤める共同通信社ナイロビ支局では、東アフリカと西アフリカの33カ国を担当している。このように広大な地域の情報を常に細部に渡るまで把握しなければならず、西アフリカへ取材に行く事も多いという、実に多忙な職務に就いておられる大野氏は、私達の「アフリカと日本の関係からの報道のあり方を伺いたい」という願いに快く応じてくださった。これまで JICA や JBIC、UNEP、プランインターナショナルなど日本の政府機関、国際機関、そして NGO など、様々な立場で働いている方々の話を伺ってきたが、これまでに得た情報を総合的に捕らえていくためにも、ぜひともこのようなジャーナリズムに携わる、偏りの無い視点で物事を考える立場にある方の話を聞く機会を設けたかった。しかし、今回はそのような報道関係の話題だけではなく、大野氏の体験談をしてく

ださったり、私達学生に対して励ましの言葉を頂いたり、私達は大変新鮮な時間を過ごすことが出来た。特に、この日の午前中には JBIC を見学していたこともあって、さらに強く立場による考え方の違いというものを感じたのだった。

大野氏が私達に強くおっしゃったこと、それは、多くの書物を読み、より豊かな経験を積み、知識を身に付けること、そしてもっと社会に関心を持つことであった。現代の若者は社会に関心を持たず、また積極的に情報を得ようとしめない。日本の二十歳以上の学生のどれほどが選挙に行くのだろうか。情報が周囲に満ち溢れている環境にありながら、それらを知ろうとせず、さらに大学に通えるというとても幸運な環境にありながら、勉学を疎かにし、卒業資格さえ取れば良いと考えている者も少なくは無い。そうした現状をうれえておられた。

ナイロビ支局で働かれている見解から、学ぶ機会に恵まれている学生達と、恵まれない若者達とのあまりにも大きな差を感じられるのだろう。学びたい、という気持ちを持ち、優秀な成績を修めていても、金銭的理由から進学できない若者が世界にどれほどいることか。すべての学生は、彼らの存在を知り、その手にしている「学べる環境」の価値を認識し、無駄にしてはならない。

現在の自分の生活が満ち足りているからといっても、世界には悲しいニュースがたくさんある。それらは、特に国際社会となった今では、自分とは必ずしも無関係な問題ではないのだ。選挙に行く際にも、そういった諸問題を踏まえた上で誰に投票するか決めなければならない。一日の新聞だけでも、数え切れないほどの問題が掲載されている。これらすべてについて知るのには難しいかもしれないが、そうした努力を少しでも多くするべきである。

また、多方面からの情報を知る事も大切だとおっしゃられた。複数に意見の対立している問題は数多くあるが、当然、その一方の意見のみを得ては、その問題に対して偏った見方しか出来ない。反対意見を聞くことも大切なのだ。その事は、多くの人を感じていることと思うが、知らず知らずのうちに、偏った意見を聞かされていることもある。例えば、国、会社、学校等の範囲の中では、自分達に有益な意見、または、自分達独自の考え方のみを聞かされていることもあるのだ。ここで、少し私の個人的な経験を紹介させてもらいたい。私は東京水産大学に通っているが、水産業を巡る日本の立場というのは少し特殊であると思う。捕鯨問題で、諸国から批判を受けているが、この学校ではある程度の捕鯨を是呈する意見が強い。鯨はこれまでの捕鯨制限のお陰で増えてきており、日本の伝統である捕鯨を止める必要は無い、と。私も同じような考えを持っていたが、自分はその問題に対して偏った意見を得やすい環境にいと一度注意され、目が覚めたような気持ちを覚えた。外部から受動的に情報を得るのではなく、自ら選んで多方面から情報を得る事が大切なのだ。

大野氏からはこの機会に様々な事を教えていただいた。氏の情熱のあふれる言葉は、私達一人一人の心に直接響いた。私自身、経験も浅く、知識も足りないと強く

感じ、それらをもっと高めていきたい、と発奮された。日本側メンバー、ケニア側メンバー双方とも同じような思いを持っただろう。大野氏には心から感謝したい。

## 閉会式（3月24日）

青木 さよ子

全体討論会に引き続きナイロビ国立博物館にて閉会式が行われた。開会式とは違って変わりメンバーだけのとてもアットホームな式が青空の下で開かれた。緑に囲まれたナショナルミュージアムで芝生の上に坐りとても気持ちがよく、学生ならではの閉会式ができてよかったと思う。

式は中村の司会で始まり、まずメンバー一人一人が1ヶ月間の学生会議の感想を話した。開催中メンバーはいろいろな体験をともにし、話し合い、助け合ってきたので本当にみんな色々な思いを持っていた。しかし、日本側メンバーに共通していたことは、私達のために色々してくれたケニア側メンバーへの感謝の気持ちとみんなケニアが大好きでまたいつか戻ってきたいということであった。

その後は日本からもってきたプレゼントをケニア側メンバーに1人ずつ手渡した。渡したものは日本側メンバーの通う大学の名前が入ったボールペンとシャープペンだった。みんな気に入ってくれた様子で喜んでもらえたようだ。最後にみんなでアイヌの踊りである“きつねの踊り”を踊った。とても簡単に覚えられる踊りなので輪になってみんなで踊り学生会議の最後を楽しんだ。この閉会式で嬉しかったのはこの式が日本側メンバーとケニア側メンバーが一緒になって計画を建て実行したもので、華々しさはないながらもとても温かいものにすることが出来たということである。

## 2月23日（金）

神秘と混沌の国、インドで一泊し、飛行機で経由地インドから約6時間かけてケニアに向かう。今回の先遣隊のメンバーは川田・中村・大平の3名である。先遣隊は残りのメンバーより一足先にケニア入りし、宿泊場所や開催準備のアレンジや確認をするために結成された。

この飛行機には昨年の報告会やミーティングでお世話になった在日ケニア人、アイザック氏も一緒に、一年ぶりの家族との再会に胸を膨らませている様子であった。飛行機の中から見えた、茶褐色の大地を点々と彩る緑の木々、荒涼とした大地に影を落とす、綿飴のような雲、機内からも窺えるほどの陽射しの強さに、私達は心の高揚を隠せない。

正午過ぎ、ジョモ・ケニヤッタ国際空港に到着する。空港に吹き込む風は太陽に焼かれた匂いがする。ケニア側メンバー、ラメックに連れられ、早速USIU-A (United States International University—Africa)に向かう。

USIU-Aでは、大学の生徒役員会であるSACのメンバーと日本ケニア学生会議のケニア側メンバーが話し合いをしていた。早くも残りのメンバーを迎える時のウェルカムパーティーや開会式開催の予定を詰めているところであった。到着して早々のミーティングには、ケニア側メンバーやSACの俊敏な行動力に感動しつつ参加する。ケニア側メンバー、キロンゾ、ジャッキー、学生アドバイザーのオロー先生との再会と出会い、協力を惜しまないSACのメンバーとの出会いに心から感謝した。

その後は昨年からお世話になっている旅行会社プラネット・サファリの社長ジェームズ&ルーシー宅にお邪魔し、楽しい夕食のひとつを過ごした。ジェームズが熱く語っていたケニアの伝統習慣、割礼（陰茎の包皮を切り取る風習）の説明が興味深かった。ジェームズの故郷ではその風習が残っていること、若年で通過する儀礼であり、激痛をとまなう割礼では、仁王立ちをして決して声をあげてはいけない、もし少しでも痛がったり逃げようとしたりとすると、家族に恥をかかしてしまうということを聞いた。

そして、夜の帳がおろされる頃、安らかな眠りについた。（大平智江）

## 2月24日（土）

ケニア到着2日目。朝、目が覚めて、アフリカの大地にいたことが未だに実感できない自分自身がそこにいるのを感じる。同時に、昨日の到着以来、ケニア側の事前調整・準備不足の為に急遽用意された新しい枠組みや、現地情勢の状況について十分には把握できないで戸惑いを隠せないでいる自分をもそこにいるのに気付かされる。

そうした中でも先遣隊として事前調整を図るべきことを改めて思い出し、これから始まる1ヶ月もの開催の成功に向け、重く・疲れた身体を起こすのであった。

実行委員長であるキロンゾ、ケニア側アドバイザーであるオロー先生（ナイロビ大学講師）と日本側メンバーとだけで今後の計画の確認と現状把握のために会合を昼から行う。

想像以上に様々な問題を抱え、不十分な体制であることを理解し、これからの開催が重く感じられたが、一方では、ケニア側メンバーが困難な中でも組織をマネージし、今回の開催を実現しようとしていることをも理解し、信頼できる仲間として共に困難を乗り越えていける仲間であることを強く印象付けられた。

夜、寝床の中で幾分心の安らぎを感じながら次のようなことを考えていた。確かにこれからの開催の中で、様々な困難に遭遇することはあろうが、“失敗を恐れず、友人たちを信頼し、国籍や価値観の違いを乗り越えて、共に協力して行こう”と心に強く誓って、深い眠りへと引き込まれたのであった。（川田慎也）

## 2月25日（日）

サファリ・パークホテルで、オロー先生に会うことができなかつたため、キロンゾ、後藤、川田、大平、中村、昨年USIU-AのSACの生徒会長だったフゼイファを含めて、ミーティングを開いた。その後、USIU-Aに行き、偶然会ったSACメンバーのワンボイに頼んで、SACオフィスのコンピュータを借り、会議の予定表を作成。雨がやんだ後、大空一面にかかる巨大な虹を目にすることができた。その夜は、初めてUSIU-Aに先遣隊として泊まった。ガーナ出身のレジデント・アドバイザーであるジョンが私達の滞在にあたって色々協力してくれた。彼は、開会式で歌を披露してくれることになるのだが、歌う時の彼は、普段の物静かな姿とは別の、情熱的な、プロ以上にすごい歌唱力の持ち主である。私たちが泊まった部屋は、学生寮の入り口にあり、みんないきなり来た私達に興味深々のようで、部屋のドアにいと学生が私の周りに集まってきた。「Hi、どこから来たの？どうしてここに泊まるの？」など声を掛けて来て、会ったばかりなのにすぐに友達として接してくれ、何かわからないことや困っていることがあると助けてくれた。USIU-Aの学生は、とても親切でフレンドリーな人ばかりだった。滞在がとても楽しくなったのも、これらの要素がかかせない。また、去年宿泊したゲストハウスとは違い、今回は、学生寮の中の普段はコモンルーム（学生たちが団欒したりする部屋）として使っている場所を空けてもらって、使用させてもらった。去年と比べ、女8人でこの部屋を使うことに最初はとまどいがあったが、共同生活がお互いの内面を本当によく知りあう機会になり、学生寮の中にあることからたくさんUSIU-Aの学生の友達と交流でき、結果としてコモンルームに泊まることができてよかった。（中村香織）

## 2月26日（月）

午後1時、後から出発組のメンバー青木、梅川、大原、鳥飼、矢向、吉田もついにケニアに到着した。空港で私達の到着を待っていてくれた、一足先にケニア入りし

ていた中村に出迎えられ、広い空ときれいな雲に感激しながらこれから一ヶ月お世話になるUSIU-Aに向った。そして到着後すぐUSIU-A内のカフェテリアにてSACメンバー（生徒会役員）による歓迎会が開かれた。このSACメンバーによる歓迎会は先発隊でアレンジしてくれたもので、後発隊の私達は最初状況が把握できなかった。みんな最初は少し緊張した様子だったが、軽い挨拶の後、初めて会う学生の名前をみんな必死に覚えながらお茶や軽食、会話を楽しんだ。（青木さよ子）

## 2月27日（火）

今日は、開会式のための、英語のプログラム作りと招待状を作成した。私は午前中ずっとジャッキーと一緒にいたが、自分の英語力の無さを痛感し、その後の本会議の大変さを予感させられた。

夕方、私たちはマサイ・マーケットへ。マーケットはとにかく客引きのすごさに圧倒された。その上、片言の怪しい日本語をしゃべる人が大勢おり、中には、私たちの後ろを延々とついて歩く人もいた。溢れんばかりの喧燥と熱気に私は最初戸惑っていたが、気がつけばしっかり値切って買い物をしていた。

その後、ナイロビ大学のキロンゾの友人たちに会って、一緒に踊ったり名前を覚え合ったりした。彼らはみな踊りが上手で、踊ることは特別なことではなく、ごく自然で日常的なことなのかな、という印象を受けた。

夜には、私たち日本側メンバーのための歓迎会をケニア側メンバーが開いてくれた。少しずつ、少しずつ、交流が深まっていくことが、嬉しかった。（梅川瑞穂）

## ▲ 開会式にて「おはロック」を披露。「おっはー!!」

We sang and danced to 'OHA ROCK' at opening ceremony. 'OHHAAAAAA'

## 2月28日（水）

午前中、一部メンバーは伊藤忠商事へ表敬訪問。その他のメンバーはJICAのナイロビオフィスへ訪問。仁田氏からケニアの基本的な知識やケニアでのJICAの活動状況などをお聞きする。オフィスの窓から一望できるナイロビ市内の風景が印象的だった。午後はグループに分かれて行動。招待状を渡しに日本人学校、タンザニア大使館、ウガンダ大使館へ向かった。ナイロビ日本人学校で作っているコーヒー豆を校長先生からいただき、一同大感激。(大原京子)

### 3月1日(木)

今日も焦げ付く太陽と朝のひんやりした空気に起こされ、一日が始まった。日も迫った開会式に向けての準備として、公的機関や教育機関に開会式の招待状を配るべく、メンバーで行き先を分担し訪問する。

ナイロビ大学の副学長、学生部長、JICA、タンザニア大使館に招待状を配り、また昨年お世話になった日本人倶楽部(日本料理店)の関氏に第一回の報告書を届ける。

その後、プラネット・サファリでミーティングを行い、今日の結果報告と今後の予定を話し合った後USIU-Aに戻る。(大平智江)

### 3月2日(金)

午前中に日本大使館への表敬訪問が予定されていた。しかし同時に、この日の午前中でなくては経理担当のマネジャーが対応出来ないとの理由から、USIU-Aへ宿泊費等の関係諸経費を納入する必要がある。そこで、大使館に赴く代わりに財務局の鳥飼と自分が大学に残り、財務関係の事務処理を大学側と行った。

午後からは、ケニアでの自然環境を理解する一端として、ナイロビ市郊外にあるナイロビ国立公園でのサファリ・ツアーへと出発した。ケニアに着いて以来、先が十分に見通せない中で色々と悩みを抱えていただけに、久しぶりに種々の問題から解き放たれて自分自身を取り戻せたかのごとく、落ち着いた気持ちに浸っていた。インパラ・シマウマ・キリン等の群れを望むことは出来たが、残念なことにライオンやメンバーの一人が心待ちにしていたカバと遭遇することは出来ずに国立公園を後にした。

夕方からは、ケニア有数の肉料理レストランである“カーニバル”に行き、多種の料理に舌鼓を打つこととなった。(川田慎也)

### 3月3日(土)

日本では雛祭りのこの日、我々JKSC日本側メンバーにとっては今回の開催で唯一の休日となった。この日は夕方からの日本側メンバーミーティングと分科交流会練習以外に予定は無く、それぞれが思い思いの一日を過ごすことが出来た。昨日の帰寮が遅かったために全体的に遅く起床し、それから洗濯等をし、買い物をしてタウンへ出かけたメンバーもいれば、一日中USIU-Aで語りあっていたメンバ

一もいた。私は買い物に出かけた方に属する。買い物組がU S I U - Aに戻った後すぐ、芝生の上、青空の下でマンゴーや、後藤千枝の友人である木賊薫さんから差し入れのオニギリを食しつつの爽快なミーティングが始まり、その後徐々に日本側メンバー全員揃っての夕食。一寸休憩をとった後、9時から分科交流会の練習を始める。予定が詰まった今回の開催では個人で自由に行動出来る機会が少なく、タウンでのショッピングは、私にとってはナイロビの商店についてよく知るいい機会となった。U S I U - Aにとどまったメンバーも弱った体を休めさせたり、分科会の準備をしたりと充実した一日を過ごすことが出来ただろう。長い開催期間の中でこのような一日も必要であることを感じた。

(鳥飼恵美子)

### 3月4日(日)

10時30分から、U S I U - A大学の芝生で、ラジカセを使って、文化紹介の踊りの練習をした。

14時から、旅行会社プラネット・サファリに集まり、分科会の各班ごとのメンバーを決めた。A I D S班は、マセセ、ボアーズ、レオナード、青木、大平、吉田。開発班は、キロンゾ、ラメック、ブラムウェル(この時は欠席)ハロン、川田、鳥飼、矢向。幸せ班は、ジャッキー、ムサ、梅川、大原、中村、(オロー先生)。その後、各班ごとに分かれ、今後の分科会の予定を話し合った。分科会だけ参加のメンバーが集まり、この日だけ顔を出して来なくなったメンバーもいたが、人数はいつもよりも多いものになった。今日のお昼にナイロビ在住の、木賊薫さんから春雨サラダと和風パスタの手料理をいただいた。久しぶりの日本食だったので、とてもうれしく、ケニア側のメンバーも初めて口にする日本の家庭料理を気に入って食べていた。(中村香織)

### 3月5日(月)

私達は早起きしたため、プランインターナショナル(国際NGO)のあるエンブという町に向かう車の中は、ガタガタ道に思いきり揺られながらほとんどの人が爆睡。お互いに遠慮なく寄りかかって相互扶助といったところ。この日のプロジェクトはみんなが楽しみにしていたもので、そのため一度他国で訪問したことのあるメンバーの川田がナイロビに一人残って、その日にしなければならない用事を済ませてくれた。

はじめにプランインターナショナルで働いている人たちの話を伺ったが、スタッフの皆が何度もウェルカムと伝えてくれて暖かかったこと、熱心に自分の仕事について話してくれたこと、また、部屋や椅子や文字を書くボードにお金をかけていなかったことから、贅沢せず本当に地域の人と同じレベルで協力して活動しているのだと感じたことなどが印象的だった。私は、オフィスがあまりに立派だとそれにかけたお金でもっと良い活動や援助が出来るのに、とってしまうからだ。エンブ

の町はのどかで、ナイロビに長くいた私たちにとってとてもほっとする場所だった。プロジェクトとして実際に見せて頂いた場所は大変興味深く、皆質問したいことが盛りだくさんだったが、時間の関係上ゆっくりすることが出来ず残念だった。予定が遅れているにも関わらずもう少し見たい、聞きたいという思いのため、すばやく移動せず、プランインターナショナルの方々に、ご迷惑をかけたと思う。ごめんなさい。

見学させていただいた村でチャイとパンを頂いた。シンプルなものだけでも、外でベンチをたくさん出してもてなして下さり、皆感動していた。本当にありがとうございます。お昼をとっても豪華なところで頂き、しかもプランインターナショナルの方々に色々協力して頂いて、本当に嬉しかったです。(矢向瞳)

### 3月6日(火)

今日は朝からハプニングだらけ。某旅行会社に頼んでおいた車は遅れるし、ガソリンスタンドによって前の車とはぐれ迷子になるし(これは第三国研修で訪問場所を回っているときに私たちは某旅行会社の車でまわっていたのだが途中でドライバーが終わったと思いガソリンスタンドによって他の車を見失ってしまった事件)、こっちの人はどういう感覚なのだろうか????理解できん。KEMRIでは第三国研修に参加させてもらった。そして参加している人と一緒にカウンセリングをしているところ、エイズ孤児院をまわり、最後にKEMRIで市橋先生にエイズについて話していただき、小林先生に中を案内してもらった。一番心に響いたのはエイズ孤児院。エイズが発症している子もいて、エイズについて触っても感染しないという知識は一応もっていたけれどはっきりいって触ることさえ怖かった。理解することと実行することの大きな差を感じ、自分の情けなさに歯がゆくなった。これでまたひとつ学んだのかな、と望みつつ・・・・・・・・(吉田恭子)

### 3月7日(水)

開会式、文化交流会の前日ということで丸1日使って準備を行った。午前中はみんな、交流会で発表するためのダンスや歌の練習を行い、午後からはいくつかのグループに分かれて様々な用意を行った。私達のプロジェクトで使用する車の手配をしてくれる旅行会社、プラネットサファリに今後のスケジュールの調整に行った人、開会式と交流会で出す料理の材料の買い出しにいった人、そのほか開会式の細かい準備をする人に分かれた。夕方にはそれぞれの衣装を着てのダンスの練習も行った。衣装を着ると“いよいよ開会式だ”という雰囲気になり、みんな真剣に踊っていた。この日は夜遅くまで垂れ幕の手直しや、開会式や交流会で出す料理の準備をし、忙しい1日となった。(青木さよ子)

### 3月8日(木)

今日は、ついに開会式。やっこの日がきた、という気がした。この日の私の分担は、日本料理作り。メニューは、式の後お昼に出す親子丼と肉じゃが、それから夜の文化交流会に出すお好み焼きとかきもち。料理担当は、青木、吉田、梅川の3人。バタバタと忙しかったけれど、とても楽しいものだった。日本とはちょっと違う材料で作るために、試行錯誤しながら作っていた。最初に作ったものと、最後に作ったものでは見栄えが違っていた。

閉会式は、多少の遅れも見せながらも無事始まった。終わった時には本当にほっとした。ケニアに来てから今日まで、この開会式のために奔走した日々であったという気がした。

文化交流会では、私たちは、日本の踊りと歌を披露し、料理を振る舞った。珍しさも手伝ってか、大変喜んでもらった。(梅川瑞穂)

### 3月9日(金)

午前中、メンバー全員でスラム(D e e p S e a)を訪問する。そこにある唯一の小学校で、日本の小学生が描いた絵や習字をプレゼントし、おはロックを披露。子供達は英語が話せず意志の疎通は難しかったが、カメラに“キャーッ”と喜んで反応したり、簡単なスワヒリ語の歌と一緒に歌ったりして楽しむことができた。その後、先生からこの小学校の状況と物質援助を必要とするとしているという事を聞く。スラム全体の状況とグリーティングカードの話は11日に日を改めてすることになった。午後は、U S I U - Aの学生主催のチャリティーコンサートに参加。ダンスやラップのビートのあわせてよそう以上の盛り上がりだった。プロのグループも登場し、大原が中央で一緒に踊るという場面もあった。最後には坐って見ていた人もみんな集まって踊り出してコンサートは終了した。

(大原京子)

### 3月10日(土)

前日必死で最終的な作成を終えたそれぞれの分科会レジュメを抱え、眠い目をこすりつつ分科会ごとの集合場所に向かう。

「開発協力と環境」班はオロー先生のナイロビ大学オフィスで、「エイズ」班は国立博物館の芝生の上で、「幸せ」班はプラネット・サファリのオフィスで話し合いがもたれた。午後には「開発協力と環境」班が日本のNGO、C a n D oの訪問、「エイズ」班と「幸せ」班がエイズ孤児もひきとっているという孤児院ニューライフホームに訪れた。各班の力のこもった話し合いの詳細は分科会の項で見ただければ幸いである。

各班がテーマについて熱く話し合い、生き生きとフィールドワークを訪れる様子が印象的であった。(大平智江)

### 3月11日(日)

明日からのフィールド・トリップを控え、午前中はU S I U - Aにて木陰にもたれながら、そよ風に吹かれつつ、くつろいだ時間を過ごす。

午後からは、D e e p S e a スラムを再度訪問し、スラム内の長老や有力者たちと今後の協力関係の在り方について懇談会を行うこととなった。しかし、オロー先生が集合時間に待ち合わせ場所に来なかったために、ブラマイルと共に彼を待つこととし、他のメンバーは先に行くことになった。

先生を待つ間、初めてブラムと個人的な会話をする時間を持つこととなった。神経質な性質ながらも、政治問題から文化・哲学に至るまでの深い教養と確固たる意見を持つ優れた素質を有する彼への理解を深めていく機会となった。

D e e p S e a では懇談会の後に、スラム内を見学する機会を得た。わずかな家財道具と土で塗り固められた小さな家に家族全員で身を寄せ合うように暮らしている。下水が家の周囲を流れ、ゴミが無造作に積み重ねられている。川を挟んだ向かい側は、ドイツ・コンゴ共和国大使公邸が立ち並ぶ高級住宅地になっている。

貧困状態を改善するのに、共産主義体制や物質的援助そのものが必ずしも有効なものではないことは明らかである。「貧困とは個々人の基礎的な潜在能力が欠如した状況であり、そうした個々人の潜在能力を拡大することが開発を意味する」のではないか。貧弱な頭脳ながらも、アマルティア・センの言葉を用いて現状解決を試みようとした1日となった。(川田慎也)

### 3月12日(月)

8時にU S I U - Aに到着したミニバスに乗り、旅行会社プラネットサファリ前でジャッキーを乗せ、青年海外協力隊(J O C V)の方が活動されている虹鱒養殖場のあるニャフルル市へ向かう。ミニバスは9人乗りで運転手が11人乗りを許さなかったため、キロンゾと川田はマタツでニャフルルに向かうことになってしまった。それでも昼には無事2人とニャフルルで再会し、J O C Vの杉本氏ともお会いすることが出来た。そこから彼らと共に養殖場へ向かう。市内から養殖場までの道のりでは、運転手は何故かわからないが、13人乗りを許した(これ以後も10人以上乗ることを許してくれた)。そうして養殖場に着くと、メンバーの一人、ブラマイルがいた。彼はどのようにしてここまできたのか(山中にあるので)、何故我々と共に来ないのか。本当に不思議な人物である。この日最大の謎であった。養殖場見学を終え、杉本さん達に別れの言葉を述べた後、帰ろうとすると運転手がなにやら車の助手席シートの下をいじっている。私にはよく分からなかったが、車のある部品の調子が悪いとのことだった。しばらく修復作業を続けていたが、途中でシューッと激しく熱湯が噴き出てきて、非常に危険であった。運転手は奮闘してくれていたが、結局完全に直すことは出来ず、数分後にガソリンスタンドへ行き、直してもらった。ケニアが輸入している中古車の質の悪さを痛感した出来事であった。そして夕方頃、ナクルのエガトン大学に到着する。ラメックが校門で我々を待っていた。メンバー全員共に夕食をとり、エガトン大学のJ K S Cに興味を持ってくれた学生と会って

話し、エガトン大学内にあるホテルへ向かう。日本側メンバーはここに宿泊することになっていた。この日は皆が一つの部屋に集まり、夜遅くまで話をしていて、ケニア側メンバーとこのように過ごすことはほとんどなかったのも、そういった意味でもエガトン大訪問はとてもいい機会だったと思う。 (鳥飼恵美子)

### 3月13日(火)

AM 7:30-8:00 エガトン大学内ホテルのレストランで、朝食をとる。豪華なビュッフェで、パンと目玉焼き、シリアルやパイナップル、スイカなどのフルーツや飲み物は、3種類のフルーツジュースとコーヒー、紅茶で、かなり豪華でおいしい朝食を食べた。ただ、朝から吉田の体調がよくなかったため、残念なことに彼女はエガトン大学での活動は、参加できなかった。

AM 8:30 ディーンオブスチューデント(大学の学部長)のラングアットさんに会い、JKSCについて説明をした。その後、SUEU(エガトン大の生徒会役員会)委員長のモリスとSUEUメンバーのオスマンに校内を案内してもらった。言語学研究所に行き、JKSCの説明とエガトン大学で実施されている、交換留学制度の話聞いた。その後、約10年前からエガトン大学に設立されたジェンダーセンターに行き、ケニアのジェンダー問題の話伺い、その関心の高さに驚いた。最後にエガトン大の農学部が販売している、飲むヨーグルトと牛乳を買って食べた。採れたての牛乳を使っているのも、新鮮かつ濃厚な味で、とても気に入った。今回エガトン大学を訪問し、色々な方達が、親切に私たちを受け入れてくれて、熱心にJKSCの話聞いて下さり貴重な体験をすることができた。

午後、ナクル湖の国立公園へフラミンゴを見に向かったが、学生割引が使用できないトラブルと雨が降り出したこともあって、中へ入ることをあきらめてナイロビへ帰る事になった。去年のメンバーもゲートまで来て帰ったので、つくづくナクル湖には縁がないのかもしれない。日本側の、お金を出してでもフラミンゴを見たいという考え方とは反対に、ケニア側はフラミンゴを見ることにさほど興味を示していなかったのも、この選択に満足そうだった。ケニアと日本の自然への考え方の違いだろうか。ケニア側にとって、高いお金を払ってまでなぜいつでも見れるものをわざわざ見に行く必要があるのか、と考えていると感じた。私達のように、ケニアの大自然を鑑賞物としてとらえ、「わー、すごい。」と騒ぐような自然と人を分けた視点でなくて、ケニア側には、自分達の一部に自然があるという考えを持っているのではないかと感じた。帰りの道ではドライバーが、ミニバスに11人乗せることを許可して(9人しかミニバスは保険が利かないため、行きは川田とキロンゾがマタツでナイバシャまで行った。)、行きのようなことにはならずすんだ。遅刻をしたり文句を言う「問題」のドライバーだったが、この日の彼の行動に全員、彼を見直した。ナイロビに着いた後、鳥飼、川田とキロンゾは、UNEP(国連環境計画)と朝日新聞のアレンジのためにオロー先生のオフィスに残り、他のメンバーは、USIU-Aに帰った。(中村香織)

▲ エガトン大学にて。JKSCメンバーとエガトン大学の先生方。

At EGERTON University. JKSC members and teachers of EGERTON University

### 3月14日（水）

日本と東アフリカの関係を作る上で重要な役割を担う新聞社のお話を聞きたいということで、朝日新聞社に一部のメンバーが伺う。また夕方、USIU-Aの日本語クラスに参加した。夜、早川千晶さん(1990年からナイロビに定住。旅行会社に9年間勤務し、旅の企画や撮影コーディネーターを手掛けた後、1999年フリーランスに。現在は執筆活動のかたわら、ナイロビ最大級のスラム・キベラでのストリートチルドレンのための学校の支援、アフリカの面白さを日本に伝える講演活動などをしてい)と早川さんの友人のケニア国立博物館に勤務の高橋氏にお会いして、日本人倶楽部という日本食の美味しいレストランで夕食をとりながらくだけた雰囲気の中、話をしていただいた。私は早川さんにお会いするのをとても楽しみにしていたし、さらに話を聞き始めてすぐ、早川さんは私が将来やりたいと思っている事を楽しく実現している人だと感じて、予想以上にとても充実した一時となった。早川さんは「先進国に生まれた責任」というものをはっきり認識して行動すべきだと言っており、私達が古着（先進国のごみ）をアフリカに送っていい事をしたと満足しても、また新しい服を買って消費していくなら、それは世界のひずみを広げてしまう事につながるという。たぶん、川の水をきれいにするボランティアをしたとして、それはいいことだけれども、その一方で水をいっぱい使って掃除や皿洗いをして汚しているのは方手落ちなのと同じ事だと思う。私は古着を送って、捨てられるはずのものが生かされるのはいいと思う。しかし同時に服に困るほどに貧しい人々が世界にいることをもっと身近に意識して、不必要な服を買いすぎないように、そんな事にお

金を使い続ける社会の歯車を回し続けられないように、努力する事も必要なのだと思う。世界のひずみはバランス感覚の悪さからきていると早川さんはおっしゃっていた。バランスを大切にすることが世界にあちこちおきている問題、たとえば貧困問題や、環境問題を解決することを助けるのだ。自分の幸せしか考えていなかった人も、きっかけさえあれば、楽しみながら社会の動きを良くしていくために活動したり生活したりできるようになると早川さんは信じている。日本にもいい活動をしている人はたくさんいるけれど、それぞれが小さな炎だったら消えてしまうかもしれない。消えずに大きな炎になるように、そういった活動をする人とのネットワークをつくる必要があると主張していた。早川さんのホームページはそのネットワークの役割の一部を果たしている。私たちの活動も小さくまとまらずに、多くの人を良い形で巻き込める波のようなネットワークをつくれたらいいなと思った。そして何よりも早川さんのように「自分の趣味なの」といいながら楽しく活動できるようになると、皆も気負わずに参加しやすくなっていいと思う。

▲日本人倶楽部でのお食事会。早川女史、高橋氏（中央後ろ）とメンバー。  
At 'Japanese Club'. JKSC members with Ms. HAYAKAWA and Mr. TAKAHASHI.

一緒に来てくださった高橋氏のなさっている事は早川さんの活動と表面的には全く違うけれど、二人はとても仲良しなのだそうで、それは根本の二人の目指す方向が一緒だからだと思うし、違う立場の人とたくさん話を話して仲良く協力し合えることは大事な事だ。高橋氏が、「自分で見る」事の大切さを強調していたのが印象的だった。一万枚あるケニア独立の時の写真を100枚見せてもらっても独立を正しく知る事は出来ない、文化は伝えられない、と主張なさっていた。なるべく多くの

写真を、文書を、文化遺産を残していくために働く高橋氏の仕事にとっても興味をもったメンバーや、このお二人に会えただけでもケニアに来た意味があったかとも言うメンバーもいて、本当に二人には感謝しています。(矢向瞳)

### 3月15日(木)

ジョモケニヤッタ農工大学に行くために1時30分にUSIU-A近くのサファリパークホテルの前でみんなで待ち合わせだったのにブラムウェルは7時に某旅行会社に集合だと思って行って待っていたんだって。かわいそうに。今日の出発は遅かったのでゆっくり寝られてとってもうれしい。ジョモケニヤッタ農工大学は森元首相も来たところらしい。とっても大きくなってやっていることもまた大きい。今日はマタトゥーのストライキがあつて帰りには警察検問があつてびっくり。なんでストライキしたかという警察のマタトゥー取調べがとっても厳しいからだって。あんなマタトゥーどうやって取調べするのだろうか???基準なんてあるのかな???なさそうなんだけど。安全第一だしね。がんばれ警察、がんばれマタトゥー。

\*マタトゥーはケニアの交通手段の一つで人をぎゅうぎゅうに押し込めてものすごいスピードで走る車です。(吉田恭子)

### 3月16日(金)

この日の主な活動はケニア側と日本側メンバーでのUNEP(国連環境計画)訪問とDeep Sea(ナイロビ市内スラム)についての話し合いをした。学生が国連機関を訪問できるのは難しいということなので私達はすごく幸運だったと思う。訪問後のDeep Seaについての話し合いでは前日夜遅くまで日本側メンバーで話し合ったことをもとに、Deep Seaの生活向上のために「私達は学生の立場で何ができるのか」について話合った。日本人同士でもなかなか話がまとまらなかったものを、ケニア側メンバーとともに英語で話し合うのはとても大変だった。(青木さよ子)

### 3月17日(土)

今日は週に1度の分科会の日だった。各班ごとに、行動し、日本側メンバー全員が集合したのが、夜、川田の卒業パーティーのときだった。青木と吉田が料理を作ってくれたが、全員集合したのが10時半過ぎ。飢えた仔羊たちは、お腹が空きすぎてちょっと変だった。パーティーが始まると、皆お皿の前から離れられず、ひたすら食べつづけていた。会話らしい会話は、やはりお腹がある程度おさまってからだ。開会式も終わり、全員の心にゆとりが生まれてきている気がする。今まで、あまり全員で楽しく歓談する時間が持てなかったが、今日は夜遅くまで、本当に楽しく過ごせた。(梅川瑞穂)

### 3月18日(日)

ナイロビ郊外スタディーツアーはケニアにきてから3週間ぐらい経ってようやくひと休み、といった計画だった。朝早く出発する予定が約1時間も迎えの車に待たされるという、出だしからとんでもない状況だったが、それでも予定通りのコースをまわることができた。まず最初にキティンゲラ（ガラス工房）へ。かなり道に迷ってやっとの事で到着したキティンゲラグラス。想像を絶する綺麗さ、可愛さだった。特に印象的だったのがトイレ。“トイレ”という標識から中の便器までかわいらしいタイルでできていた。

次に丘からの景色が美しいといわれるンゴングヒルへ。ワゴン車でかなり揺さぶられながら着いた所は丘の中腹。私達が重すぎてこれ以上車は走らないとのこと。仕方がないのでみんなで歩いて丘の上までいった。丘の上はとても気持ちがよく、ナイロビ市内を一望することができた。最後に神戸先生の家へ。たくさんの楽器やケニアならではの家具、小物に囲まれた素敵な家で象の糞のお茶を飲みながら、興味深くためになる話をたくさん聞いた。その後電気のひかれていない真っ暗な家を後にして、先生とともにエチオピア料理の店へと向かった。盛り沢山の1日だった。

（青木さよ子）

▲ ンゴングヒルからの景色は本当に素晴らしい。

Ngongu Hill is a place of scenic beauty.

3月19日（月）

午前中、在ケニア日本大使館一等書記官奥田様にお会いし、UNEP訪問に関する話と報告書に対する意見、特に、象牙不買運動に対する違う角度からの意見を伺った。ここで簡単ではあるが、その話を書かせていただきたい。

昨年 2000 年 3 月 21 日、私達は第一回日本ケニア学生会議として、象牙不買運動に参加した。私達の参加の動機は、象牙を取るために象を殺してしまうこと、そのために孤児の象が出てしまうことから、象牙の密猟や密輸と、その原因となっている日本の象牙買い漁りに反対するというものであった。この中で、日本の伝統文化である琴を演奏するときに使う爪にプラスチックを使うのでは音が全く違うため、伝統を守るためにも象牙売買を禁じる動きに疑問は出ていた。

ここで、象牙の密猟・密輸は問題である。しかし象牙の売買はどうだろうか？

例えば、南部アフリカでは象牙を売ることによって象の生態や生存を保護する資金を作っている。国立公園の維持費は、多くなりすぎて間引きした象などからとった象牙を販売しそれを資金としている。象牙の密猟・密輸はともかくも、売買が禁止されたら、これら国立公園は動物達の生活やそれを守るレンジャーなどを維持できなくなってしまふ。つまり、象牙の取引が必要である国もある。これを踏まえ、ワシントン条約でも南部アフリカへの認識はあるという。

日本や諸外国に、大量に輸出するために象が殺されることが問題のケニアでは、象牙密猟、密輸反対という意見から、象牙の売買反対を言えるかもしれないが、状況の異なる国もあるということであった。

象牙の取引など、解決策を見出すことが困難である問題だからこそ、様々な角度からの意見をバランスよく考えていくようにしたい。

貴重なご意見を頂き、大変勉強をさせて頂いた。

午後、ナイロビ大学講師オロー先生にお願いして、アフリカ第 2 の規模を誇るスラム・キベラに連れて行ってもらった。広大な大地を覆い尽くす無数の家々。ここでは多くのものが売買され、人の激しい往来を切り裂くようにマタツが走る。ここは極めて生活臭の濃い地域であった。

独特の臭い、靴を通して感じる土の感触、ラジカセから流れるアフリカ音楽、それは五感を刺激する経験だった。

この日、キベラをほんの数時間歩いただけで、私たちは真っ黒に日焼けした。

(大平智江)

### 3月20日(火)

今日は、実行委員長であるキロンゾの故郷であるエカラカラでの 2 泊 3 日のホーム・ステイに向け、ナイロビを出発する。

以前からキロンゾを通じて手配していた貸切りのマタツに乗り込み出発するが、エンジントラブルで修理の為、出発早々ガソリンスタンドに直行する羽目になる(車の故障はナクル行きに引き続き 2 回目)。但し、修理の待ち時間にはアイスクリーム屋さんとの愉快的な値下げ交渉もあり(結局失敗!) 退屈せずに過ごせた。

修理の後、気を取り直して再度出発。途中で、お昼とこれからのステイでの必要物資の調達を兼ねて立ち寄ったマツで、キロンゾの妹であるリズを車に乗せ、目的

地エカラカラに到着。

これからキロンゾ・ファミリーとの対面と思いきや、その前に運転手に帰路でも彼らのマタツゥーを用いるよう言われ、値段交渉が始まる（この国で何度値段交渉したのだろう）。

1回の費用が3000シルだから、ケニアでの平均月収に相当する額だけに彼らも真剣。やっと交渉をこなし、遅れ馳せながらお母さんと対面！

夜は、天体一面に広がる星々（正にプラネタリウムのような）を眺めながら数時間を過ごす。今見ている星は、今その光を発しているのではなく、自分が生まれる遙か過去から発せられたものである。そうした多くの星の下に置かれることで、改めて自分の小ささを感じつつも、小さな空間ながら過去との対話が図られるような幻想に駆られるのである。（川田慎也）

▲ エカラカラの子供たちと‘きつねの踊り’を踊るメンバー

We danced ‘dance of foxes’ with children.

3月21日（水）

エカラカラ滞在2日目。この日は農作業を手伝ったり、山羊を殺す場面を見学したり、キロンゾの家族、友人達と共に食事をしたりとここでの生活をよく知ることが出来た。なによりも、たくさんの友人を作ることが出来た。メンバーは3組に分かれて3軒の家にホームステイさせてもらったのだが、私と大原は町の中心部から徒歩12分程のところにある Mrs. Mathus 宅に泊めてもらった。美しく広い家で、広大な畑の中にこのような立派な家があることに驚かされたが、ここでの生活もこの町の他の家庭と大して変わらないものであった。そしてこの家の生活も前日までのキロンゾ実家での生活と同様に、私にとってとても新鮮なものだった。今回のエカラカラ滞在では日本・ケニア間の文化的差異も感じたが、それよりも生活の差異

を強く感じた。エカラカラには、ガスはもちろん電気も水も供給されていない。近くにマシंगाダムというダムがありそこからの電線がエカラカラ上を通っていたが、電気はこの地域を素通りして、ナイロビに供給されるということだった。Mrs. Mathus 宅では太陽光発電器から少ない電力を得て、テレビや電灯に利用していた。水は牛車で片道1時間程にある川からくんできて利用していた。以前は電気も水も自由に使えない暮らしをととても不自由であると考えていたが、ここでの生活を経験してからは逆にいかに私たち日本人が資源を無駄に使っているか、ということを感じるようになった。水は溜めてあるものを使い、木の枝を燃やして湯を沸かす、という生活がごく自然であり、自分が食べているもの、飲んでいるものがどこからどう来たのかもよく分からず、そして肉を食べる習慣を持ちながら、食べるために動物を殺すことが出来ない、ということの方がよほど不自然である、と感じた。

また、この日は名古屋の人形劇サークル、えぷろんろんのメンバーの方々の提供による人形劇を村の人たちの前で披露した。スワヒリ語で演じる事を試みたが、なかなかうまくいかず、周りの人たちに言葉を教えてもらいながらの少々情けない公演となってしまった。笑いの絶えない心地よいひと時であった。(鳥飼恵美子)

▲タイヤパンク事件。タイヤを交換するため悪戦苦闘する我々。

We had a flat tire on the way home.

### 3月22日(木)

エカラカラを去る前に、JKSCメンバーキロンゾの妹のリズが私たちのためにカラフルなケーキを用意してくれて、みんなでそれをご馳走になり、私達はキロンゾの家族へ感謝の気持ちをこめて千代紙で折った鶴などをプレゼントした。この日

は、カラカラではマーケットが開かれる特別な日だったので、出発前にマーケットも見に行くことができた。カラカラを去る時は、別れるのがとってもつらく、みんなキロンゾの家族に何度もさよならの挨拶をしていた。帰りの道で、車のタイヤがパンクするという事態がおこったが、通りかかった車の人に助けられ、なんとか出発できた。道がとっても悪いので、たびたび、パンクするケニアの道路事情を特に実感した。頼んでいたバスが遅れた時、毎回「パンクしたから遅くなった」と言い訳するので嘘かと思っていたが、案外、本当なのかもしれないな—とこの時思い直した。

途中のマツー(Matuu)という大きな町で降りて、リズが彼女の友達の家へ連れて行ってくれた。町のマーケットで大平は、靴の修理屋さんでサンダルを直していた。修理屋さんは、小さな釘を使って、取れかかったサンダルの皮を手馴れた手つきで8箇所次々と直し、それで全部で25ksh!(約45円)若い彼はもう何年もこの仕事している感じの熟練さんで、黙々と作業する彼の姿はちょっと誇らしげに見えた。補修中周りの人も私達と一緒に集まって、じっとそのすばらしい手つきを見ていた。リズとは別れ、途中キジマニ(Kithimani)で、行きと同様私がオレンジ、キロンゾがサトウキビを買ってみんなで食べた。ここの食べ物はナイロビで買うものよりも安くて新鮮で甘くて美味しい。

夕方 USIU-A に着き解散。(中村香織)

### 3月23日(金)

午前中はJBICの事務所で話を伺い、午後はお菓子やジュースを買い込み、くだけた感じの中ナイロビ大学のオロー先生のオフィスで、共同通信の大野氏の話をお聞きさせて頂いた。今までJICAやJBIC, UNEP等の機関で働く人々に話を聞く機会が多かったが、大野氏は新聞記者として、色々な方向から物事を見れる立場にいる方だったので、偏らない話を聞けて新鮮だった。未熟で人生経験の浅い学生である私達をおおらかに受け止めてくれる大野氏の雰囲気癒された、と言っていた人は私を含めて多く、きっとまた日本でお世話になることと思います。よろしくお願い致します。(矢向瞳)

### 3月24日(土)

いよいよ会議最終日です。さびしいよ。早いね、一ヶ月は。今日は各班の分科会の発表と閉会式をしました。ケニア側と合同で何かをしたという実感が一番湧いた日だった。芝生の上で優雅に語りながら楽しんだ。一ヶ月いっしょにいたみんなともお別れだよ。実を言うとはじめは怖かったんだよね。どんなところなのか、どんな人なのか、どんなものを食べるのか等々。でも今は・・・・・・・・・・という感じ。これは行った人にしかわからないね。シークレットでしょ。これは心の中にとっところ。あーケニア滞在も残り2日だよ。信じられない。うーーーん。

(吉田恭子)

- ▲ ナイロビ国立博物館の中庭で閉会式。  
みんなでサンドイッチを作ってお昼ご飯♪  
We made sandwichies for lunch at National musium.

# 個人エッセ

吉田恭子

イ

大平智江

梅川瑞穂

鳥飼恵美子

矢向瞳

曾根田明子

青木さよ子

中村香織

菰田文江

川田慎也

大原京子

後藤千枝

Chie Goto

Lameck Bijumo

ラメック ビジュモ

Lackie Anyanzwa

ジャッキー アンニャンゾワ

Ben Masese

ベン マッセッセ

ケニヤでの思い出

慶応大学 法学部 政治学科 2年 吉田 恭子

サバンナの ハイハイお辞儀に 笑み浮かべ

・・・ナイロビ国立公園に行くと、見渡すかぎりに緑の穂をつけた草が風にそよ

いで、頭を下げたり上げたりしながら迎えてくれた。

今思う プラネタリウムは ぼったくり

・・・エカラカラ村で横になって見上げたあの星空は、この世にプラネタリウムがあることを忘れさせてくれるほどきれいだった。

雨の中 遠くを指差し 我叫ぶ

・・・ナクルに行った帰りにフラミンゴを見ようとナクル湖に立ち寄ったが、入場料でトラブリ、フェンス越しから湖に浮かぶピンク色の群れを見てキャーキャー叫んだ。

女忘れ だらだらこぼす マンゴー汁

・・・あまりのマンゴーの美味しさに口のまわりをベトベトにしたり、ダラダラ汁をたらしたりしながらほおぼりついた。

雨の夜の はかない虫に 一苦勞

・・・雨になるとでてきたカゲロウのような虫は光のあるところに集まってくる習性があり、部屋を明るくしているといつのまにかその虫が集まりパニックになった。

最終日。川田からの花のプレゼントにご機嫌のみんな（吉田は上段左から2番目）

Last day. Everybody is happy in hand about the bouquet given by Kawada.

(Yoshida is the 2<sup>nd</sup> from the left of the upper row)

ケニアの風

東京水産大学 資源育成学科 2年 大平 智江

乾いた大地を走り抜ける風、焦げ付く太陽と涼しい日陰、ナイロビタウンでけたたましく鳴るマタツ（乗合バス）のクラクション、どれもが懐かしさを呼び起こす。ケニアでの思い出だけではない。本会議開催前の日本での準備も忘れ難い。頬を切り裂く寒さの中集まって行った雪の日の定例会、文化交流会のために日本の躍りを練習しつづける日々、きついスケジュールをこなしながらも夜中まで話し合いをした合宿、本会議中の訪問地アレンジの為に、徹夜で文書を作成した次の日にみた朝日と、メンバーの目の下の隈…どのような時にでも側で支えてくれるメンバーがいる。ケニア側メンバーも日本側メンバーも、これまでの経験も思い出も、辛さも哀しさも嬉しさも喜びも、全てがかげがえのない宝物である。

昨年に引き続きこの会議に参加したが、今回は日本側学生代表という立場であったため見たもの・感じたこと・考えねばならぬことが大きく異なった。

昨年の報告会以降、報告書の作成に時間を大幅にとり、なおかつメンバー募集、ケニア側との連絡等、なかなかスムーズにことは進まなかった。特に昨年からの引継ぎがうまくなされなかったため、運営ノウハウが分らず、日本インド学生会議に出向して学んだこともあった。自分達の開催を成功させるだけでなく、次の世代を責任持って育てていくことも私達の重要な仕事であると同時に、そこまでやってこそ、この会議が目指す100年の継続なのではないかとも思う。このような状況であっても多くの方に支えていただいて、この第2回開催が実現した。見えるところで、見えないところで、多様な形で私達を応援してくださっていた方に心より御礼申し上げたい。特に、運営ノウハウだけでなく数多くのことを学ばせてくれた日本インド学生会議には、いくら言葉を綴っても表現しきれないほど、感謝している。

私は2年間の日本ケニア学生会議の活動を通して考えたこと、そしてこれからのあり方について提言したいと思う。

### 私は参加して考えた。

近頃、人と人との関係が多様化している。メル友、援助交際という関係もまたその断片であろうと同時に、親子関係も大きく変わっているのではないか。幼稚園に入園した時から情緒不安定な子が多い、小学校一年生で授業中にふらふらと立ち歩いたり、暴れだしたりする子供がいるという。その原因は親子関係・地域社会・遊びの間の環境などが複雑に絡み合っているが、親子関係に関して次のような話を聞いた。

幼い頃から多くを期待され、目の前に転がっている石に躓かぬよう親達を取り除き、レールを安全に滑らされる。親の目の届かないところにいたり、何か失敗をしたりすると親は逆上して子供を傷つける。肉体的にだけでなく、立ち上がれないほどの痛手を精神にも与えて。親の責任感もわかるが、しかし、それが「自分の見えるところにいて欲しい」「失敗して親である自分の面子を潰さないで欲しい」という親のわがままであることに、当の子供は肌で感じ取っていても、親は気付かない。親にとっての愛情が、子

供にとっての苦しみとなってしまふこと、側で見守る愛情を知らない人が増えているの  
だろうか。

親と子の関係、人と社会の関係が多様化する現在、人と、社会と向き合った時に自分  
がどうあるか。「〇〇〇に所属している××さん」ではなく、いかに自分に何か核をもつ  
た人間になれるか、それをよく考える。豊富な知識や美しく紡がれた言葉ではない、心  
のこもった一言を伝えることができるようになれば、と。それらは決して書物から学ん  
だり、人から聞いた話だけではできないだろう。まずは自分を知ることだ、自分の考え  
の背景にある文化や価値観、そして性格、それらを知るのがまず必要なのではないかと  
思う。

何故ケニアに行くのか。日本でもケニアでも私達は活動を続ける。ケニアの学生と討  
論すること、様々な所を訪問させていただき、途上国で働かれるNGO、政府組織、国  
際組織に属す方々の生の声を聞くこと、ケニアの学生と日本の学生で目的を設定してそ  
のために共に企画し、運営すること。そして私達にはそれだけではない、日本での財団・  
企業探し、外務省やJICA、NGOの訪問等や、メンバーとの週一回の定例会など、  
日本での活動の中でも考えさせられることは多く、寝込むことも多かった。

ケニアで、日本で、活動を共にする仲間だけでなく、出会った多くの人々から私が学  
んだことの一つは、人は“鏡”であるということだ。自分自身の顔を何もナシには見る  
ことはできないが、鏡となるものがあって初めて自分と出会う。人と出会うことも同じ  
だ。他者と話し、議論し、けんかし、仲直りして、その中から自分を知る。ケニア人と  
話す時、味噌・しょうゆの作り方や、何故日本人は「和をもって尊しとなす」のか、な  
ど多くのことを聞かれたし、自分自身で疑問に思った。自分に染み込んでいる日本を、  
どう説明するか、そのために自分がもっと理解しなければならないことを痛感する。

そしてそれだけではない。人と出会うたびにを見つける自分の癖、性格。指摘されて初  
めて気付く自分自身のこと。人を見ていて学ぶこともある。すこしの思いやりがどれほ  
ど他の人の救いとなるか。自分は他者を気遣ってしているつもりのことが、実は自己満  
足に過ぎないこと。自分の過ちをきちんと謝ることがいかに難しく、大切なことか。

2年間、私は数限りなく多くのことを学ぶことができた。その過程で、夜叉にも菩薩  
にも出会ったし、自分自身くるくると変身した。活動してきてこれまでの経験のどれも  
が成長の糧になると確信している。いや、糧にしてみせるといふ意地があると言った方  
が正しいかもしれない。出会った事からいかに学び、吸収するか。意地も強さも、この  
日本ケニア学生会議で私は習得した。

ナイロビからモンバサへの列車から身を乗り出して  
Leans out from the train that is for Monbasa form Nairobi.

### みなさんなら、どう考えますか？

日本とケニアでの私達の活動にある、行間の悩み、それをここで書こうと思う。それは私達がケニアで悩み、話し合ったが最善策という最善策も見つからなかったことだ。もし読んでくださっている方で何か感じた方がいらしたら、是非とも知恵を拝借したいと思う。

ケニアで大学に行くことのできる人はほんの一握りである。ある程度の教育資金を出すことのできる、またはどうにかして資金を捻出した人で、全国统一テストの成績優秀者である。だから時として彼らのプライドも高い。

メンバーで食事をする時のことだ。共に活動していると、食事をどうするか考えさせられる。食堂にメンバーで入っても、チキンをしっかり食べるケニア側メンバーと、外で果物を買ってすませるケニア側メンバーもいる。ケニア側には一日3食とるメンバーと一食ですませるメンバーがいるということでもある。メンバー全員で食事をしたいと思うが、ケニア側メンバーの中でも経済的な違いがあり、結局一部のメンバーと食事をとることとなる。

私達と交流することで、それぞれの生活とは違うリズムが持ち込まれるということだ。食事を共にとりたいのならば、ケニア側メンバーの食事代を日本側メンバーが負担すればよいのか？しかしケニア側メンバーは、年下の人や女性におごられることで傷ついてしまうことがある。

ではどんな学生でも食事を買えるような食堂に入ればよいのではないか？衛生上、またお手洗い使用等のことを考えると、食堂でもある程度の所に入ることになる。ケニア側メンバーの中にも、ある程度のところの方が安全だから、という意見はあった。もちろん「レストラン」に入ることは非常に稀ではあったが、夜遅い時間のミーティングともなると、開いている店も食事代も限られてくる。

朝早く、夕方または夜まで話し合いや活動のあった私達は、結局「シェア」という形でケニア側メンバーのいるときには食事をとった。つまり、スーパーマーケットで大量

にパン・バター・チーズ・ジャム・果物を購入して、メンバーで分け合うのだ。日本側メンバーが購入し、その場にいたケニア側メンバーと共に食べた。これが私達のとった「ケニア側メンバーと食事をとるための苦肉の策」である。

しかし「シェア」も最後までもたなかった。さすがに朝・昼と毎日のように同じ食事をとっていると飽きてくる。ケニア側メンバーは遠慮したり、飽きて食べなかったり、他で食事を買ったりしていた。

常に日本側がケニア側の食費や交通費を出していると問題が出てくる。あたかも、日本人と交流するとただでどこかに訪問したり食事したりできるようだからだ。そのように勘違いする学生はいなくとも、今後のためにもそれはよくないと思う。

結局、個人個人が自分の食べたいものを食べる、そう結論づけ閉幕した。

どのような方法がよいのか、それは未だに結論はでないが、第3回会議の時にはこれについて話し合った上で渡航して欲しいと思う。また、多くの方から意見を伺って考えていきたい。

「国際交流」とは一言で言っても、それは非常に重い責任がある。食事の問題のように、私達が持ち込む価値観は現地の学生や人々に対して、大きな影響をもたらす。高価な航空券を購入し渡航できる私達の豊かさ、アルバイトで必死に貯めたお金で来た、と言っても学生が職を得ることのできる恵まれた国。それがどれだけ現地の人や学生に影響を与えるか、考えることはあるだろうか。偏った日本のイメージではなく、現実的なありのままの日本の姿を伝えるべく、私達は奮闘しているのだが、「交流」することの責任は忘れてはならないと強く感じた。

## これから

これまで「私達にできる社会還元」というものを考えてきたが、これだ、と思える方法は2年間活動していたにもかかわらず、思い浮かばなかった。報告会、報告書、広報活動で活動報告をするのを前提とし、その上に何をすることができるか。

まだアフリカにある団体で学生を主体としたものが少ないことから見て、私達の活動事態に価値があるものだと思うが、それだけでよいのだろうか？

学術交流や活動を通して得た情報や話し合った結果を、その内容に関連のある活動をしている企業やNGO、政府機関に配る。発行した新聞や報告書を定期的に配信するシステムをつくり、一般会員を募集して「学生」だけでない人々に活動をアピールしていく。長いビジョンで言うと、ケニアだけでなくタンザニア、ウガンダに活動を広げることで、東アフリカの学生のネットワークを作ることとなり、それが東アフリカ社会、果てはアフリカ社会に役立てればすばらしいことだと考えている。

そして、この活動に参加することで自分の専門分野でなくとも、アフリカの等身大の姿を知ること、学生一人一人が成長し、彼らが社会に出たときにそれぞれの方法で経

験を生かすことができる。子供が出来たときに自分の思い出として語ってあげてもいい。広がっていく可能性が無限大の社会還元のひとつは、これなのかもしれない。

これから、この団体は歩みを止めず動くことだろう。そして携わるメンバーが試行錯誤して「社会還元」を考え、実行し、関わった彼らが社会に輩出されていく。その時代、時代にあった方法で柔軟に考え、実行できる団体であって欲しいと同時に、アフリカと日本の関係を今後担っていく世代として、責任と自覚をもった活動をしていくことを切に願う。

最後になったが、本会議においては、学生が主体となり、それを創設者やアドバイザーのサポートによって、前回よりはより学生会議らしい活動ができたと感じている。また、今回の成功は一重に第二回メンバーの団結であった。

第3回での更なる飛躍のために、老婆心ながら言わせてもらいたい。学生の主体性と行動を中心として、それを見守る OG/OB,創設者、アドバイザーという役割分担を明確にするべきである。特に、OG/OB,創設者、アドバイザーには過度な負担や責任が及ぶ場合もあるため、学生各自の責任をしっかりと確認するとともに、バックサイドからの適切なサポートをしてゆくべきである。まだ創設期ということもあり、それぞれの役割線引きが出来ていない今、相互扶助の言葉を履き違え、手を出すことでサポートしていくシステムは、活動を恐ろしく後退させるだけでなく、「学生会議」ではなくなる。少なくとも、この日本ケニア学生会議の学生やサポーターは理解しているとは思っているのだが、今一度考えてほしいところである。

長々と書いてしまったが、ここまでお付き合いくださった皆様に御礼申し上げたい。これだけ書くことのできるくらい濃い活動に2年間携わることができたこと、それによって自分自身の可能性を広げることができたこと、寝込むほど悩んだこと苦しんだこと、何ひとつ後悔していない。

私自身が日本アフリカ間の関係を担う世代として、これまでの経験を最大限に生かしてゆくことをこの場にて誓い、お世話になった皆様への御礼としたい。

拝啓

日本では、紫陽花の美しい季節となってまいりましたが、あなたはいかがお過ごしですか。雨に濡れた紫陽花は思わずはっとするほど色鮮やかです。この時期、ケニア様、あなたにはどんな花が咲いているのでしょうか。

私は、元気に日々過ごしております。けれど、日本での日常が還ってくると、ケニアで過ごした日々が、とても遠いことのように思えてなりません。まるで、夢のできごとのような錯覚に襲われることがあります。けれど、日記を読み返したり、写真を

眺めたりしていると、あの短くて長い日々が思い起こされます。

\*

ナイロビからナクルに向かうバスの中で、グレート・リフト・バレーを見るときもなしに眺めながら、私はとりとめもなくいろいろなことを思っていました。それは、私の子供時代のことだったり、まだ見ぬ未来のことだったり……。その時、ふっと思い出されたのは、日本にいる家族や友人のことでした。そして、自分が彼らから受けてきたものに気づかされました。守られてきたのだ、とそう感じたのです。なぜ、突然そんなふうにしたのか、今でもわかりません。けれど、日本に帰ったら、「ありがとうございます」、といわなくてはいけない気がしたのです。今まで、私が迷惑をかけたたりお世話になったりした人たちに。ごめんなさい、ではなくありがとうございます。

このことに気づいたとき、突然私の中で世界が広がっていくような気がしました。世界は、それまで私が思っていたよりもずっと暖かくて愛しいものだと思えたのです。

\*

私が、あなたで得たものは、形にならないものばかりです。けれど、確かに在るもの。言葉にするとなんだか白々しい気もしますが。ほんの少しでも、これに気づくことができた分、ケニアに行って、あなたの地を踏んでよかったと思っています。

それでは、いつかまたお会いしましょう。

どうかその日まで、お体にお気をつけてお過ごしください。

敬具

ケニア様

2001年6月8日

東京水産大学 海洋環境学科2年 梅川 瑞穂

追伸 : ほんの少しこの場をお借りいたします。

先生へ

お守りありがとうございました。

そして、本当にごめんなさい。先生の当時から変わらぬ優しいお心遣いにいつも感謝しております。先生の優しさに、あの時私はずいぶん救われたのだと今更ながら気づきました。ごめんなさい、そして、本当に本当にありがとうございます。

家族へ

いつもありがとうございます。それから、帰る場所があることをとても嬉しく思いました。

そして、私と関わってきた全ての皆様へ

いつもお世話になっています。

ありがとう。

これからもよろしくお願いします。

モンバサで シュノーケリング 真ん中が梅川  
In Monbasa. Umekawa is three women's middle

## J K S C と共に

東京水産大学 資源育成学科 2年 鳥飼 恵美子

第一回、第二回の2年間、日本ケニア学生会議に参加しているが、昨年ケニア開催に参加したときには、そこで起こるすべての事に、新鮮な驚きを感じた。 ナイロビ：抜けるような青空と強い日差し、お金を乞うストリートチルドレン、立派なビルが立ち並ぶモイ・アベニューとそこにたむろする職業不明の男達、車にしがみつきその天井をバンバンたたくマタツ（乗り合いバス）の兄ちゃん、甘い甘いマンゴー、ぬるい炭酸飲料、

etc…… その貧困の状況を目の当たりにし、衝撃を受けていたにも関わらず、その中にある人々の明るい笑顔やエネルギーに、魅せられていくのを感じた。

第一回本会議開催では、初めての試みであるために、予測不能なできごとが多く、スケジュールの変更や、突然入ったプロジェクトなどがよくあり、毎日が驚きの連続であった。そして、初めて会ったケニア側メンバー。開催期間中になかなか会わない人もいたが、会ったばかりの私達に親切にしてくれ、冗談を言い雰囲気明るくしてくれた人たちもいた。第一回の日本側メンバー達からも、自分とは全く違った境遇、考え方を持つ彼らとの共同生活を通し、より柔軟な考え方ができるようになったような気がする。このすばらしく、密度の濃い一ヶ月間では、たくさんの出来事が私の内面を刺激し、私はケニアについてのこと、国際社会についてのこと、さらには様々な恋愛観や価値観について、いろいろな事を知ったのだった。

それではこの第二回はどうか、これから述べたいと思う。反省点は多々あるものの、分科討論会、各プロジェクト、ミーティング、どれをとっても確実に第一回開催のよりも前進した。今回はケニア側のメンバーが少なく、当初は残念に思っていたが、彼ら一人一人が積極的に活動してくれ、とても頼もしく感じた。日本側メンバー間でも、しっかりとしたチームワークが出来たように思える。これらの成長は、第一回の反省点と、第二回通常期間に周囲から注意された運営体制の欠点を、積極的に改善しようとして努力してきた結果だろう。さらに、それ以上にこの会議の前進を促したものは、会議を運営する学生に他ならない。第一回のメンバーもみんな個性的で才気あふれる魅力的な人たちであったが、第2回のメンバーは、ケニア側、日本側、両方とも純粋な心根を持った人たちだったと思う。学生会議とは、それに参加する学生により、その性質が変わってしまうが、今回はその特性が良い方向に表れたのではないだろうか。私は彼らに出会えたことをとても嬉しく思う。共同生活の中でいろいろな事を教えてもらったけれども、まだまだ彼らからは学んでいきたい事がある。自分の欠点にも気づかされたし、自分自身がもっと成長したいと強く望むようになった。

この会議をここまで育て上げるために、誰がどのような役割をしてきたのか、私には良くわかる。その一つ一つの努力を無駄にしないようにするためにも、次世代へとしっかり受け継がなければならないのだ。残念ながら、諸事情により私は第2回で引退する予定である。しかし、これからも JKSC がどのように成長していくのか陰ながら見守っていきたい。そして、これからも、JKSC には自分たちの役割や両国間の相互理解について、深く考えつつ、嘘偽りの無い提言を社会に出して欲しい。

ジョモケニヤッタ国際空港にて、帰国する日本側メンバーと見送るケニア側メンバー  
(鳥飼は3人の女子の真ん中)

At JomoKenyatta international airport. The Japan-side member who goes back and  
the Kenya side member who sees them off.

## つながり

立教大学コミュニティ福祉学部3年 矢向 瞳

HAKUNA MATATA—この言葉を、何度も大幅に遅刻しトラブルを起こし続けた、運転手のおっちゃんのはじける笑顔とともに思い出す。ケニアでよく使われるこのスワヒリ語の意味は、「NO PROBLEM! (たいしたことないよ!)」。そう、人生なんて「まさかこうなるとは思ってなかったわ」の連続。そんな全てを HAKUNA MATATA!! と言ってのけるおっちゃんのおおらかな事、憎らしい事……。 (あなたは HAKUNA MATATA ですが、

あたしはちっとも HAKUNA MATATA じゃないのよ！！) と何度思った事でしょう。

POLE POLE—「ゆっくり、ゆっくりね」。この言葉も同じ。私の気負ったり、ゆとりがない心を溶かしてくれたことも、イライラさせたこともあった。待ち合わせに2時間も遅れているのに「POLE POLE！！」なんてのんきに言っているケニアの人、待っている人のこと考えないのかしら？と思ったこともあった。

それでもこんなケニアの言葉、その背景にある考え方に日本人の私たちは癒され、自分らしさ、ゆとりを取り戻したのではないかしら。今回のメンバーは、日本にある受験戦争・企業戦士を生み出した“安定して、幸せになる”レールに乗るという価値観に縛られず、のびのびと生きている人たちだったと思うが、日本にいる間、学校の課題や会議開催の準備で、十分に睡眠も取れないほど忙しく疲れ果てていた。そんなみんながケニアに来て、みるみる笑顔を輝かせていったのだ。もちろん楽しいことばかりではなかった。嫌な気分になることも、苦しんだり悩んだりする事も、あった。経済レベルも文化も言葉も大きく違うところで、ノウハウを知らない私たちが、始まったばかりの学生会議を開催する事は大変な事でしたから。(ちなみに、経済レベルの違いで苦しんだ事は、主に食事の事でした。ケニア側メンバーと一日一緒に活動していると、もちろんご飯を食べる時も一緒にいるわけです。しかし、ナイロビ市内で食事をするのはお金がかかるので、一部のケニア側のメンバーは我慢して、外で食事を取らず、夜家に帰ってから食べるのです。日本人は一日3度食べるのが当たり前になっていますからお昼を食べます。そこで様々な事情で食べないケニアのメンバーに気付き、食堂には入らず、スーパーで食パンや果物などみんなで分け合える物を買うなどしてみました。移動の際の交通費も日本人側が払うようにしたりしてみました。しかし、こうするのが良かったのか疑問が残ります。なぜならプライドを傷つけてしまったり、日本人がお金を出すのが当然というような考えを持たれてしまったり、微妙な関係になってしまうからです。同じ活動をする際、経済レベルの違いはつきまとうものですね。食事に関しては、そういう問題に触れる事が多く、心苦しさに美味しく食べれないことがよくありました。) そんな中でも私たちを元気にさせてくれたケニアでの生活。そこには、ケニア側メンバー、オロー先生をはじめケニア側メンバー、旅行会社プラネットサファリの人びとの愛情、一ヶ月の共同生活をした日本人メンバーの支え合い、身の安全が脅かされるほどエネルギッシュなナイロビの空気、空も大地も広いケニアの大自然、前述のスワヒリ語に表現されるような大らかさがそこにはあって、私たちの気づかないうちに乾いているいのちを丸ごと包んでくれた。ゆっくり思考する時間もないほどに、あるいはあっても疲れきって何も考えられない、そんな日本での忙しさを思い起こし、ひどく不自然さを感じた。私は自分が幸せだと心から感じていて、だから幸せだと感じていない人々と一緒に幸せになれるように力を注いで生きていきたいと思っているのだが、日本で日常生活を送っているとつい忙しくなってしまう、自分が実は疲れていて心も身体も休みたかったのだということに、ケニアに来てから気付いたのだ。今の日本の社会は疲れやすい場所なのだと思う。私にとって、ケニアでの生活は本当にパラダイスだった。ケニアでたくさんの幸せをわたしは貰ったのだ。ケニア側メンバー：キロンゾの村で泊めてもらった時、

蛇口をひねれば水が出るという場所ではなかったので、歯磨き、洗顔、お風呂で使う水の量を最小限にしようと挑戦し、自分でも驚くほど日本で使っていた水の量を遥かに下回る水量でやり遂げた時は嬉しかった。大切な水を日本では無駄にしていたことも反省した。ああ、これだけあれば生きていけるんだ。調味料を塩しか使わなくても美味しい野菜のお料理。こんなにシンプルでも美味しく食べられるんだ。言葉を自由に使わなくても、気持ちを伝えようと努力すれば心が通じ合うんだ。言葉の違いがあるからこそ、相手を思いやったり、気持ちを伝えようと心を尽くす。今まで、なんて言葉に頼った人付き合いをしてきたのだろう。生きていく事がどういうことか実感できる、そして必要なものがわかってくる。日本がどれだけ物を過剰に作り出し、消費し、それを当然のこととし更なる快適さを求めているのか、それがどれだけ環境を破壊し、奪っていくのか。そんなに発展しなくても愛情と知恵とで幸せになれるのよって言いたい。物や言葉には頼ってはいない幸せにはなれない。ケニアでの経験から改めて日本と言う社会もたくさん問題を抱えていると実感する。今回、会議を通してケニアの抱える問題について、話を聞き現状を見た。そしてそれらの問題を解決すべく日本がどのように協力しているのかも知った。私はケニアの抱える問題とは質の異なった問題を抱える日本が、ケニアに協力したいと思うのであれば、日本の問題も無視する事なく解決していくべきであると思う。そうしなければケニアが変わることは出来ないし、日本も幸せになれない。例えば、ケニアが食糧不足で、日本が農業開発の援助をしているとする。しかし一方、日本ではますますグルメになって美味しい牛肉を求めて、牛を育てるために木を切ったり、畑をつぶしてどんどん牧場を作る。木がなくなり穀物がなくなる。ケニアで主食のとうもろこしを作っても、先進国の家畜の飼料に輸出され、食べられず飢える状態にあったら、本当の援助と言えるのか。もし援助したいと思うのなら、まず悪影響を与える自分の生活を変える必要がある。人と人がどんなに離れていても気付かないところで影響しあっているように、国と国もつながっているし、影響しあっている。一方通行はありえないし、日本の発展にしても、日本が独自に発展したわけではない。そんなことは無理だ。他国に支えられたり、あるいは他国から搾取したりして発展しているのだ。ケニアについて言えば、始めから貧しかったわけではないし、突然スラムが生まれた訳でもない。明らかに先進国が関わっているのだ。私はその責任を取るくらいの気持ちで協力すべきで、途上国が先進国に追いつけるように助けてあげる的な姿勢では、結局のところどちらにも本当の幸せはやってこない。ケニアは日本の失ったシンプルな豊かさを持っていて、それは日本で暮らす私たちに気づきを与えてくれるし、癒してもしてくれる。しかし、それらの気づきから素直に私たちが生活・生き方・考え方を変えていく事はケニアを含む発展途上国に対する相互理解にもなり、両方の国を良くする力を持っている。こういったことを実感し、遠く離れた国ケニアと日本がつながっていく活動を、日本ケニア学生会議が続けていく事は私の心の底からの望みです。

この会議を通して、本当に多くのことを学ばせていただいた。ケニアのルール、日本のルールの違いからなのか、気持ちにずれが起こったり、誤解が生じる。それは国が違うときのみにかかる問題ではない。自分のルールで動き、他人がそのルールに従うのが

当たり前とされているとき、そういった問題は起こる。ケニアと日本が地球の中で共存するためにも、私が日本でほかの日本人と共存するためにも必要になってくるのは、自分のルールとその他のルールを折り合いをつけたり、相手に理解してもらおうと説明したり、逆に相手の立場に目線を合わせて話を良く聞いたり、自分のルールは果たして正しいのかと吟味したりして、どう受け入れていくかだ。身近な人間関係でおこった問題が、そのルールの違いから起こっていたことに気がついた時、思い出したのはあのケニアでの体験だった。こんな離れた所にも、私の中にケニアは生きていてヒントをくれる。

また、今私は立教大学主催の「水俣キャンプ」のリーダーをやっているのだが、リーダーの経験のない私が今、そんなに気負わずリーダーが出来ているのは、やはり日本ケニア学生会議で、見てきた事、感じてきたことが、私にエッセンスとなってふりかかっているからだ。ノウハウもないなかで、様々なプレッシャーの中、自分を犠牲にすることがあっても、日本ケニア学生会議全体のことを常に見つめ続け、立派に日本側のリーダーをやりとげてくれた大平智江、一人明け方までパソコンに向かって様々な業務をして、影で支えてきた鳥飼恵美子、この去年からの2人の働きは今の私にとって、大切な影響を与えてくれた。何かをやり遂げるには想像以上の働きが影で必要になってくるのだ。私ははじめ、ケニア開催にかかる準備の時間、量に驚いたし、週に一度のやること沢山の長い定例会もきつかった。何でこんなに決め事、話し合うことが多いのかしら・・・そう思っていた。もちろん、私達は慣れてなかったから、もっと楽に出来るところも、無駄もあったと思う。でもノウハウなんて簡単に身につかないのだ。その苦しい中に身を置き、そこで学びとっていくしかないのだ。

私は今回のメンバーがそれぞれ大切な役割を果たしていたと思う。ケニアに行く前、ケニアで、日本に帰ってから、と活躍した時期や内容は違うけれど、だからこそ本会議以外の活動がみんなの手によってなされるべきだと思う。私達の手にもまた新しいメンバーの手がつながって、少しずつ日本ケニア学生会議が柔軟で懐の大きな団体になっていくことを、大きな輪が出来ることを祈っている。

ンゴングヒルの頂上で満面の笑み  
At the top of NGONG HILL,I'm in Paradise

梅川のための手作り誕生会（日本で）曾根田は右から 3 番目  
Birthday party for Umekawa in Japan. Soneda is the 3rd from the right  
杏林大学 医学部 3 年 **曾根田 明子**

日本ケニア学生会議のことを知ったのは、昨年 of 7 月頃だったと思う。メンバーの一人の大平智江にこの学生会議のことを聞き、定例会に何度か足を運んだ。この団体の存在を知った時、いろいろな希望に胸を膨らませわくわくしたのを今でも憶えている。

この団体に参加しようと思った理由には、主に次の三点が挙げられる。まだ若い団体だから自分達のしたいこと（私は現地の医療施設を見学したいと思っていた。）も出来ると言われたこと、ケニアという国の大自然に触れたかったこと、そして日本、ケニアの仲間と春休みの約一ヵ月を作り上げることで自分の中に残るだろう何かに大きな魅力を感じたことである。

結局、私はある事情によりケニアでの第2回日本ケニア学生会議に参加しなかった。ケニア行きを諦めた昨年末から、会議に向けての準備に力が入らずメンバーの助けを十分に出来なかったことはこの場を借りてみんなに謝りたい。

ケニアに行かなかった私が、今このメンバーとともにできることは、彼らがしてきた経験をいろいろ聞き出して自分の中に貯えること、そして報告書・報告会において彼らのしてきた経験が上手く読者・参加者に伝わるよう、ケニアに行っていない立場からの意見を出していくことだろう。日本ケニア学生会議からの発信がスムーズで有意義なものになるよう、みんなと共にこれらに取り組んでいきたいと思っている。

今、私の部屋にはみんながくれたケニアのお土産が並んでいる。これらのケニアのお土産を、来年度自分の手で増やしていけるかどうかはまだ分からない。ただ、ケニアでの会議を終えて日本に戻ってきたメンバーの話は、いかに今回の会議が充実していたかをうかがわせ、私を悩ませている。最後になったが、この学生会議を通じて、学ぶ分野の違う個性的で暖かいメンバーと出会えたことをとても嬉しく思っている。

## 幸せのありかた

東京農業大学応用生物科学部2年 青木 さよ子

ケニアに行き日本とは違った時間の流れの中で少し違った視点から物事を考えました。

そこで私が一番考えたことは“幸せのありかた”についてです。ケニアではいろいろな生き方、考え方をしている人に出会う機会、そういった人と話す機会がありました。日本にいて何一つ不自由のない中、時間に追われた窮屈な生活をしている私にはそれがすごく良い体験となりました。

2泊3日滞在した村での生活は電気も十分に使えず、お風呂の代わりに、たらい一杯の水で体を洗うという生活でした。日本の今の生活からは考えることのできない生活です。そんな村にいたお婆さんは部族の言葉しか話せず、私達とは言葉を理解して会話をすることが全くできませんでした。それでもなぜかコミュニケーションを取ることができました。そのお婆さんは本当に楽しそうによく笑う人でした。100歳をこえるお婆さんはたくさんの家族に囲まれて大きな声で笑っていました。村ではどの人もみんな生き生きして楽しそうだったことを思い出します。

マサイマラに行った時に（ここは会議が終わった後、個人的に行ったのですが）出会った女性も本当に幸せそうでした。

3年前の20歳の時、マサイの文化に興味をもちカナダから訪れたのがきっかけで、そこで出会ったマサイ族の人と結婚したそうです。とってもかわいい8ヶ月の女の子と3人でテント暮らしをしていました。今は一日中子供と一緒に過ごし、子育てに専念しているそうです。だんなさんが仕事をしている旅行会社のキャンプと一緒に暮らしているのです、1日中家族一緒に過ごすことができます。マサイマラでのテント生活はカナダの生活と比べてかなり不便だと思いますが自然に囲まれて、好きな人と一緒にいることができればそんなことは気にならないのだと思います。

このほかにも家をもたず世界各国を転々と旅する老夫婦、自分の仕事に誇りをもって学校を掃除してくれていた人々、プランインターナショナルに訪問した時に自分達の生活を生き生きと話してくれた人など、たくさんの人に出会い、みんなそれぞれが自分なりの幸せを見つけていきているのを感じました。

私も自分の心を開放的にできる場所で、大好きな物、人、事と一緒に過ごせるようになりたいと思います。お金、地位、権力に幸せを見つけるのではなく、緩やかな時間の流れの中、人とのふれあいによって幸せを見つけ、いつも笑っていられるような、そんな人間になりたいと思います。

開催中はトラブルもなく全て順調だったわけではありません。お金の問題、時間の感覚の問題、言葉の問題がケニア側メンバーとの間にも日本側メンバー同士の間にも同じように存在しました。それでも、そういったものを解決しようと話し合うことでお互いを理解することができました。本当にみんないいメンバーで、出会えたことを嬉しく思います。

ケニア側メンバーの一人が教えてくれた言葉です。私はこの言葉がとても好きです。

The time to be happy is now.

The place to be happy is here.

The best way to be happy is to make others happy.

マサイマラで出会った女性とその家族  
The woman who I met in Masaimara and her family

## Jambo ! ケニア

日本女子大学人間社会学部現代社会学科 2 年 中村香織

ケニアから帰ってきて、もう 2 ヶ月が過ぎようとしているなんて信じられない。私の心の中には鮮明にあのケニアでの記憶が残っていて、私の爪には未だにモンバサでつけたヒナ(ヘナ)(注 1)の跡が色濃く残っている。ケニアで JKSC や友達と過ごすのを中心にしていた時と比べ、今は、いろいろなことに追われている毎日だ。たったの 46 日間という短い滞在期間だったので、わかったことよりも何もわからないことの多い状態で帰ってきたが、二度とできない貴重な 46 日間だった。今はその中で私が感じたこと、見たことを大切にしていきたい。

ケニアに行って最初に感じたのは、黒人といっても、本当にたくさんの顔をした人が

いることだ。肌の色をとっても沢山の色があり、顔の特徴、背丈などかなり多種に分かれている。ここが多民族社会なのだと、実感した。友人は普段日本人の白い肌を見慣れているので、黒い肌のケニアの人達を見て、最初、みんながみんな同じ顔をしているように見えたそうだが、徐々に慣れるに連れて、だんだん違った顔に見えるようになり、肌の色よりもそれぞれの顔の特徴が目に残るようになったそう。逆にケニア人の反応という、私の白い肌とストレートな髪が珍しいらしく、髪を触ってきたり、バスの中で後ろの席の人に髪をひっぱられたこともあった。最初空港に降りた時、キラキラ光る太陽とケニア人の鋭い視線に押されて「これから2ヶ月やっていけるのか・・・」と少々不安になったが、帰る頃には、随分溶け込んでいた。会議中に困ったのは、英語も日本語もどちらもだめになってしまったことである。日本メンバーと日本語で話し、ケニアメンバーとは、英語で話さなければいけないのだが、この使い分けが容易にできなかった。英語をずっと話していないと英語が話せなくなるし、そうすると日本語は話せない、頭は常にパニック状態だった。「英語を話す時は、違う頭で考えるから、その時日本語を話すとは混乱する」という私の悩みは、学校で英語、友人とスワヒリ語、家で「部族語」を話すケニアの友人にとっては不思議なことのようにだった。

ケニアの人達と付き合う上で、いくつか気になったことの1つとして「日本人＝お金持ち」という意識がとても強いことだった。ケニアでは、ミニバス・マタツのほとんどが日本からの中古車で、たまに日本語で書かれている車をそのまま使っているものもあった。中には「佐々木ふとん」や「山田工業株式会社」などの名前入りのマタツもあって、意味がわかっていなくても日本語だと「カッコいい」と思って使っているようだ。家庭で日本製品は余り使われていないが、日本製品への信頼性は高く、いいものは日本製だという意識が浸透しているように感じた。そのため、日本は工業化の進んだ豊かな国で、日本人はお金もちであるという意識が強いようだ。友達から、よく「学費がない」「生活が苦しい」や「お金を貸して欲しい」など言われるのはとても困った。確かに日本の物価と比べれば、ケニアの物価は、何分の1も安い。日本は学生でもアルバイトをすれば、ケニアの物価にすればかなりの額を稼ぐことができる。お金をあげることも、友達を助けることになるのかもしれないが、私はなんでもお金を貸したり、あげる事には抵抗を感じた。ケニアに来る費用も簡単に用意できたわけではない、私はあげるほどのお金を持っていなかったし、何より自分が日本人として見られていた請求だからだ。最初はケニアの友人の「お金がない」の言葉にそんなに貧しいのかと思っていたが、長く付き合ってみると、こうした要求も断られるとわかっていて言っているものだったり、お金をあげたりもらったりすることに慣れてきている事がわかってきた。また同時に「お金がない」という友人がスーパーマーケットのナクマツ(注2)に行ったり、洋服など簡単にお金を消費する姿に、本当にお金がないのかと不思議に思った。会議中、ケニアメンバーと日本メンバーの間での食事、交通、宿泊費などお金の問題は常にあって、どう対応していいのかとまどった。こうした問題を「貧しい」とだけ見てしまっただけでは、本当のケニアの姿を見逃してしまう。今回のスケジュールはケニア側が動かなかったためにすべて日本側が決めることになり、結果としてケニア側には多くの出費を迫

る形になり、払えないからその費用を日本側が多く負担することになり、内容的にも訪問ばかりのハードなスケジュールになってしまった。ケニア側メンバーとお互いに話し合う機会、分科会などにもっと重点を置くべきだったと感じる。そうすれば、お金は出せないけれども、違った面でケニア側がカバーするようなことができたのではないかと思う。

第2回の会議後、私は日本メンバーと離れ、何人かの友達の家泊まらせてもらった。突然の訪問にもかかわらず、どの友人も心のこもったもてなしをしてくれて、私は本当にケニアの生活を好きになることが出来た。友達の生活から、家族はもちろんのこと、親戚、友達との付き合いなど、お互いよく助け合う、絆の強さを特に実感した。友人と従兄の数を比較したら、私が11人に対してキクユ系の友人従兄の数は71人（私の7倍近い！）もいて、ケニアは大家族と知っていたが、実際の数字を見て、私には想像もつかないようなものなのだろうと感じた。だから、たくさん友達がいても、濃い人間関係を保っていられるのだろうか。友達になったら、心の奥まで話してくれ、悩みを打ち明けるのにそう時間のかからない、そうしたケニア人の友情が私にはとても気持ちがよかった。

モンバサで私を泊めてくれた友人の両親が、「これで朝ご飯を買いなさい」と、1000KSH（1400円くらい）を私の手に握らせた。私への旅の道中での心配と心遣いの気持ちがしわしわの1000Kshからにじんでいて、この1000KSHはどんなお金よりも大切なもので、今でも私の心の中にしまっている。

ヴィクトリア湖周辺のスバ地域のムフル・ベイ(Muhuru Bay)に行った時、体調を崩してしまったことがあった。その時は、とても気持ち悪くて、普段はもりもり食べている、キャサバウガリやピラティアなどの味の濃い、脂っこいケニア料理は口にすることができなく、軽いさっぱりしたフルーツやヨーグルトなどが食べたかったが、そこにはマンゴーも季節はずれでなくて手に入れることができなかった。そこから2時間半車にかかるミゴリ(注3)という町まで行かないと、ヨーグルトや多種のフルーツ、野菜を手に入れることができなくて、友人が近くの（これも歩いて1時間ほどの）キオスクで買って来てくれたパイナップルと庭になっていたすっぱいオレンジだけを食べた。友人は普段、周辺でものを買わないので、何がどこにあるのかよくわからなかったことも、対応が遅くなったことにつながっていたのかもしれない。ここには病院や薬局も近くになく、伝統的な医療体系における医者、薬(注4)もタンザニアの方に行かないとなく(この地域はすぐ近くにタンザニアとの国境がある)、私は友人の兄が作った現地の薬、草を水に溶かした黒色のとても苦いものを飲んだ(原料はなんだかわからない)。この薬が効いたのか、後で元気になった。この村で病気になって、なんでも揃う都市の便利さを本当に実感してしまった。普段食欲旺盛な人間であるだけに、大変心配をかけてしまったが、ここでの食べ物が喉を通らなくて、風邪の時に食べる蕎麦やお粥などの日本食が無償に恋しくなってしまった。やっぱ、自分は日本人なんだと、食べ物から感じた。病気で寝ていたいのに、その人達はなかなか一人にしてくれなく、隣で話し始めたり、ラジオをつけて聞いていたりするので、ひどい、思いやりがない、寝かせてくれと思って

いたが、後で考えてみると、一人になることはあまりないこの人達にとっての思いやりの対応だったのかもしれない。そこは、病気さえしなければ、ヴィクトリア湖から豊富な水と豊かな土地に恵まれたとてもいい場所なのに、不便さばかりを感じてしまったのはとても残念だった。ミゴリは、モンバサやナイロビなどと違い、観光客は訪れない場所だが、タンザニアの国境近くの町なので、タンザニアから来るバス、行くバスの往来が絶えない町だった。

私は幾度かケニアの人達とつき合う中で、価値観の違いに遭遇した。その時に、受け入れる事と同時に自分でもはっきり主張しなければ相手はわかってくれない。徐々にお互い話し合い、分かり合うことで少しずつ相手のことが見えてきた。滞在中、小さなことまで色々とぶつかりあい、イライラしたこともあったが、逆にそれに対応する面白さがあった。

ケニアは地図からみれば、とても遠い国だが、今私にとってケニアはとても身近な国だ。ケニアの友達から「いつケニアに戻ってくる？」とよく聞かれる。本当に日本がどこにあるのか知っていて言っているのかと思ってしまうが、友達にも日本は身近な国として写っているのかもしれない。

たくさんのケニアの人達、現地に住んでいる日本人の方々に大変お世話になった。今回の滞在中で、人のつながりの大切さを色々な人からおしえてもらった。将来、私もお礼として、同じようなことをしていきたい。

最後に、スワヒリ語のラジオの取材を受ける機会があった時、「**Jambo! Habari gani ? Jina langu ni Kaori. Ninatoka Japani**(こんにちは、お元気ですか?私の名前は香織です。日本から来ました。)」としかスワヒリ語で言えない悔しい思いをした。ナイロビはスワヒリ語を話せなくても、なんとか英語でやっていけるが、モンバサや地方ではやっぱりスワヒリ語が大事。今度ケニアに行く時は、スワヒリ語をマスターして、みんなとスワヒリ語で話したい。それまで、**Tutaonana Kenya.**(またね)

(注 1) ヒナはモンバサの言葉、インドやアラブの地域ではヘナ、またはヘンナと言われる。ミソハギ科の食物で、葉を乾燥粉末したものを古くからインドやイスラム諸国などで薬や染料として用いられてきた。結婚式やおめでたい行事のときに、「ヘンナ」で手足に美しい模様を染め付けてお祝いをする。模様は多種多様で、普通 2 週間くらい水に濡らしても形を保つ。私は爪と手に、赤と黒の色の花模様を書いてもらった。今も残っているくらいなので、私のヘンナは 3 ヶ月もっていることになる。

(注 2) ナクマツトはウチューミと並ぶ、ケニアの大手スーパーマーケット。普通のお店よりも値段は高い。

(注 3) ミゴリは、タンザニアの国境近くの一歩西に位置する町。

(注 4) ケニアでは、西洋医学とは別のローカルな医療がある。ローカルな医療は西洋の医学と比べ、薬の副作用がなく、安いこともあって、地方ではよく利用されている。この場合は呪医とは別のもの。

スバ地域のムフル・ベイで出会った、手に薬草を持った元気なおばあちゃん。  
カメラを向けるとかしこまった。

I met old cheerful woman having a medicinal herb in the Suva area, Muhuru Bay.  
When I turned my camera, she posed stiffly.

## JKSC についての思い

東京水産大学 資源管理学科 2年 菰田 文江

第2回 JKSC への抱負文を未だ書いていない私にとって JKSC とは何か、私が JKSC に対して求めているものは何かを改めて見つめ直した。私が求めていたものは、単にケニアを訪れるだけではなく、日本側メンバーとの交流やケニア側メンバーと共同開催する会議そのものだった。そして、私にとっての JKSC は知らない世界へと踏み出すために開かれた最初の扉だと思う。

ケニアに行く友達が身近に居た事も事実だし、単純にケニアに行ってみたく、異国文化に触れたり、広大なサバンナを見渡したりしてみたいと思っていた。結局、JKSC の理念とはベクトルの方向が若干ずれた状態が入ってしまったが、会議に参加する事によっ

て十分に JKSC の理念を理解しそれに沿っていきたい、と思う。

私は今回、在日連絡先として日本に残ったが、やはりケニアでの本会議に参加出来なかった事は非常に心残りなので、次回の本会議には今まで一緒に活動してきた第2回のメンバーと共に参加できたら、と思う。

次回の本会議に参加するにあたっての目標は、JKSC を通じて自分の将来につなげていける様な経験をしたい。単なる非日常への逃避行とならない様にするためにも、世界の物事に常に関心を抱く様にしたい。

日本で JKSC の活動中の菰田（手前）

It is Komoda in activity for JKSC in Japan(this side)

慶應義塾大学 総合政策学部 4年 川田 慎也

ふとした偶然からこの学生会議に入ることとなり、その日から半年もの月日が経過することとなった。実は学生会議に入ること、そしてアフリカ関係の企画に携わることは初めてではない。大学1・2年次に日中学生会議に関わり、又同時期にアイセックという団体で南部アフリカのジンバブエへの開発協力に関わるスタディー・ツアーを二度に渡り現地の学生とともに企画・実行してきた。そこでの経験や相手国側・日本人メンバーとの関係が今の自分の基礎を形成するに至ったことは言うまでもない。

大学の最終学年として就職活動を終えてからは、改めて学生という自由な立場から諸問題を見つめて行きたいと考え、NGOでインターンをするとともに、国会議員の下でその活動に携わりもしてきた。しかし、学生時代を終わるに当たり、強く感じたのは改めて学生会議の実行委員として、アフリカ問題に携わり、様々な事柄に問題意識を共有する仲間とともに成長し、その過程で自己が抱える悩みの解決の糸口を見出していくた

いと強く考えることとなった。それが出来る場として、日本ケニア学生会議に参加することとなった。

そして、その総括としての報告書を書くに当たり、短くとも様々な意味で充実し、又本当に大変だった半年を省みて出てくる言葉は、ただひとつ“心からありがとう”。

日本での事前準備時においても、ケニアでの開催期間を通じても、自分の未熟さから適切なアイデアを出せないばかりか、十分に会議運営やメンバーのみんなをサポート出来ず、みんなに迷惑ばかりを掛けてきたように思う。しかしそう思う度に、逆に励まされ・支えられてきた。それは、日本人メンバーに限らず、ケニア側メンバーからも同じであった。人間は一人では決して生きてはいけない。ただ全てにおいて不完全な生き物でもない。自分が欠落している部分を互いに補うことにより、一つの個として存在できるようになるのではないだろうか。それを国籍を超えて可能にする集団が学生会議なのだとは強く感じる。わずか半年でも数々の思い出が頭の中を横切っていく。その一つ一つに対して、そうした貴重な機会を作ってきたことにありがとうと心から言いたい。

今のアフリカ諸国は、冷戦構造の終焉に関わらず、その構造に起因しない問題により、政治・経済・社会的に大きな不安定状況に直面している。こうした状況の最終段階として、90年代を通じて数々の内戦が引き起こされることとなっている。国際社会により解決に向けての取り組みが図られつつあるがどれも決定的な解決法となり得ていないのが事実である。ただそうした試みが図られるとともに何よりも大切なのは、これからのアフリカ開発・紛争問題等を担える人材を育成して行くことでないだろうか。もちろん、そうした育成が教育・研究機関において行われることは言うまでもないが、その一つとして日本ケニア学生会議もあるべきではないだろうか。単に教室や研究室に留まることなく、国籍や価値観が異なる仲間たち、特に日本というアフリカ諸国に対して中立的な立場に立てる国の若者とケニアの学生たちが、今の社会を取り巻く問題の本質が何であり、そしてその解決法が何であるのかを共に語り合い、協力し合って実践的に学ぶことが出来る場も大きな役割があるのだと思われる。それとともに、互いに友情を育み、一生涯続く仲間としての友情を形成して行く場でもあってほしいと強く思う。

そして、そこでの仲間たちが様々な世界・分野に羽ばたき、それぞれの立場からアフリカ問題の解決や、二国間関係の友好促進に努めていければと思う。

末筆になったが、改めてこんな未熟な自分にも関わらず、それを見守り支えてくれたメンバー全員に感謝の意を伝えたい。本当にありがとう。

川田によるアイスクリームの値段交渉

Discount negotiation of ice cream with a tough Kenyan seller by Kawada

## “援助”の現場

中央大学 国際政策分科学科 1年 大原京子

“CHANGE THE WORLD” – 高校を卒業する時に友人と誓った言葉だ。私にとってそれは、学校にいけない子供達がいったり、飢餓に苦しむ人がいったり、戦争がたえない地域があるという状況を変えたいという願いだった。そしていつからか興味の対象となる地域はアフリカとなる。だが、人の話や本の知識では十分納得行かず、私は自分の目で確かめたかった。“人はどのような暮らしをしている？” “何を求めている？”そして“本当に必要な援助とは？”。JKSC の理念や方針は共感することも多く、私は“学生会議のメンバー”として渡航することを決めた。ケニアでは NGO や JICA、JBIC 等を訪問し、現場で活躍する様々の日本人に会うことができた。スラムの発展に関わるある女性は、自分の国でいらなくなったものを“援助”という名で途上国にまわし、自分達はまた新しいものを買う、これでは世界の歪みはなくなると話した。私にはそれがショックだった。

自分がよかれと思ってしてきたことが、世界の歪みを大きくしているのだから。

その一方で私は別のスラムやリハビリセンターで、古い洋服でも、いらぬノートでも欲しいという声を聞いた。

私にとってこの対照的な考えは、難しい問題ではあるが「援助」という今までは漠然とした行為を具体的に見つめなおすきっかけとなった。答えはまだでていないが、病気がなおったら（今、体調が悪く入院中）模索していきたい。

Deep Sea（スラム）の子供たちと。大原は真ん中の帽子をかぶっていない女性。

Ohara (middle women with no hat) and children in Deep Sea (slum)

## JKSCへの遺言

創設者 後藤 千枝

2001年3月23日、第2回 JKSC 委員長キロンズから「もし CHIE が死亡したら JKSC は続くのだろうか？」と質問を受けた。第1回・第2回のメンバーのたゆみない努力の賜物で、日本・ケニアに規模は小さくとも太い綱がしっかり結ばれたことと信じている。勿論、私がいなくとも JKSC は継続するに決まっているし、続けていただきたい。何が起こるかわからない人生、生あるうちに JKSC の 100 年後にまで声が届くよう、今日までの JKSC 活動に携わって感じたこと、これまでの人生から体得した私のフィロゾフィー等、伝えたいことを以下に記そうと思う。（まあ、あまりにも不完全な自分に日夜言い聞かせていることでもあるが・・・）そして私から JKSC への遺言とする。

●今後も JKSC 創設の理念・JKSC のアイデンティティを守り続けてほしい。

●JKSC は周知の通り国際協力・国際交流を軸にしている。よりよい社会・世界・未来の

ために Take Action している。自分自身を磨くことが前提ということはいうまでもない。だが、JKSC は「人の為に」Take Action しているわけではない。この点を気をつけていただきたい。人の為と書き、人+為=偽り。人の為ではなく、人に尽くすことは当然だが、同時に人間、地球上にいるうちにどれだけ内部の神性を発揮したかにかかっていると思う。何よりも、自分自身がより愛・光の存在に近づくにつれ、周りに灯火が届き、社会・世界・未来もよくなると私は信じている。10000 億ドルあろうが、世界は何も変わらない。無論物質的には潤うかもしれない。だが、人々の意識・認識が向上・改革されないかぎり、真の意味でよくなれないと思う。物事はバランスが大切。人類は数百年の間、科学技術が十分に発達すれば病気、貧困、苦しみなど地球上の問題はすべて解決されるだろう、これらから逃げ出す道を科学が与えてくれるだろうと信じ込んできた。だが、科学技術、金銭だけでは、問題解決にならないことを我々は歴史から学んだ。科学技術、金銭は良い目的のためにも、悪い目的のためにも利用できるからだ。悟りと知恵、そして何事もバランスを持って誠心誠意を込め使用した時にのみ、技術や金銭が役にたつと思う。我々はバランスを見つけ保たねばならない。愛・光こそ、このバランスの要だと私は確信しているのだが……。そして何事にも愛を注がねば良い結果が生まれないと思う。

●社会還元が前提ならば JKSC では各個人の意見が尊重され実行に移せることが可能。答えが無いのがこの世の答え、というのが私の結論。多数の意見で民主的にとか、そんなのやっぱり変、一人の意見も大切にすべき。だからこそ、組織で動く部分と、組織内で個人で動いていい部分との両立を今後目指してほしい。そのかわり個人で動いた部分も社会還元のみならず、JKSC にも還元していただきたい。ただし、個人でやりたい場合、あらかじめ JKSC メンバーは知る権利もあると思う。OG・OB、JKSC 関係者は、極力協力すべき。JKSC 本会議に際し、すべての面で創設の理念、JKSC のアイデンティティ、ベクトルを軸に、各回が組織として決めたこと各個人が自由に決めたこと、2つを平行してやっていくべき。例をだすと、皆で話し合った結果、JKSC の日本側として今回はケニアに医薬品を持っていかないことに決定したとしよう。だが、個人で持っていきたい人がいれば持っていくべきで本会議中に、全体としての時間、プラス個人で動ける時間を設けてほしい。(例：全体の時間が 3/4 を占めるのなら、残りの 4 分の 1 は個人の時間)つまり個人プレイの時間。従って本会議中だが、個人の活動時間にも JKSC のネットワークなりを最大限に活かし、大学で専攻していることを深くリサーチする時間を持つたり、発表したりなど自分のやりたいことが可能である。本会議中に、皆が皆同じ行動というのは私は賛成しかねる。それこそ私が設立した理念に反する。つまり、私が大学生にこだわる理由は、交流・親善なら中・高校生、いや小学生でも可能だ。だが、より専門性をもった議論となると大学生しかできない。さらに大学生は社会のしがらみがなく、しかも会社益・国益がなく自由な立場で意見を発言可能だからだ。行動にしても同じ事だ。(意見をだしたら行動に移さねばならぬ。それこそ意見をいうことぐらい誰でもできる。)ところが、すべてが JKSC の”組織益”により自分はこう考えているのに

団体としては違うように動いている・・・では変。JKSC は一人ひとりの意見を尊重し、各学生にチャンスと可能性を提供すべきである。

●自分たちは歴史を作っているんだ、という意識を持ちアフリカでは行動すること！！  
(ん？日本でも、どこの国にいても同じか。) 皆一人ひとりが民間外交官でもある。

●JKSC が発展するに従い、より多くの人々が JKSC と関わりをもち、より多くの活動資金等が JKSC で運用されるかもしれない。間違っても、心を腐らせてはいけない。不正をしてはいけない。不 + 正 = 歪み。人間、心が腐り、歪んだら最後。また、お金は、使い方によっても、使う人によっても、汚くも、きれいにもなる。人間、組織はお金を持つと、次は、人、社会をコントロールしたくなるものだ。独裁者のようになる傾向がある。気をつけるように。よいエネルギーに囲まれるよう、自ら向上したいものだ。

●JKSC “アドバイザー” として選出される人物、すなわち JKSC の学生をアドバイスする立場にある人は、いかなる理由があっても、カルト／新興宗教・ネットワークビジネス・政治に関わっているのならご遠慮願いたい。何がなんでも、どのようにしてでも、あくまでも JKSC は非営利・非宗教・非政治であることを貫いてほしい。

●JKSC のアドバイザーを選出する際、人格者を選んでほしい。いくら学歴があろうが、知識があろうが、富や名声があろうが、仕事に対してプロ意識があろうが、そんなこと何一つ重要でない。そんなもの、体についた垢のようなものだ。本質的な部分、人間としての核の部分でなく、技(わざ)に惑わされないこと。JKSC のことを考え、よりよい社会・世界・未来を築きあげることに関心があると同時に、自らも人間として、また、魂として成長する意志があり、努力している人物ということが基本だ。心が PURE(純粹)であることはいうまでもない。さらに、老若男女問わず、学生、子ども、社会的な立場にいる人、ストリートチルドレンに対しても、どんな人に対しても、同じように丁寧に接し、弱者に腰が低く、きちんと「ありがとうございました」「ごめんなさい」と言える人物であることも忘れてはいけない。人間の評価は魂の発達度を基準にすべきで、JKSC アドバイザーにしてもしかり。

●人間は地球上に、学びにきていると思う。LEARN (ラーン・学び) であり EARN (アーン・稼ぎ) ではない。そして我々は地上での体験を通し、REMEMBER (リメンバー・思い出す) 思い出しにきている。地球上に生を受けた時、完璧なままの魂だったと思うが、肉体を纏い、また社会の偏った、間違った、余分な情報や価値観などで魂の周りに厚い雲がかかってしまったと思われる。それを取り除かねばならない。完璧な姿の魂はすべてを記憶している。他人が何を言おうが自分の心の奥底、心の声に従うこと。そして完璧な魂は、その存在が愛・光から成ることも覚えているはず。

●物事を「損・得」で考えるほど卑しいものはないと思う。(金銭に限らず、特に、嫌な目にあうと、損した気分になったり、相手から損した分、何かで取り返そうと思う人！！)人間の世界で、あえて言うならば、自分が損したと思うなら影で得をした人がいるのだから喜ぶべき。自分が得をしたと思うのなら影で代わりに損をしている人がいるのだから嘆くべき。ともかく、根本は、損も得もなし、愛情は減るものでもない、惜しまずに注いでほしい。あと、値切るのもほどほどに。商売している人も生活していかねばならないし、養わねばならない家族があることも忘れずに。

●同じ人間の労力なのに、国によって、肌の色によって労働賃金が異なるのがこの世の現状。とにかく人から搾取しないように。常に、自分の生活が安い労働力の人の上で成り立っていることを忘れぬよう。様々な形で彼らに還元すべきだ。

●生きることに感謝、とにかくすべてに感謝すること。

●人間の作った銀行への貯金よりも、私は宇宙銀行への目にみえない形での貯金に関心がある。良い行いをして心の貯金箱を増やしたいものだ。自分にとっては良くても相手・社会にとっては迷惑かもしれない。相手が何を望んでいるか耳を傾けること。

●決して自分と他人を比べることは避けてほしい。私は比較とか、競争という言葉に全く関心がない。JKSCに各自がどれだけ貢献したか、量は関係ない。小さなことでも愛情を込めてやってくれればそれでいい。また、同じ夢に向かい、一つ、ひとつの石を積み上げ一本の道を作っているのだから、目的地に達するまでに誰が何個の石を積もうが関係ないのだ。自分ができる時に、できる範囲で石を積みあげばいい。今日は3つ、疲れたと思うときは0個、休憩すればいい、体力ある仲間が代わりに3つ、いや、それ以上積み重ねてくれるだろう。心配御無用。疲れた時、家族はじめ大切な用事がある時、決して無理をしないこと。満足いくまで休憩すること。JKSCは決してメンバーから逃げていきはしないので、戻りたい時に戻ってこればいい。せつかくの行為も無理をして自己犠牲にならぬよう。たった一つの石でもありがたい。石の数で計り、人を責めないこと。一つかもしれないが、五つ積まれた石より重いかもしれないのだから。

●何も大きいことをする必要はまったく無い。とにかく小さいことを確実に大きい愛情を込めてやるのみ。

●責任・義務のみでJKSCに携わるのなら、やらない方がいいのかも。Have to とか Shoud (~しなければならない) と、感じてしまうのなら JKSC に関わらず物事はしない方がいいと思う。Want (~したい) という気持ちがあれば続かないし、何より無理に物事すると自己犠牲につながってしまうし、後悔することになるかもしれない。しわ寄せがくる前に対処してほしい。

●よく、「～が出来ない」という声を聞く。Can 't (できない) と Do not want (したくない) では異なる。その辺、よく心に聞いてもらいたい。

●今後、JKSC が、JAPAN-EAST AFRICA、JAPAN-AFRICA と拡大していても、JKSC は、その中の先輩格の統括組織として中心になり活動してほしい。

●否定的な考えを持つのはやめ、何事にも前向きに、ポジティブに。

●あまり人の個人的な癖とか性格を指摘・批判しないように。あばたもえくぼ。人と交わると不快な思いをすることもある。それは自分の心が生み出したもの。不快な思いをするのは相手を通し自分を鏡で見ているから。人の欠点 (本当は欠点ではないのだが) と自分の目に映るものは、実は自分の欠点。自分自身を受け入れることのできない欠点にすぎない。

●綿密に計画を立てることは結構だが、やってみたこともないことをあれこれ仮定したり想像したりしすぎて新しい一步を踏み出すのに躊躇するのではなく、仮定なんてしたところで 10000 通り以上にもなるし、やってみなければ結果はでないのだし、とにかく一步をためらわず踏む出すこと。この世に失敗はない。失敗と思えることがあれば、単に成功への通過点であり、ちっとも BIG DEAL, 大袈裟なことでない。おかしいな、と思えばそこで軌道修正をすれば良し。とにかく、完璧なまでの宇宙の法則に JKSC を委ねること。この世に不安・恐怖も無し。人間の心がつくりだした幻想にすぎない。これだけははっきり言うておこう。私は断言する。動機が純粋であれば、決して危害を被ることもなければ人間の定義する失敗というものもないということ。心を常に研ぎ澄ますように。宇宙をも作り出し、宇宙をも動かす目に見えない無窮の力に身をまかせること、JKSC をまかせること。決して誤ることのない力を信じることに尽きる。

●Things happen for reasons, things happen for the best, things always work out for the best.

物事は理由があって起こる。物事はベスト、最善の状態になるために起こる。物事は常にベストな形に解決する。物事の過程・通過点で、とにかくあせらぬよう。

●THINK (頭で考える) より FEEL (心で感じる) ことを大切に。頭で考えたことか、心で感じたことか見極めること。

●一度きりの出会いでも、愛情を込めて。どんな境遇にいても、一瞬たりと愛を注がれたことのある人は、その愛を思い出し、逆境を乗り切ることが可能だと思う。

●人生に始まりもなく終わりもない・・・と、私は考える。肉体は滅びても魂は永遠、死は新しい世界への旅立ちで、嘆き悲しむのではなく、祝福すべきもの、同時に、愛・光の世界へ帰ることができる至福に満ちた瞬間だと思う。私の葬儀に参列する暇があれば、一秒でも多く、よりよい社会・世界・未来のためにTAKE ACTIONしていほしい。どうしても・・・というのなら、定例会の際にでもメンバーと、シャンパンで私の旅立ちを祝福してくださいな。それで充分です。

## CHIE GOTO's will to JKSC.

Founder of JKSC CHIE GOTO

One day during the 2nd Japan-Kenya Student Conference held last spring, I was asked the following question by the conference chair man Kilonzo: "If Chie were to die suddenly, then will JKSC continue?" Although the scope of JKSC is still small, the students in the first and second conferences forged a strong bond between Japan and Kenya. This leads me to believe that even in my absence, JKSC will continue, and I most certainly do want it to continue.

While I am still alive in a life that is full of uncertainties, I would like to bequeath to you the core principles of the conference that I hope will remain constant to the 100th JKSC. These principles come from the deep experiences from my participation in JKSC so far, and my philosophies that I have inculcated over the course of my life.

1. Preserve the founding mission and identity of JKSC.

2. International cooperation and exchange is at the core of JKSC. "Take Action" to better our society, the world, and our future. It goes without saying that "Take Action" in this sense also means purifying your hearts.

Even with \$1 trillion, nothing about this world will change. Some may merely profit from pouring large sums of money at the expense of others. As long as

there isn't a revolutionary change in people's conscience and awareness, true lasting change for the better will not happen.

In all things, maintaining a balance is important. For hundreds of years, the human race has believed that developments in scientific technology will cure diseases, eliminate poverty, eradicate suffering, and show us the way out of all the problems that afflict us. However, we also must acknowledge from history that only technology and money does not solve problems. Both can be used not only with good intentions, but also with bad intentions as well. I believe that they play a useful role only if people have the proper understanding, wisdom, and sincerity in applying them. Good outcomes are achieved from people use them in the spirit of love and the divine.

3. In JKSC, every individual's opinion is valid and must be respected. The conference is organized so that the students work together as a group, but each student also has the freedom of self-expression, free-thinking, and self-initiated action. University students are completely detached from special interest groups, thus in order to maximize what JKSC participants as a whole can achieve, preserving the duality of group action and individual initiatives is necessary.

4. Take part in JKSC with the mindset that you are making history. Each one of you is a cultural ambassador of your own country.

5. As JKSC grows, the conference will be awash with more funds from a number of organizations. Don't let money cloud your judgement and make you lose sight of the conference's mission and identity. Understand the clear distinction between good and bad uses of money. Dictatorial tendencies (i.e. desire to control people and society) may develop if funds are misused. Surround yourself with good influences and positive energy. Keep JKSC a pure organization, free from attachments to any business, government, or religious entities.

6. When selecting advisors for JKSC, find ones whose true character is strong and intentions pure. High level of education, special knowledge, wealth, fame • ll these are unimportant. What is necessary is the one's strong conviction in their ability to bring positive change to our society, our world, and our future. One must be humble, sincere, and able to interact with people of all backgrounds.

7. We are here on Earth to LEARN, not EARN. We were born pure, but our judgement has become clouded with misguided messages. We must recall what it means to be pure. Rather than always obey other people, listen to your heart.

8. Matters in life should not be judged in terms of gain or loss. One's loss is another's gain. Take action with an outpouring of love, not with the objective to profit or put another at a loss.

9. For the same labor, wages differ according to people's race and ethnicity. Don't be exploited because of who you are. Moreover, don't forget that your standard of living is supported by somebody else's cheap labor.

10. Be grateful for everything in life. Listen attentively to other people's needs and wishes.

11. Don't compare yourself to other people. I have no interest in comparison or competition between people. JKSC does not judge individuals based on the size of one's deed. Even if a deed is small, it is a good deed as long as it is done with love and a sincere desire to bring about positive change. A small deed may often require more efforts than a big one does.

12. Participate in the conference because you want to, not because you have to.

13. Think positively and in a forward-looking manner.

14. Don't criticize other people's unique characteristics. Respect everyone's individuality. Understand that you are unique, too.

15. Explore new ideas and activities with full enthusiasm and without hesitation. Don't fear failure. There is much to be learned from making mistakes. Things happen for reasons, things happen for the best, and things always work out for the best.

16. Even as JKSC expands to Japan-East Africa and Japan-Africa, I want the original JKSC to remain in at the head of the whole organisation and to be in control of all operations."

17. I believe that life has neither a beginning nor an end. Bodies disintegrate, but the soul lasts forever. Death is a departure into a new world. It is something to celebrate rather than lament. It is a moment where one returns to the world filled with light and love. Upon my death, all I'd ask of you is to toast my departure to a better place. That is sufficient.

## **A dream realized ?**

Egerton University Economics and sociology **Lameck Bijumo**

On the 26<sup>th</sup> of 2001, we were all set to start our second conference which was scheduled for one month. Yes, everything went as planned. Our visits to different organizations like Plan International, UNEP, children's homes, slum areas, schools and above sections meetings on topical issues among members equipped us with enough knowledge to ensure that our dream is realized.

Then it came the last week, the closing ceremony week, the week that some members had to leave and they actually did! The emotional moment that engulfed the Jomo Kenyatta International airport is unexplainable. As one member put it, she felt as if she came the other day and she had to leave that day. No one believed that one month was over. This can only signify one thing: the strong "bond" that has been established among the members. The bond that makes us JKSC, the bond without which our existence is at stake, the bond which is our vision: our constitution. Indeed, this is the most essential ingredient towards realization of our vision of a better society, better world and better future. A vision which can only be realized when all of us as members feel so much attached to the bond that without the next person nothing will move because it is with that next person together, we make the society of our dream.

I'm seeing our vision so real and approaching so fast! I'm seeing the society of our dream here with us! The JKSC 2<sup>nd</sup> conference has provided us with a window through which we can see and feel the society of our dream. As the founder had once put it, it is believed that oil and vinegar do not easily mix \*but on shaking these two elements thoroughly plus a few spices, it produces a very tasty salad dressing. We as JKSC members have integrated so well that only tears could explain this when we had to say "kwa heri" to our Japanese counterparts as they left the Jomo Kenyatta International Airport-Nairobi for Japan on completion of our 2<sup>nd</sup> conference. I'm sure the mark we left in all the places we went shall live for ever to be admired.

Long live JKSC as we continue taking action together.

## 夢は実現しましたか?

エガトン大学 3年経済・社会学専攻 **ラメック・ビジュモ**

2001年2月26日、これから始まる1ヶ月にわたる第二回の会議をはじめの準備はすべて整いました。そしてまさにすべてが計画どおりに進んでいったのです。

会議開催期間中はプランインターナショナル、UNEP、子供の家（エイズ孤児院）、スラム地区、学校のような様々な場所を訪れました。また、メンバー間の現在関心の高まっている問題を話し合ったセクションミーティングを通じ、私たちは夢を実現するために十分な知識を得ることができました。

そして、最後の週になりました。その週は開会式があり、また何人かのメンバーが帰ってしまう週です。日本人メンバーは本当に帰ってしまうのです。ジョモ・ケニヤッタ国際空港で悲しみに圧倒された、情緒的な瞬間は説明できません。1人のメンバーが言ったように、まるで彼女達は来たその日に去ってしまうかのように、感じました。1ヶ月が過ぎたとは誰も信じることができませんでした。これはきっと私たちの中に深い絆が生まれていたからでしょう。私たち日本ケニア学生会議を作り上げている絆、私たちの存在が危機にさらされることのない絆、私たちの夢である絆が私たちの会議を作り上げているのです。よりよい社会、よりよい世界、よりよい未来を作ろうという私たちの計画においてきっと絆は最も必要不可欠で大切にしなければならないものです。

理想の社会作りは後に続くメンバーと共にやるものなので、第3回のメンバーがいなければ何も始まらないし、その深い絆を私達メンバーが感じた時のみその夢は実現しま

す。

私は、この夢をしっかりと見つめています。そして急速にその夢に近付いています。私は、私たちの理想である社会をここでみんなで一緒に見つめています。第2回の日本ケニア学生会議は、私たちが夢の社会を見て感じるができる窓を与えてくれました。

創立者が以前言ったように、油と酢は容易に混合しないと信じられています。しかし、少しの香辛料を加えてこれらの2つの要素を頑張って振り混ぜればそれはとってもおいしいサラダドレッシングになります。

私たち日本ケニア学生会議のメンバーは一つにまとめることができました。このことは第二回の会議が終わって日本人のメンバーがジョモケニアッタ国際空港を去るときに「さよなら」と言わなければならなかったときに流れた涙からくみ取ることができるでしょう。

私達が行ってきたことは称賛されながら永遠に残っていくと私は強く信じています。共に行動を起こしながら日本ケニア学生会議がいつまでも続きますように。

(和訳 青木さよ子)

USIU-A Major of International Relations **Jackie Anyanzwa**

I had the chance to be more active this year than last year in JKSC. I have no regrets except that the time was short. I hope that next year the students will spend more time in order for them to attain the rich culture and heritage that Kenya has to offer and the same for the Kenyan students.

I had the chance of making new friends, visiting the different NGO'S in Kenya and being part of the cultural exchange between Kenya and Japan. For some this would be a once in a lifetime opportunity. I was more impressed

with the students because they were willing to learn more and to mix with the locals. We visited different NGO's one of them being Plan International. I feel that this was a great experience that I will cherish for the rest of my days.

エガトン大学で 真ん中がジャッキー  
In University of Egeton. Jackie is middle  
USIU-A 国際関係学専攻 ジャッキー・アニャンゾワ

今年度は昨年と比べ JKSC で活動的に過す事ができた。唯一後悔が残るとすれば、開催期間が短かったことだろうか。来年度のメンバー達は、ケニアが受け継いでいくべき豊かな文化と伝統に触れるためにより長い時間を過せるといいと思う。また、ケニア側学生にも同じ様な体験がおこることを願っている。

私は今回、新しい友達を作り、さまざまな NGO を訪問し、またケニアと日本の文化交流の一端に関わることができた。これらのなかには人生で一回限りの機会であったものもあるだろう。メンバーがより多くのことを学びとろうとし、地元の人々と交わろうとしている姿は深く心に残っている。私たちはさまざまな NGO を訪問した。その中の一つにプランインターナショナルがある。これは、私の今後の生活において大切にしていすべき貴重な経験となった。(和訳 曾根田明子)

## **How JKSC2001 SUCCEEDED: Confessions of a changed life**

Nairobi University Major of Economics and Linguistics Ben Masese

“Most of us cry that they don't have shoes, not knowing that others have no

legs. Some of us cry that they didn't have a particular food yet others have never set a decent meal on a table. Others are worried about the future, yet others have no future". Life is such a fuss. This is the message the JKSC Conference instilled in me. I have come to grips with the realities of life. Richness against poverty, suffering amidst happiness.

A home branded 'NEW LIFE HOME' showed me the crisis of AIDS Orphans. The slums, "THE DEEP SEA SLUM" is a 'small hell' in Nairobi. Discussing HIV/AIDS taught me how the plague has swallowed our country and is a modern cause to the African Sub-saharan region where 17 million lives have been lost. Besides this, I now know why soon and very soon we shall have complete dark cities and no life if pollution and environmental degradation is not checked in Kenya.

I can now prove that the world is a global village where everyone is the same regardless of creed, race, colour, religion, language and culture. A myriad of college students both from Kenya and Japan colleges made friends regardless of their differences. There was an automatic unity among JKSC members, everyone being too familiar with the other, like old friends who have met before. In JKSC I learnt how to cross over the diversities among people so as to make friends and long to keep the friends forever.

"Taking action together" the wise call by the JKSC slogan to humanity inspires the thoughts and passion of its members. In JKSC every member is burning with a desire to do something to make man's life better in this universe.

At the opening ceremony, all the brilliant elites in attendance applauded the brain-child behind JKSC. Chie Goto, who is the think-tank behind the formation and operation of JKSC, proved a heroin both to the Japanese side and the Kenyan side. There was an expertise show at the ceremony. The tantalizing and exciting performance from both the Kenyan side and Japanese side. Thereafter, a tedious day was crowned off by a sumptuous meal and a friendly dance all night.

Serious brainwork was exhibited by the visits at JICA headquarters, Japanese Embassy, World Vision and KEMRI Offices. Very important sessional discussions were held by the various groups on HIV/AIDS, Development and Happiness teams. These mainly involved comparative discussions on the situation in Kenya and Japan. These discussions were concluded by the presentations by various groups in a glamorous yet painful closing ceremony. Here, policy recommendations we discussed on the various topics.

The 'AIDS Team' to which I belonged, had a first hand experience with the scourge. Our visit and talk with people living with AIDS touched our hearts to the JKSC members have learnt their role as the twenty-first century leaders. The era of sitting back and watching as things go wrong is long gone. This has made JKSC

to have a master plan to extend its tentacles to East Africa and even the whole world. Chie Goto, the founder of JKSC confessed in tears, “ I loved Kenya the very first time I came here and I wanted to connect my country (Japan) to Kenya”.

She remains an inspiration to JKSC.

point of tears. The AIDS team vowed to disseminate information on AIDS to the whole world so that action could be taken by all towards the pandemic.

Chie talks to the young members with a spiritual guidance “Guys, just know one thing, the way we are is a gift from God but what we become is a gift from us to God. We should not judge people by their race, color, culture and language but by what they are able to do to improve human life on earth. I know JKSC shall grow to the level of East Africa, African and Entire World”.

At least, my life has changed more so the way I perceive the world.

## どのように 2001 年の JKSC 会議が私の人生をかえたか。

ナイロビ大学経済学・言語学専攻 ベン・マッセッセ

靴がないといって泣く人もれば、靴を履く足そのものがない人もいる。また、たった一度の食事が食べられないからといって叫ぶ人もいれば、生まれて一度も満足に食べたことがない人もいる。将来のことについて悩む人もいれば、その将来自体がない人もいる。人生とは他人のことを考えずにつまらないことに対して騒ぎ立てるものである。これが JKSC を通じて私が学んだことだ。そして富むものもいれば貧しいものもいること、幸せがあると同時に苦しみがあることといった事実を知らされた。NEW LIFE HOME というエイズ孤児院に行ったとき私はエイズ孤児の危機的状況を知り、DEEP SEA というスラムに行ったときエイズについて話しケニヤでエイズがどの程度深刻な問題になっているのか、また 17 万人もの人々をエイズで亡くしているサハラ以南にとってエイズがどれほどの影響力をもっているのかを身をもって感じた。これに加えなぜ私たちがまもなく暗黒の都市に住むようになることに気付き、すぐにも環境問題についても考える必要性があると感じた。

私の住むこの世界は人種、宗教、言語、文化にかかわらず人間を平等に扱う地球村だと証明できたと思う。JKSC で多くのケニヤの大学生と日本の大学生が旧友のようにしているのを見て、私はどのように人々の相違をこえて友達をつくるのか、又その友達関係をどのように続けていくのかを学んだ。

「taking action together」これが JKSC の掲げるスローガンであり、これがメンバ

一の軸となる考えである。JKSC のメンバーは皆この世界がもっとより住みやすくなるように何か行動を起こそうと切望している。

開会式では参加していただいた社会的地位の高い人々が JKSC のメンバーを「独創的な発想を持つ子」として誉めてくださった。JKSC の創設者である後藤千枝は日本・ケニアの両サイドの英雄である。また開会式で日本側・ケニア側からそれぞれダンス・歌等の出し物をし楽しみさらには日本の料理をはじめ美味しい食事が出され夜中ダンスをして楽しんだ。

JICA オフィス、日本大使館、ケムリ等を訪れることで刺激され、それぞれの分科会は濃いディスカッションをくりひろげることができた。どこの分科会でもケニアと日本の現状について焦点をおき話し合いをし、クロージングセレモニーで代表者によって他の分科会メンバーに話し合ったこと、これからの考え等を伝えた。

私はこの会議でエイズ班に所属し、エイズの人々を訪れ話を聞くことで、現実を知り心を動かされた。そしてエイズ班はエイズについての行動を起こすためにエイズについての情報を全世界へと発信させようとしている。

JKSC のメンバーは 21 世紀のリーダーとして自分たちが何をすべきかを学んだ。ただ物事が悪いほうに進んでいるのを目の当たりにして何もしないでいる時代は終わった。このことは JKSC の活動を東アフリカさらには全世界へと広げていくことを促している。JKSC の創設者である後藤千枝は「はじめて私がケニアの地を踏んだときこの国が好きになったの。だから日本とケニアの掛け橋をしたいと思ったの。」と述べた。

又、千枝は JKSC のメンバーに以下のように述べている。「たった一つだけ認識していればいい。私たちが今あるのは神のおかげであるけれども、私たちがやること、やっていることは私たちから神への贈り物である。人種、文化、言語によって人々を判断するのではなく地球上に住む人々の生活を改善するためにその人が何をしているか、何ができるのかで判断しなさい。私は JKSC が東アフリカにとどまらずアフリカ全土へ、さらには全世界へと広がっていくことを願っている。」少なくとも私の人生は世界を受け入れるほうへと変化した。（和訳 吉田恭子）

### 第3回に向けて

日本ケニア学生会議 第2回メンバー 一同

文責 梅川瑞穂

——最初は、たとえ小さな流れでも、一つの意志、一人の意志が他の人を巻き込みやがて大きな流れになっていく——私達は、この事を『言葉』だけでなく『経験』として学んだ。そしてこの事実は、ケニアで出会った人々に話を伺ったり、JKSCのメンバーみんなと共に活動したりしていく中で、驚きと共に大きな喜びを生んだ。JKSCの定例会一つをとってもそうである。日を追うごと、回を重ねる度に、第2回本会議に向けてみんなの意識が高まっていった。誰かが何か意見を出し、それをみんなで議論し、新たに何か決めていく。そうした積み重ねの一つ一つが日本ケニア学生会議第2回本会議を作り上げていったのだ。みんなの気持ちが一つの方向に向かい、お互いに刺激あって、大きな力が生まれた。そして、この力が、TAKE ACTIONするときの大きな力になるということを実感した。

しかし、今回の本会議は日本側の立てた計画を中心にして動いてしまった感が否めない。本来ならば、日本側とケニア側がもっと協力して共同で作りに上げていかなければならないのにそれが出来なかったのだ。連絡を取り合うことが難しかったせいもある。メールで連絡を取り合おうとしたが、上手くいかなかった。インターネットの普及は、ケニアと日本では、まだまだ差があるようだ。だが、会議開催中意外にも、普段から連絡を取り合い、日本・ケニアのメンバーの双方が協力し合いながら会議を運営していくことが大切であろう。そうすることで、お互いのメンバーの事を良く知り、開会後の活動もスムーズにいくのではないだろうか。お互いを良く知り信頼関係

が生まれれば、誤解が生じることも減るだろう。日本とケニアの間にあるこの距離をいかにして埋めていくかが今後の大きな課題の一つとなってくる。

また、一年間の活動を通じて学んだケニアの実情や、ケニアにおける様々な NGO・政府組織のあり方などを踏まえて、JKSC の活動に今後どのようにそれを反映させていくかが大きな課題である。そして、JKSC の活動を、どのような形で社会還元していくか、このネットワークを作っていくことも大切であろう。

第3期に残らないメンバーも、OB・OG の立場から次期メンバーをサポートしていきたいと考えている。JKSC のメンバーとして学んだことを、新たなメンバーに伝えていく責任があると私たちは思う。1 回ごとに活動が切れてしまわないように、何らかの形で、今後も JKSC に関わっていくことが大切であろう。例えば、Deep Sea の問題。一朝一夕に答えの出るものではない。しかし、メンバーは毎年変わってゆく。この溝を埋める必要があるのだ。そしてまた、JKSC に参加したことで学んだことを、それぞれ、違う分野で活かしていきたいと考えている。



## 謝辞

第2回日本ケニア学生会議本会議開催は、多くの方のご支援により実現致しました。学生として精一杯努力している過程で、順調に事が進まず道を迷う時、様々な方法でのご助言を頂き、また手を差し伸べて頂きました。そして、この紙面上に書ききれない多くの方々も、力強く支えて下さいました。

この場を持って、お世話になりました全ての方々に御礼申し上げます。

第2回日本ケニア学生会議実行委員一同

後援 在日ケニア大使館

助成 国際交流基金

協力 外務省 中東アフリカ局アフリカ第2課  
在ケニア日本大使館国連代表部  
国際交流基金

在ケニア日本大使館 一等書記官  
文化担当  
領事担当

国連環境計画 ナイロビ本部

The Deputy Executive Director

小林様

謝花様

大森 寛様

久保田 徹様

奥田様

池田様

二田様

Mr. Shafqat Kakakhel

Mr.Masa Nagai

国際協力事業団	東京事務所	Mr.S.Ananthakrishnan
		Mr.Therodore E.A.Oben
		Ms. Carol Andere
		森原 克樹様
		篠崎 泰昌様
		牧野 耕司様
	ナイロビ事務所	
	所長	橋本 栄治様
		仁田 知樹様
		高橋 なおき様
		飯田 護様
JICA 専門家(ケニア中央医学研究所)		小林 伸好様
青年海外協力隊(虹鱒養殖)		杉本様
Can Do(アフリカ地域開発市民の会)		國枝 信宏様
		永岡 宏昌様
共同通信社ナイロビ支局長		大野 圭一郎様
朝日新聞社ナイロビ支局長		江木 慎吾様
JBIC(国際協力銀行)	総務部広報課	高村 多聞様
	ナイロビ駐在員事務所主席駐在員	澤井 克紀様
		MS.PUI CARR
		斎藤 光範様
フォスタープラン(Plan International)		
国際援助部アフリカチームリーダー		池原 知見様
Program unit manager		Ms.Margaret njoki Njoroge
Animal Husbandry Advisor		Dr.Mathairo K.Muriuki
R Lead Habitat advisor		Mr.Eng.Njoroge
United States International University- Africa		
Vice Chancellor		Dr.Freida A.Brown
The Deputy Vice Chancellor,Student Affairs		Ms.Rita J.Asunda
Executive Assistant to the Vice Chancellor and		
Head of Alumni Affairs Office		Mrs. Keziah Nyamweya
Nairobi University Dean of student		Pro. Mavuti
ケニア共和国外務省		Mr. B.Munzala
在ケニアウガンダ大使館		Mr. John L. Mugerwa
在ケニアタンザニア大使館		Mr. Stanislaus E. S. Mongella
旅行会社 Planet Safari		Mr. Geroge Njaaga
		Mrs. Lucy W.Njaaga
ネイチャーワールド(株)		杉本様

日産株式会社  
伊藤忠商事株式会社

ケニア事務所

学生会議連絡協議会（S C N）  
ナイロビ在住

ケニアで日本食を届けてくださった  
英文校正を担当してくださった

スワヒリ語勉強会に協力してくださった

日本文化紹介の踊りの一つ、アイヌの踊りをご指導くださった 大野様  
ケニアでの人形劇のパフォーマンスに資材提供、また、ビデオを通して  
指導して下さった牛田玲子様・平野時子様はじめとする

名古屋の人形劇サークル「えぷろんろん」のメンバーの方々  
学生会議アドバイザー

飛行機の中でお人形を寄付してくださった

海老原様  
中山様  
鳥海様

早川 千晶様  
小林 由紀夫様  
木賊 薫様

Mr. Jeff Gray

Mr. Malik Rashid

Mr. Isaac Maluki

石津 達也様

矢崎笑子様

## 日本ケニア学生会議 規約

本規約は、日本ケニア学生会議の日本・ケニア両国内における組織と運営について定めるものである。

### 一章 総則

#### 第一条 名称

当学生会議は正式名称を「日本ケニア学生会議—Japan-Kenya Student Conference」とする。以下、「JKSC」とする。

#### 第二条 理念

JKSCは日本とケニア両国、将来的に東アフリカ、全アフリカ、全世界のために協調し努力していくことに最大の目的を置く団体である。双方とも、日本側学生代表、ケニア側学生代表の自覚と責任を持って、互いの中に率直かつ建設的な討論の場を設けるとともに、相互理解、友好を促進する目的において、その他多種にわたる活動を行っていくものとする。本会議の方向性として、我々は両国親善を通じ、世界平和に積極的に寄与していくことをここに誓う。

### 第三条 構成員の資格

J K S Cは、日本・ケニア国内に在住する大学生、大学院生、短期大学生、専門学校生がその資格を有し、特定の政治、宗教、思想、信条から独立かつ中立であることを要する。また、第二条の理念と目的の実現の為に適切であると判断され得た者にその資格を与える。

## 二章 組織

### 第四条 実行委員と実行委員会

1、J K S Cは運営にあたり、実行委員会を常設する。学生たる本会議の参加者は、例外を除き、全員、実行委員になるものとし、実行委員会を組織する。

2、実行委員会は、実行委員長、副実行委員長、研究幹事、総務局員、財務局員、広報局員、企画局員によって構成されるものとする。各局の詳細は、別規定でこれを定める。

3、実行委員の各委員は、必要であれば、兼任を認める。

4、実行委員は任期中、一定額の会費を支払う。金額に関しては、各年度の実行委員の承認により決定し、その金額の変更は全実行委員の過半数以上の承認を必要とする。

5、実行委員は平等に本会議の意思決定に参加し発言する自由を保障される。

6、実行委員会は、定時及び随時に当該年度の参加者を選出する。選出にあたって、第三条の規定に基づき判断する。参加者は、新しく実行委員に加わる。

### 第五条 実行委員会の構成

1、以下に挙げた役員は、各回の全参加者の中から毎年、民主的に選出される。実行委員会は当該年度の本会議終了後または、本会議中に直ちに次年度の役員を選出する。ただし、第一回、第二回、第三回会議はこの限りではない。

2、メンバーのリーダーシップ能力、定例会等出席率、すべてを考慮し、J K S C創設者が実行委員役員の選出を承認する。（第四回会議から）

3、J K S C創設期である3年間は、すべての実行委員会役員が、J K S C創設者によ

って任命される。

#### 1、 実行委員長

実行委員長は、JKSCを代表し統括する者として、実行委員会より1名選出される。ただし、創設期の3年間は、JKSC創設者によって任命される。

#### 2、 副実行委員長

副実行委員長は、実行委員長を補佐する。実行委員会より3名まで選出することができる。第1副実行委員長代理、第2副実行委員長代理、第3副委員長代理は任命される。

#### 3、 事務局長

事務局長は、定例会準備、運営、勉強会企画、スケジュール管理、他局との連絡、またケニア側との連絡を中心となって担うものとする。事務局長は、事務局次長によって補佐される。

#### 4、 局の設置

実行委員会はJKSCの運営を円滑化するとともに、業務の分散を図るために各局を設置する。総務局、財務局、広報局、企画局、学术局、国際渉外局から構成される。また実行委員会は必要に応じて、局を新設することができる。各局の運営は、各局長がこれを司り、その下に必要数の実行委員を配属する。

##### 1)、 総務局

総務局は、JKSCの通常活動を円滑化することをその業務とし、毎回の定例会記録をはじめ、定例会の会場予約、必要書類および名簿、その他の財産の保管をしなければならない。またJKSCの日本国内及びケニア側の関係者、関係団体との連絡を行い、活動内容を随時報告する。

##### 2)、 財務局

財務局は、JKSCの財政を管理することをその業務とし、全ての支出入を記録し、予算作成及び決算報告をしなければならない。また、JKSCの活動を継続させるために必要な財源開拓等の渉外活動を滞りなく行うこととする。

##### 3)、 広報局

広報局は、JKSCの活動についての広報及び実行委員募集の広報を行うことをその職務とし、日本では毎月新聞を発行する。ケニア側は年4回発行。広報基準として、全国の（過渡的な処置として、創立より数年間は首都圏のみ）大学、大学院、短期大学、専門学校に対して、広報活動をする。

##### 4)、 学术局

学術局では、分科会トピックに関する勉強会、研究、及び、その他の講演会を計画することをその職務とし、参加者が有意義な学習をする機会を提供していかなければならない。

#### 5)、企画局

企画局は、会議開催に関する諸々の企画、計画を創ることをその職務とする。JKSCの目的及び各実行委員の意思を反映すると同時に、日本側とケニア側との綿密な打ち合わせに基づき、各企画を行っていくものとする。

#### 6)、国際渉外局

国際渉外局では、以下の事項を担当する。意見交換、及び必要と認められた文化交流、他の交流プログラムの円滑化などを図る。

### 第六条 顧問

JKSCでは、1名以上の常任顧問を置く。その資格は、JKSCの趣旨に賛同し、本会議の社会的地位を保持する責任ある人物に総会の承認を得て、実行委員会が委託する。

### 第七条 後援会

1、JKSCの創立委員、参加経験者、顧問及び賛同者で、会費を支払う者により後援会を構成する。

2、後援会員は、会報を講読し、総会に出席して議決に加わる権利を持つ。

### 第八条 総会

1、日本ケニア学生会議は、本会議の最高決定機関として総会を設置する。

2、本会議は実行委員の招集により少なくとも年に一回、通常総会を開くことを要する。総会は、実行委員及び第七条第1項に該当する者により構成する。実行委員は原則として、全員出席とし、議事決定は全出席者の過半数以上で行うものとする。

3、後援会員は、その合理的判断に基づき必要と認める場合、臨時総会の召集を実行

委員会に要求する権利を持つ。このとき、実行委員会はいかなる事情においても、臨時総会を開催しなければならない。本総会においても、その議事決定は前2項と同様の手続きを要するが、実行委員会は発議者の主張を尊重する義務を有する。

#### 4、内容

- 1 役員を選出及び、罷免の決定
- 2 役員の退会決定
- 3 会計報告
- 4 J K S C 活動内容等の報告
- 5 本規約の改正

#### 5、その他必要と思われる事項の決定

### 第三章 附則

#### 第九条 罰則

実行委員長は、実行委員会の勧告に基づき、第二条及び、第三条に反する行為をした参加者の参加資格を取り消すことができる。

#### 第十条 改正

本規約の改正は、実行委員または後援会員により発議され、総会にて議決するものとする。その際、第八条第2項又は第3項の規定に従うものとする。

#### 第十一条 発効

本規約は実行委員長により公布され、実行委員全員の承認を得た時点で、これを執行する。

## **The By-laws of Japan Kenya Students Conference**

These bay-laws concerning the organization and administration of the Japan-Kenya Students Conference have been developed for the explicit purpose of creating a smooth running and effective organization in Japan and Kenya.

### **CHAPTER 1 General Rules**

#### Article 1

Our Name Our formal name is the Japan-Kenya students Conference (henceforth to be referred to as "JKSC" in this document).

#### Article 2 Our Purpose

JKSC's purpose is to create and promote avenues of cooperation between Kenya and Japan now and in the future to expand to East Africa, Africa and the global world. We will endeavor to have clear and constructive debate and many kinds of activities to promote a good relationship and cooperation. We are committed to making a contribution to world peace actively through effective communication.

#### Article 3 Qualifications for Membership in JKSC

All university students, postgraduate students, junior college students and vocational school students who live in Japan and Kenya are eligible to join in JKSC. They need only to be independent of and neutral on any politics, religion, thoughts and creeds. JKSC gives the right to students who are able to qualify and adhere to the idea and purpose of the Article 2. For one to be a member he/she should apply for admission.

## **CHAPTER 2 The Organization**

### **Article 4 Executive Committee Membership**

1. The JKSC Executive Committee will be dedicated to implementing the intended purpose of JKSC, including encouraging all participants through the election process to organize and become member of the Executive Committee, with some exceptions.
2. The Executive Committee consists of the chief executive, the vice chief executive(s), the secretary, members of the General Affairs division, members of the Financial division, members of the PR division and members of the Planning division, members of the International affairs division and members of the academic division. The divisions will be explained in detail afterwards.
3. Each member of the Executive Committee can hold more than one post, if necessary.
4. Each member of the Executive Committee will be required to pay membership dues. The amount is decided by the members of the Executive Committee every year. The agreement of the majority is necessary to change the amount of the membership dues.
5. Each member of the Executive Committee has the right to take part in and speak concerning decisions made in JKSC.
6. The Executive Committee may choose members any time. When members are chosen, they must be judged as to whether or they meet the qualifications stated in article 3. If they do, they may take part in the Executive Committee.

### **Article 5 The Constitution of the Executive Committee**

1. The officers below are chosen democratically in and by the members every year. The Executive Committee must appoint new officers at the end of the JKSC or during its term of service, as may be deemed necessary.
2. Confirmation of the Executive Committee members shall be done by the founder and will be based on merit such as member's participation in volunteer activities, upright CV, good leadership qualities etc.
3. The Executive Committee in the first, second and third JKSC conference (3 years) will be appointed by the founder of the JKSC.

1. Chief Executive

One chief executive will be appointed by the founder for the 1st three years to represent and supervise JKSC after which the executive committee will be elected democratically by the members.

2. Vice Chief Executive

The Vice Chief Executive assists the chief executive. The Executive committee may choose from one to three vice chief executive(s). 1st Deputy Vice Chief Executive, 2nd Deputy and 3<sup>rd</sup> Deputy Vice Chief Executive may be appointed.

3. Executive Secretary

The Executive Secretary's responsibility is to set up, make contacts, schedule and organize study meetings and other lectures to provide the chance for members to study. The secretary also plays a central part in communication. The Executive secretary also plays a central part in communication.

4. Establishment of Divisions

The Executive Committee is responsible for establishing a General Affairs Division, Financial Division, Public Relations Division, Planning Division, Academic affairs division and International Affairs Division to ensure the administration of JKSC as a smooth running, effective, and balanced organization. In addition, the Executive Committee may set up new divisions as necessary. The head in each division will be responsible for its operation and should have necessary manpower for its operation.

- 1), General Affairs Division

The General Affairs division is responsible for recording every meeting, reserving the meeting place and keeping the necessary materials, activities organized and running smoothly. It is also responsible for keeping in communication with the persons

concerned and interested parties in both Japan and Kenya and a report should be prepared concerning its activities to presented at every meeting.

#### 2), The Financial Division

The Financial division is responsible for managing the financial affairs of the JKSC. All of the outgoing and incoming transactions are to be recorded, as well as, the creation and implementation of the budget. The Financial Division will also play a large part in expanding public contacts for the purpose of finding new sources of revenue to ensure JKSC's effective efficient operation.

#### 3), Public Relation Division

The Public Relations (PR) Division is responsible for arranging public activities for JKSC and recruitment of potential new members. The PR division is also responsible for the publication of the quarterly JKSC newsletter. JKSC is responsible for presenting its work, cause, and purpose to universities, graduate schools, junior colleges, vocational schools and the public at large.

#### 4), Academic Affairs Division

The Academic Affairs Division is responsible for organizing academic workshops, research or any other academic event that may arise.

#### 5), Planning and Development Division

The planning and Development division is responsible for bringing the JKSC into the twenty-first century through plans and projects that are appropriate in fulfilling the purpose of which JKSC is dedicated, including cooperation between Japanese and Kenyan delegations.

#### 6), International Affairs Division

International Affairs Division is responsible for ensuring smooth exchange of values such as culture and any other exchange programs as it may be deemed necessary.

#### Article6 Regular Adviser

JKSC has at least one Regular Adviser to be appointed at the General-Meeting. The Executive Committee will empower only an Adviser who is dedicated to the mission of JKSC, it's purpose, and standing as an effective organization.

#### Article7 Sponsor's committee

1. The sponsors committee consists of the founders, the people who have participated at least once, the Adviser and the supporters of JKSC. All members of the sponsor's committee are required to pay membership due.
2. Members of sponsor's committee are eligible to vote and speak in the General-Meeting and subscribe to the bulletins.

#### Article8 General-Meeting

1. JKSC recognizes the general meeting to be its own Supreme decision-Making Institution.
2. The regular General-Meeting is to be held at least once a year by the members of the Executive Committee. All members of the Executive Committee and the people who qualify in accordance with Article7, 1 can attend the general-Meeting. As a matter of principle, all members present will determine the proceedings.
3. The sponsor's committee has the authority to require the Executive Committee to call an emergency General-Meeting in the event that such a meeting is deemed necessary. The Executive Committee must concur as soon as possible. Decision made by members must be initiated in keeping with Article 8.2. The executive Committee should consider the opinions of proposer with respect
4. Contents.
  1. Decisions concerning choosing and dismissal of officers
  2. Decisions concerning forced resignation of officers from JKSC
  3. Financial report
  4. JKSC Activity report for the current year
  5. Revision of JKSC by-laws
  5. Other appropriate business deemed necessary by members.

### **CHAPTER 3 Appendix**

#### Article9 Disciplinary Regulations

The chief executive can withdraw the right of any member who violet the regulations set forth in the JKSC by-laws, in agreement with the counsel of the Executive committee.

#### Article10 Revision of By-laws

The revision of JKSC by-law may be proposed only by members of the Executive

Committee and/or officers of the sponsor's Committee and must be brought up in the General-Meeting for a vote. The revision must follow in accordance with the regulations set forth in Article 8.3 and 3.

#### Article 11 Execution of By-Laws

These regulations are promulgated by the chief of the Executive Committee and carried out in agreement with all members in the JKSC.

## 編集後記

今回、私は広報だったはずなのに、新聞の編集作業を全くせずに報告書の校正をする、という経験乏しい作業員だった印刷を延期する事になったが少しでも日本ケニア学生会議の活動に積極的に携わる事が出来て良かった。印刷の締め切り間際に学校の宿題がたまったり校正している間に授業が終わったりとやる事の多さに戸惑った。編集は大変だという事も実感した。それでも校正が終わり、印刷所に出す準備が整ってくると達成感も味わえる。(菰田 文江)

\*

原稿を書くのも集めるのも大変だった。ケニアでスケジュールはきつかったものの、精神的にはのんびりと過ごせたが、日本に帰ってきてから報告書作成のためにパソコンに長い間向かう日々が続き、それは想像以上に長い時間を費やさなければならず、ケニアでの日々とのギャップを感じた。報告書作成のために色々犠牲にして時間を割いたが、ケニアを訪れたみんなの言葉を沢山の人の届けたかったし、ものづくりの大変さ、パソコンの怖さ(何度も原稿が消えた)、人の性質など色々学べた。ケニアに渡航したメンバーも、しなかったメンバーもみんな協力してくれたことを嬉しく誇りに思う。この報告書を帰国後、病気と闘っている京子に一番に捧げたい。(矢向 瞳)

\*

こんにちは。毎日暑い日々が続いていますが、皆さんはいかがお過ごしでしょうか。私は大学が夏休みに入ったので、しばらくのんびり過ごしたいなあ、と思っています。どこか涼しい高原にでも行きたいですね。しかし実際は、集中講義を受けるためにいまだ毎日大学に通っているのですが・・・。

さて、第2回日本ケニア学生会議本会議の報告書が完成いたしました。早いもので、もう7月です。報告書の原稿を書き始めた時にはまだ桜が咲いていましたが、今ではもう朝顔が咲いています。長くて短い3ヶ月でしたが、こうして無事発行することができた

こと、本当に嬉しく思います。この本を読んでもくださった皆様に、少しでも私たち日本ケニア学生会議のメンバーが、ケニアで何をして、何を感じて、何を考えていたのかをお伝えできればと思っています。(梅川瑞穂)

\*

第二回本会議が終わり、3ヶ月が過ぎた今、ついにこの第二回日本ケニア学生会議ケニア開催報告書が完成いたしました。前回の報告書の反省を活かし、編集したつもりですが、発行が遅れてしまうなど、まだまだ至らない点があったと思います。製作にあたっては、多くの方々にご協力いただきました。特に、ほとんどの英文原稿をタイプして、電子メールで送ってくれた JKSC ケニア側学生アドバイザーのオロー先生、文章の校正をしてくださった JKSC 創設者の後藤千枝さん、英文の校正をしてくださった方々、本当にありがとうございました。この場を借りて心より御礼申し上げます。そして、この報告書を手にとり読んで下さった貴方、この報告書にこめられた私達の思いは通じましたか。それはみんなばらばらで統一されていないかも知れませんが、私達一人一人の伝えたい事や、熱い思いを感じていただけることがこの報告書が成功する条件だと私は考えています。少しでも、JKSC に対して何かを感じていただければ幸いです。(鳥飼恵美子)

#### \* 訂正のお詫び

第一回ナイロビ本会議報告書 24 頁に掲載されている新聞記事、後藤千枝の「私と仕事」の掲載紙、掲載日を明記していませんが、1999 年 10 月 18 日の読売新聞に掲載されたものです。また、この記事に「ケニア側カウンターパートナー代表に、ナイロビ大学のオダリますみ講師を任命した」とありますが、2000 年 2 月にナイロビ在住の神戸俊平獣医師をケニア側カウンターパートナー代表に任命いたしました。

2001 年 10 月発行

編集・発行 日本ケニア学生会議  
印刷・製本 (株) ポプルス

連絡先：日本 JKSC 機関事務所

451-0021 名古屋市西区天塚町 4-12

e-mail : JapanKenya@aol.com

TEL 090-8136-3988

日本ケニア学生会議公式ホームページ：

<http://members.aol.com/JapanKenya/JKSC.htm>